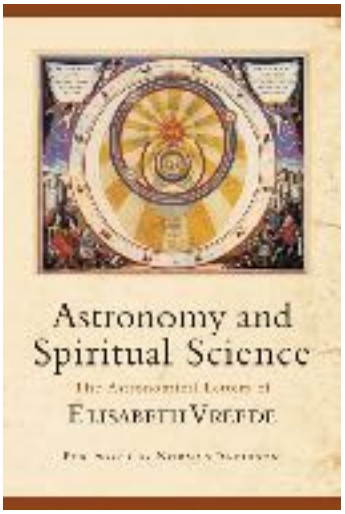
エリーザベト・フレーデ
「天文学と人智学」
〔第1年目（1927年9月～1928年8月）〕

〔目次〕

・エリーザベト・フレーデについて
・著書『天文学と人智学』について
・『天文学と人智学』目次
・『天文学と人智学』序文

〔第1年目（1927年9月～1928年8月）〕

（Letter 1）1927年9月発行
天文学と人智学
Astronomie und Anthroposophie
（Letter 2）1927年10月発行
リズムと星座配置
Über Rhythmen und Konstellationen
（Letter 3）1927年11月発行
星空の日周運動について
Über die Tagesbewegung am Sternenhimmel
（Letter 4）1927年12月発行
太陽の年周運動 ― 三重の太陽
Über die Jahresbewegung der Sonne - Die dreifache Sonne
（Letter 5）1928年1月発行
太陽と星々の年周運動について
Über die Jahresbewegung von Sonne und Sternen
（Letter 6）1928年2月発行
私たちの惑星系について
Über unser Planetensystem
（Letter 7）1928年3月発行
太陽と恒星の年周運動について。復活祭。
Über die Bewegungen von Venus und Merkur. Das Osterfest
（Letter 8）1928年4月発行
惑星界について
Über die Planetenwelt
（Letter 9）1928年5月発行
日食と月食について。五旬節（ペンテコステ）。
Über Sonnen- und Mondfinsternisse. Das Pfingstfest
（Letter 10）1928年6月発行
食について。サロス周期。
Über die Finsternisse. Die Sarosperiode
（Letter 11）1928年7月発行
歳差運動について
Über die Präzessionsbewegung
（Letter 12）1928年8月発行
歳差について。章動。
Über die Präzession. Die Nutation



●エリーザベト・フレーデについて

エリーザベト・フレーデ（Elisabeth Vreede/1879–1943）は、
オランダ出身の数学者・天文学者で、ルドルフ・シュタイナーの直弟子の一人。

1923年末（クリスマス会議後）から
一般人智学協会の理事会のメンバーとして活動していたが、
1925年のルドルフ・シュタイナー死後、
人智学協会内部での権威争い・カリスマ争いがあり、
シュテッフェンを中心としたドルナハ側の多数派グループから
イタ・ヴェークマンとともに1935年に除名され、
自分が立ち上げ・運営していた数学・天文学セクションの指導権を失い、
収集・構築に貢献した観測資料やアーカイブへのアクセスも断たれ、
除名後も活動を続けていたが、1943年にスイスのアスコナで亡くなる。

なお、ヴェークマンも含め、その名誉が
正式に回復されたのはなんと2018年のことだという。
つまりそれまで何らかの権力闘争が続いていただろうことを思うと、
複雑な気持ちになる。

それはそれとして、イタ・ヴェークマンやこのエリーザベト・フレーデ、
その他の除名された、特に自然科学系の人智学研究者の仕事は
あまり日本でとりあげられることはなかったようなので、
このフレーデやその影響を強く受け、
伝統的な占星術を超えた新しい星の霊的理解を進めた
ヴィリー・ズーヒャー（Willi Sucher/1902-1985）も含め、紹介していければと思う。

ちなみにヴィリー・ズーヒャーは、ドイツのカールスルーエ生まれで、
シュタイナーが命名したアストロゾフィー（Astrosophy）の
創始者としても知られている。

1919年（17歳）で叔父を通じルドルフ・シュタイナーの思想に触れ、
人智学に傾倒し星と人間の関係に強い興味を抱き、
1927年にフレーデの講演で、
シュタイナーが死の瞬間の天体配置について語った内容を知り、
それをきっかけに「死の星図」の研究を開始。
1928年にはフレーデの招待でドルナッハへ。
フレーデとの協力関係が始まり、10年にわたり共同研究し、
1934-35年には彼の論文が出版されている。

第二次世界大戦後、イギリスやアメリカに移住し、研究を継続。
1985年5月21日に死去。
死の直前にAstrosophy Research Centerを設立し、
現在もこのセンターが著作を管理、その資料の多くが公開されている。

その主な著書には、
『Cosmic Christianity and The Changing Countenance of Cosmology』
『Isis Sophia: An Outline of a New Star Wisdom』（全6巻シリーズ）
などがある。

●『天文学と人智学』について

『天文学と人智学』（Astronomie und Anthroposophie）は、
1927年9月から1930年8月までの3年間にわたって、
彼女が毎月執筆した「天文学の手紙」のコレクション。
現代天文学と古典的な占星術が、
ルドルフ・シュタイナーの人智学の視点から統合して解説されている。

今回とりあげるのは、3年間のうち最初の一年、1927年9月〜1928年8月。
天体の動きと霊的背景についての「基礎編」。

●序文

　天文学は、霊性へと再び戻される最も大きな機会を有しています。
　この回覧状（Rundschreiben）は、シュタイナー博士が「霊学自由大学」に関する手紙の中で、執行評議会の任務として述べたことを、非常に予備的な形で実現しようとする試みです。

「その仕事の成果を、求める人々に可能なあらゆる方法で届けること……ゲーテアヌムでの仕事に会員全体が参加することが、協会の繁栄にとって最良の保証となります。そして執行評議会は、会員たちによって行われるすべてのことを、協会の内容の一部とするよう努めます。」

　これらの言葉は、最初に計画された形の回覧状が、あくまで予備的な段階に過ぎないことをすでに示しています。また、将来的にさらに拡張する可能性への道筋をも示しています。しかし、特に天文学の分野においては、まずそれを望む会員の方々に一般的な情報を広めることが正当化されると考えられます。

　ルドルフ・シュタイナーの全体の仕事には、壮大な宇宙生成論が含まれています。そしてそれは、現代の一般的な人間の意識とは対照的です。現代の意識は、数学的・機械論的なきわめて貧弱な世界観しか持っておらず、それが天文学的な世界観をも形作っています。しかし、健康な人間の魂には、宇宙の法則を知りたいという欲求があります。その法則は、人間がこの宇宙の中にしっかりと組み込まれていると感じられるような構造を持っています。今日の人々は、宇宙を体験したいと願っているのです。シュタイナー先生は『魂の暦』において、そうした「宇宙への共感」のための比類ない導きを与えてくださいました。年のめぐりと同様に、宇宙におけるあらゆる時間的な出来事にも、それぞれ固有の生命があります。

　宇宙の時間的な出来事を知り、まずその働きかけている力とのつながりを感覚的に捉えることが大切です。宇宙についての認識は、三つの段階を経て生まれます。それは、天文学から占星術へ、そしてアストロゾフィーへと進む道です。しかし、これらの認識の形は、今日ではどれも多かれ少なかれ「魔法を解かれた」状態になっています。天文学は、本来戻るべき霊性を欠いています。占星術は、古代の霊性を保持しているのですが、現代にはもう完全に当てはまらないものとなっています。真のアストロゾフィーは、今日ではおそらくルドルフ・シュタイナーの精神科学の外には見いだせません。それはアントロポゾフィー的な宇宙科学の目標でもあり、またその出発点でもありました。

　そこで今回は、われわれの師が1912年にヘルシンキで行った「天体および自然界における霊的存在たち」という素晴らしい連続講義を再現することから始めます。アントロポゾフィー的な天文学への、より良いより完全な入門書は、これほど優れたものはありません。

　この回覧状の発行時期もまた、宇宙の中で活動している存在たちに思いを向けるべきであることを示唆しています。ミカエル祭が近づいています。キリストの使者であり太陽の使者であるミカエルは、星々の世界において特別な任務を持っています。彼が星の剣を振るうとき、夏の暑さの硫黄の竜は消え去ります。人間が生まれるとき、ミカエルの世界意志がその誕生の星座の中に生きています。ミカエルの介入がなければ、人類

と星々の世界は分裂してしまったでしょう。彼はそうして占星術をもたらし、また彼の時代に精神科学が生まれることを可能にしたことで、アストロゾフィーを与えてくださいました。

次回は、世界のリズムと星座の配置について、さらに詳しくお話しします。

ドルナッハ、1927年9月
心からのご挨拶を込めて
エリーザベト・フレーデ
博士
数学・天文学セクション長

（Letter 1）天文学と人智学
Astronomie und Anthroposophie
1927年9月発行

●基本的な視点

ルドルフ・シュタイナーの人智学（精神科学）は、現代天文学と霊的宇宙論を橋渡しする。外側の感覚世界（マヤ＝幻）は、過去の霊的存在たちの行為の「残骸」に過ぎず、その背後にある霊的現実を明らかにすることが目的である。星の世界は「霊的存在の植民地」であり、天体は階層的な霊的存在たちの過去の活動と深く結びついている。

星界を観察することは、神々の身体、そして最終的に「神聖そのもの」を観察することである。天文学は人智学を通じて、再び宗教的・霊的な次元と結びついている。

このLetterは、1927年のヘルシンキ講義（『天体と自然の中の霊的諸存在』GA136）を基に、天体を単なる物質ではなく「霊的存在の過去の行為の痕跡」として読み解く、シュタイナー的人智学的天文学の入門的内容となっている。

●要約

全体の主題

○霊的階層と天体の対応（主要図式）

人智学では、人間より上位の9段階の霊的存在が宇宙を構成する。主な対応は以下の通り。

・第三階層（個別・民族・歴史に関わる）

アンゲロイ／天使（月）：人間の守護霊
アルヒアンゲロイ／大天使・アルヒャイ（月圏）：時代霊

・第二階層（惑星・太陽に関わる）

エクスシアイ ／形態の霊（惑星）：惑星の外形・構成
デュナメイス／運動の霊（惑星）：
　惑星の内部運動（潮流・地震・気候など）
キュリオテテス／叡智の霊（太陽＋固定星）：
　すべての惑星・植物に共通する垂直方向（太陽志向）の力。

・第一階層（最高位・宇宙全体を統合）

トローネ／意志の霊：惑星運動の調整
ケルビム／調和の霊：惑星間の秩序・理解
セラフィム／愛の霊：全星界の相互理解・統合

○特別な役割

・彗星：セラフィム・ケルビムの直接的な活動領域。
　惑星系の「法則の例外」として、宇宙の浄化と新たな衝動をもたらす。
　（「神の杖」と呼ばれた古い認識）。

○宇宙進化の歴史的背景

土星紀・太陽紀・月紀・地球紀の各段階で、星の世界のあり方が変化。
かつては霊的存在が直接的に星を表現していたが、徐々に撤退。
その結果、現代の「機械的な天文学的法則」が生まれたが、
それが「自由」の発展のための必要条件となっている。
撤退した霊的存在の子孫が、自然界の精霊（グノーム・ウンディーネ・シルフィ・サラマンダー）や、鉱物・植物・動物のグループ魂として活動している。

○自然界とマーヤの成立

自然の法則・力・知覚は、上位の霊的ヒエラルキーの子孫たちの痕跡である。
ルシファー的（光を内側に留め、惑星を可視化）、アーリマン的（物質を重くし、密なマーヤのベールを作る）な後進的存在が介入し、物理的な惑星・物質世界を生み出した。
衛星は「死体」のような過去の記憶、惑星は太陽系の「肉体」、太陽は植物界の純粋なエーテル体に相当する。

○流星・彗星の特別性

彗星は最高霊の浄化活動の産物だが、途中でトローネ（意志の霊）のレベルにおける反対勢力（鉱物形成力）が加わり、流星群を生んでいる。
これによって、ニュートン的機械論だけでは説明できない「予測不能な要素」が宇宙に残ることになっている。

●本文（意訳）

　ルドルフ・シュタイナーの霊学（精神科学）は、私たちに精神にふさわしい宇宙論を贈ってくださいました。それは、人間を再び世界像の中に位置づけ、天と地を一つの統一として結びつけるものです。同時に彼は、あらゆる点で、この認識と今日の科学で行われている天文学の認識との間に橋を架けようと試みました。このような橋が必要であることは、すべての霊的認識の根本原理から明らかです。すなわち、外的な感覚世界はマーヤー、すなわち幻想であり、精神科学はその背後にある現実へと進もうとするからです。マーヤーと現実がどのように、どこで触れ合うのか、それが大きな問いとなっています。この問いについて、ルドルフ・シュタイナーは1912年にヘルシンキで行った一連の講義「天体および自然界における精神的存在たち」の中で語っています。

　この講義シリーズを正確に研究すると、外的なマーヤーから内的な精神的な現実への道が示され、過去に目を向けるよう指示されていることがわかります。現実に対応するものを探すためには、過去に遡らなければならないからです。「物質的な天体世界は、対応するヒエラルキーの霊的存在たちの過去の行為の残滓を表しており、それらはもはやその余波としてのみ現在に及んでいます。」

したがって、星の世界もまた、他の自然と同じくマーヤーです。それも過去のマーヤーなのです！　このマーヤーの背後に進むと、星々は「霊的存在たちの植民地」として現れます。私たちは、人間を超えて九段階に昇る高いヒエラルキーの存在たちへと導かれます。それらはすべて、何らかの形で星の世界やその宇宙論的発展と結びついています。ルドルフ・シュタイナーの著書『神智学概論の中で、それらがより詳しく描写されています。

人間の上に最初に位置するのが、天使的存在たち、すなわちアンゲロイの領域です。彼らは人間の守護霊であり、転生から転生へと人間を伴います。彼らは月圏に住んでいますが、最初は月そのものでは力を発揮できません。それにはより大きな力が必要であり、それは大天使やアルヒャイ（原初の力）に見出されます。これらの存在たちは、天使たちとともに霊界の最下位のヒエラルキーを構成しており、地上では民族と大きな時代を導いています。大天使は民族霊であり、アルヒャイは時代霊です。このように、月まで及ぶこのヒエラルキーは、主に個々の人間と民族の歴史的生活に関わっています。

太陽においては、私たちが第二のヒエラルキーと呼ぶ存在たちが見出されます。それには、形態の霊、運動の霊、叡智の霊が属します。これらの存在たちはある意味で太陽に住んでいますが、そこから惑星たちに働きかけ、惑星を通じて地球にも力を降ろします。形態の霊はそれぞれの惑星に外的な形、すなわち配置を与えます。運動の霊は惑星の内的な可動性を生じさせます。これは空間内の運動ではなく、数世紀、数千年をかけて、たとえば地球上での潮の満ち引き、火山、地震、気象的・気候的な影響によって引き起こされる変化のことです。また、叡智の霊については別の働きがあります。彼らは太陽そのものから働き、惑星系全体に太陽の力を媒介します。形態の霊や運動の霊の働きによって、各惑星の内的な配置や可動性はそれぞれ異なりますが、叡智の霊の働きはすべての惑星に対して同じです。この共通の働きを最も簡単に追うことができるのは植物界です。植物の形はさまざまです。葉のつき方やつるの巻き方は、異なる螺旋的な法則性を示しています。これには、それぞれの惑星に働きの起点を持つ形態の霊や運動の霊から来る惑星の力が反映されています。しかし、すべての植物に共通しているものがあります。それは、茎が大地から離れて太陽に向かって垂直に伸びることです。これに、すべての植物に対して同じである知恵の霊の働きが表れています。それは、惑星系全体の最も単純な共通の意識のようなものです。ちょうど人間のすべてに、無意識から共通の感情や衝動が湧き上がるようにです。叡智の霊は太陽だけでなく、すべての恒星にも見出されます。したがって、恒星界全体の最初の共通性は、これらの叡智の霊に求められます。そのため、彼らはキリストの入り口とも呼ばれます。キリストは、ゴルゴタの神秘以前、まだ地球と結びついていなかった時代に、叡智の霊を通じて太陽に光を注ぎ込んだのです。

第一のヒエラルキーには、宇宙全体で最も崇高な存在たち、すなわちトローネ（玉座）、ケルビム、セラフィムがいます。これは古い秘教的叡智がそう呼んだものです。トローネ、あるいは意志の霊たちは、惑星の空間内の運動を司ります。ケルビムはさまざまな運動に秩序をもたらし、惑星から惑星への理解を可能にします。彼らは惑星にとっての使者であり、人間世界にとっての天使が使者であるのと同じです。セラフィムはさらに、星の世界全体に関して同様な任務を持ちます。彼らは太陽から他の星へ、恒星から恒星へ相互の理解をもたらし、宇宙全体を一つの統一にまとめています。

ここで次のような図式が得られます。

セラフィム／愛の霊
ケルビム調和の霊／　　― 彗星
トローネ（玉座）／意志の霊
キュリオテテス／叡智の霊 ― 恒星
デュナメイス／運動の霊
エクスシアイ／形態の霊　― 惑星

アルヒャイ／時代霊
アルヒアンゲロイ／大天使 ― 月
アンゲロイ／天使
人間　　― 地球

セラフィムとケルビムについては、彗星が彼らの特別な活動領域であることを付け加えなければなりません。宇宙の法則性の反逆者とも言える彗星が、これまで見てきた最も高い存在たちに帰属すると言われるのは、驚くべきことかもしれません。これを理解するためには、現実とマーヤーの関係にもっと深く入らなければなりません。

以上述べたことは、ある意味で、神的な世界計画を含んでいます。それは高いヒエラルキーの存在たち（特に第一のヒエラルキー）が、神的な世界霊から受け取り、巨大な宇宙進化の全過程を通じて実行するものです。しかし、この過程の中で、いくつかのことが介入し、霊的な現実が今日の感覚的に知覚可能なマーヤーとなりました。私たちすべてがその中で生きているマーヤーです。その中でも特に、惑星と恒星の運動（いわゆる見かけの運動も含めて）が非常に規則正しく行われるため、現代の人には次の疑問が湧くかもしれません。「トローネなどの存在たちは、惑星の外的な運動についてまだ何を司っているのでしょうか？　すべて厳格な機械的法則に従っているではありませんか！」

しかし、昔はそうではなく、今日もある意味ではそうではありません。すでに彗星は一定の例外を示しており、そこから、こうした運動が最も崇高な霊たちによって導かれなければならないことが、かすかに予感されます。今、私たちは宇宙がさまざまな段階を経てきたことを考えなければなりません。ルドルフ・シュタイナーの『神秘学概論』では、それらが土星状態、太陽状態、月状態、地球状態として描写されています。また、『人智学指導原則』で与えられたことも加えなければなりません。それぞれの状態において、星の世界も異なっていました。古い土星では、実際には先に挙げたような霊的存在たちだけが存在していました。しかし、それらはまだ星の世界として現れておらず、せいぜいその最初の兆しがあったに過ぎません。古い太陽の発展期には、星々は霊的存在たちの顕現でした。彼らの運動などは、住んでいる存在の直接的な表現であり、人間の肉体が住む霊によって運動や表情で導かれるのと同じでした。次の段階では、霊的存在たちはもはや天体に働きを送るだけで、自分たちはますますそれらから遠ざかりました。このことを少し明確にするために、地球発展の歴史的経過をこの観点から簡単に述べてみましょう。地球そのものは第四の段階であり、ルドルフ・シュタイナーが「作業世界」と呼んだものです。そこでは、この回覧文の冒頭で述べたことが実現されています。しかし、歴史的な時代において、人間は自分の意識の中で過去の段階を再体験しました。たとえば、古インド時代には、人間は星の世界をほとんど顧みず（ヴェーダ以前の時代に遡らなければなりません）、霊的存在たちそのものに依拠していました。古ペルシア時代には、ゾロアスターが太陽存在の啓示を受けました。（太陽そのものは、当時すでに今日と同じ法則で動いていましたが、古い太陽状態ではまだ太陽霊の直接的な表現でした。古ペルシア人は、後の時代の中でより古い段階を体験していたのです。）古カルデア人やエジプト人は、天体における霊的存在の働きを特に強く感じていました。それゆえ、当時の素晴らしい占星術が生まれました（ただし、それが今日の人類に同じ形で適用されるべきではありません）。それは古い月状態の繰り返しのようなものでした。彼らは太陽、月、惑星、星々と結びついた存在たちを見ていましたが、これらの存在たちはもはや高いヒエラルキーの直接的なものではありませんでした。エジプトの神々の姿、人間の体に動物の頭、あるいは動物の姿そのものがエジプトの星空に現れるのは、先に述べたヒエラルキーの存在たちそのものではなく、彼らが分離した子孫です。これらの子孫が、今やヒエラルキー自身の退いたかたちで活動を行っています。惑星系の運動などの計画が定められた後のことです。こうした多くの下位の神々が宇宙に働いており、後期のエジプト人やカルデア人は、もはや星の神々そのものに昇ることができず、これらのより下位の存在の働きを見ていました。これらのヒエラルキーの子孫たちが、今日人間が「自然に」起こっていると思っていることを行っています。人間の自由の発展のために、高次

の存在たちが星の世界と自然全体から退き、それを一見精神のない機械に委ねることが必要となったのです。（この退くことの意味とあり方については、後にさらに詳しく述べられます）

この機械の中でも、またすべての自然現象の中でも、やはり霊的存在たちが働いています。それは「高いヒエラルキーの子孫」たちです。春に植物が土から出て、花や実をつけ、秋に枯れること、南半球で春の生命が始まること、これらを自然霊、シルフィー、ウンディーネ、グノーム、そして形態の霊から分離したサラマンダーたちが行っています。彼らは、地球上を導く回帰時期の霊たちに率いられています。この回帰時期の霊たちは、地球をその軸のまわりに回転させ、他のものは地球や惑星を太陽のまわりの法則的な軌道に導いています。回帰時期の霊たちは、セラフィムとケルビムの最高のヒエラルキーの子孫です。一方、運動の霊、叡智の霊、意志の霊の子孫としては、動物、植物、鉱物のグループ魂と呼べる存在たちがいます。

次の図式に、どのヒエラルキーからどのような「子孫」が分離されたかを記すことができます。

セラフィム
ケルビム ― 回帰時期の霊
トローネ ― 鉱物のグループ魂
叡智の霊 ― 植物のグループ魂
運動の霊 ― 動物のグループ魂
形態の霊 ― 火の霊
人格の霊（アルヒャイ） ― グノーム
大天使 ― ウンディーネ
天使 ― シルフィー

これらはすべて、創造主よりも低次の存在であり、神の委託によって、自然的秩序と道徳的秩序がもはや一致せず、外的な観察者にとってはある種の二元性を呈するようになりました。それゆえ、自然と宇宙において、私たちはマーヤーに直面します。そこで、単なる自然力は自然霊の活動の反映として現れているのです。ヒエラルキーの直接的な働きの代わりに、今や自然法則がマーヤーの世界における回帰時期の霊たちの反映として見出されます。このように、これらの「子孫」存在たちは、私たちを外的な科学が扱うものに一歩近づけてくれます。

これらすべてが、人間が内的に自由を体験するために必要な外的世界の法則性の中で行われている一方で、彗星は完全にこの法則性に入りきらないものです。周期彗星として惑星系の法則に多少入り込んでいるとしても、新しい彗星の出現（ケプラーが言ったように、彗星は海の魚のように多い）は、常にこの法則の破れを示しています。彼らは、まだ最高の力、すなわちセラフィムとケルビムの直接的な介入が感じられる要素です。まさに通常の法則性を破るものが、最高の力と洞察を必要とします。彗星は、私たちの惑星系のまったく特別な装置であり、その極の対極が惑星系の月たちです。月が惑星系が引きずっている一種の死体であるのに対し、彗星は太陽系内のアストラル大気を絶えず浄化するものです。昔はそれらを「神の鞭」として恐れ、多くの迷信が結びつきましたが、精神的な視線にとっても、彼らは不純なアストラル力を宇宙から除去したり、新しい衝撃をもたらしたりする存在です。

このように、ルドルフ・シュタイナーがヘルシンキ講義で述べたように、さまざまな天体に秘教的な視線を向けたとき、惑星系の構成要素を見ることができます。月――火星、木星、土星なども月を持っています――は全体として死体の印象を与えます。人間の死体がある意味でかつて生きていたものの記憶像であるように、惑星系の月はかつて生きていた状態の記憶であり、完全に死に絶えたものです。惑星系は、最下位の肢として死体、すなわち月を持ち、人間が最下位の肢として肉体を持つようにです。一方、太陽系内の惑星を

見ると、それらはすべて合わせて、肉体の境界としての秘教的印象にほぼ一致しています。惑星は、太陽系の肉体を表していると言えるのです。各惑星からは、人間の内臓を形成する働きが出ています。

太陽を惑星系内の恒星として見ると、それは植物界のエーテル体に似た印象を与えます。人間のものではなく、植物界の純粋でアストラルに汚されていないエーテル体です。

太陽系の星体は、実は先ほど挙げたような存在たちの豊富さ――ヒエラルキーと回帰時期の霊たち――から成り立っていますが、そこには人間の悪しき思考から発するものや、いわゆる遅れた存在たちから来るものも含まれます。（これらの物質こそ、彗星が除去しなければならないものです。）

惑星の「自我」についても語ることができます。地球については「地霊」であり、その外的な世界における反映が地球の意味です。古い時代には、エロヒムの一人であるヤハウェあるいはエホバがこの地霊でした。ゴルゴタの神秘以来、それはキリストであり、「地球にその意味を与えた」方です。したがって、他のいかなる精神的存在よりもずっと内的に見出されなければなりません。

地球のアストラル体を表す回帰時期の霊たちは、人間のアストラル体とある種の類縁性を持っています。どちらもある意味で多様性を持っています。私たちは、『魂の暦』で示されているように、年間の運行を魂的に受け止めることで、この類縁性を感じます。また、その外的な反映である自然法則も、人間の魂から生まれた、魂に親しいものです。一方、自然力（自然法則を知ることでそれを支配することはできても）とは、人間はそれほど内的な類縁性を持ちません。これらの自然力は、自然霊、グノーム、ウンディーネなどの反映です。そうした存在たちの多様性が地球のエーテル体を形成します。しかし、人間は自分のエーテル体においてまず統一としての自分を感じます。それゆえ、自然霊の領域とは内的には近しくありません。

感覚世界を地球の肉体として、単純に感覚的知覚に現れるものとすると、次の図式が得られます

惑星霊 — 自然の意味 — 我
回帰時期の霊 — 自然法則 — 星体
自然霊の世界 — 自然力 — エーテル体
感覚世界 — 知覚 — 肉体

しかし、宇宙にはこれまで述べてきた存在や力だけが存在しているわけではありません。そうであれば、宇宙全体は実体性のみから成り、可視的な物質はなく、天体も地球の物質も私たちにとって見えず、触れられないものになってしまいます。マーヤーを完全に理解するためには、『神秘学概論』でルシファー的およびアーリマン的と呼ばれる他の存在たちが発展に介入したことも考慮しなければなりません。彼らは高いヒエラルキーの存在ですが、通常の霊たちがより高い段階に昇るのに対し、留まり、遅れています。たとえば、本来運動の霊であるべき形態の霊が、形態の霊の段階に留まってしまったものがあります。エーテル的な土星圏や木星圏が形態の霊によって形成され、内的な可動性が運動の霊によって与えられたとき、これに反逆的な形態の霊たちが対抗し、運動に参加する代わりに、ある点で停滞して球体に形態を生じさせます。それが、今私たちが空に見る惑星なのです！　惑星圏はエーテル的なものであり、アストラル力が働いていますが、惑星自体はその球体の周辺を動くだけです。同時に、他のルシファー的存在たちが、セラフィムとケルビムが太陽の霊的光を全世界に運ぶのに反対し、それを奪い、一部を惑星に留め、他の一部を外に押し出して外的に知覚可能な光とし、惑星を外から見えるようにします。アーリマン的存在たちは後に地球に固い物質を入れ、マーヤーの厚いヴェールを作り、それが外的な感覚世界となっています。このように、外的な研究の対象となるすべてのものは、ルシファー的な外的な光の要素とアーリマン的な重さの要素を何らかの形で取り込んでいます。これもまた、精神的な現実の上に広がるマーヤーの一部です。

これを特別な宇宙的形成物、すなわち彗星とも関連する流星で研究することができます。彗星は、最高の霊たちによって宇宙に送り出される精神的な形成物ですが、アストラルの浄化の活動の過程で、さまざまな物質的なもの、ガスなどが付着します。しかし、それにまた異常な霊たち、すなわち本来セラフィムやケルビムであるべき存在がトローネの段階に留まったトローネたちが対抗します。彼らは、以前の状態に留まることによって得た巨大で強い力で働きます。トローネは鉱物のグループ魂の創造者ですが、遅れたトローネたちは宇宙に固い鉱物的形成物を生み、流星などで現れ、しばしば彗星に付随したり、流星群としてよりまたはより規則的な周期で地球の大気中に現れたりします。このように、惑星系の通常の法則性からある程度逸脱するこれらの形成物には、高い精神性と最も粗い物質性が結びついています。彗星と流星の本質については、後でさらに詳しく述べることになります。

特に彗星の振る舞いは、ニュートンの重力理論だけでは太陽系の出来事を完全に説明できないことを、繰り返し思い出させてくれます。他の天体にも、長い期間にわたって合計されると、太陽系における霊的存在たちの生き生きとした働きを表す残余が常に残ります。それは完全に作業世界に入りきっていないものです。彗星と流星では部分的に予測不能なもの、恣意的な性格が現れますが、他の天体では、運動の比率数の非可通約性が、地球に適用される重力の考察とは異なる考察を要求します。リズムと周期性が惑星運動に生きており、それが彼ら固有の法則性です。それは、地球近辺における重力と同じです。（もちろん、地球も天体として、この宇宙のリズムと周期の法則性に参加しています。）これらの法則は、人間や他の自然界が構築されている法則と同じです。この道を通じて、人間と宇宙が再び結びつけられ、宗教的感情も星の世界と再び結びつくことができるようになります。星々は、神的な行為の痕跡であり、ヒエラルキーの存在たちを通じて神性そのものの境界へと導くものです。それゆえ、ルドルフ・シュタイナーは、この講義シリーズで、アントロポゾフィーから天文学へと導いた聴衆に対して、次のように言うことができました。「星の世界の生命を観察するとき、私たちは神々の肢体を、そして最終的には神的なもの全体の肢体を観察しているのです。」

（Letter２）リズムと星座配置について
Über Rhythmen und Konstellationen
1927年10月発行

●基本的な視点

宇宙は、機械的法則に縛られつつも、
生き生きとしたリズムを通じて霊界が働き続け、
人間の自由とカルマ、誕生のタイミングに深く関わっている。
古代の叡智と現代の観察を結びつけた人智学的な天体理解へ。

●要約

○宇宙のリズムの起源と変化

天体の位置や運動は、精神的魂的な原因によって引き起こされ、物理界で霊的な状態が表現される。
星の世界は、霊的存在が力を徐々に引き上げた結果の最後の顕現である。
愛情深い「愛撫の」働きとして、星はエーテル界にアストラル的な本質を現すだけになった。

進化の歴史（土星期 → 太陽期 → 月期 → 地球期）で、星界は徐々に物質化していった。
土星期には炎のようなものしかなく、太陽期に黄道十二宮（獣帯）が形成された。
地球の初期には、太陽・月・惑星が地球本体から分離した（ヒュペルボレアスア時代、レムリア時代）。
これらは霊的存在の行為であり、当初は物理的には不可視の純粋に霊的なものだった。
惑星の運動は当初、そこに居住する霊的存在の必要性に従っており、機械的なものではなかった。

○アトランティス時代における転換点

アトランティス時代中期（地球進化の真ん中頃）に、自我の強い影響が始まり、霧の層が分かれて太陽が初めて現れた。
ルシフェル的影響がなければ、本来なら、この時点でキリストが太陽から自我の衝撃として地上に生まれていたはずだが、人間の自由のため、キリストの到来は遅らされ、世界は機械的な法則性に委ねられた。
これにより、惑星は厳格な軌道と周期で動き、計算可能な機械的・数学的な法則性が生まれることになり、これが人間の自由を育むための「作られた世界（Werkwelt／現象界）」の基盤となった。

○現在の宇宙のリズムの本質

惑星の運動は生き生きとしたリズムで、無限の変奏を持ちながら、少数の数比に基づき、重力（死の要素）が混じりつつも、本質はエーテル的なリズムを有している。
新月・満月、惑星のアスペクト、日食・月食などの配置・アスペクト（Konstellationen）は、霊界の自由を制限するが、直接介入を待つ必要がある（彗星は例外である）。
恒星月と太陽月の差といったリズムの共約不能性（inkommensurabel）が、霊界介入の余地を生みだしている。

○具体例：リズムの差異が人間に反映している

1. 恒星月（siderisch：約27.3日） vs. 朔望月（synodisch：約29.5日）

差：約2.2日 → 人間のアストラル体（速いリズム）とエーテル体（遅いリズム）の関係に相当する。
体験が記憶になるのに、睡眠を挟んで1〜2.5日かかる → 夢は1〜2日前の体験から来ることが多い。

2. 太陽年（365.25日） vs. 太陰年（12×29.5≈354日）

差：約11〜12日 → クリスマスから三王来訪（1月6日）までの期間に相当。純粋な太陽力（キリストの力）が働く時間。

○古の知恵と周期

古来の占星術では、リズムの比率（例：1日=1年）で長い周期が計算されている。
例：太陰年354.3日 → 1日=1年で約354年4ヶ月の大天使周期。
（ヨハネス・トリテミウスの計算：ミカエル → オリフィエル → … → ミカエル）
7大天使で約2480太陽年。月・太陽・地球・7惑星・12星座が秘められた古い叡智。
シュタイナーはこれを「リズム的考察」として認めつつ、歴史的事件の影響で実際の周期は3〜4世紀程度と述べ、1879年11月にミカエル時代開始されたとしている。

○現代への示唆

星の位置・運動（月相、惑星の明るさ、出現・消失）を日常的に観察することで、惑星系の精神的なリズムを体験できる。
具体例として、192X年11月10日の水星の太陽面通過（Merkurvorübergang）が挙げられている（欧州では部分的にしか見えず、太陽直後に観測。黒い点として4.5時間移動）が、これは太陽力への水星力の「遮蔽」であり、タイミングが重要である。

●本文（意訳）

天体は、霊的・魂的な原因によって、霊的状態が物理的領域で展開できるような位置や動きへと導かれます。

星の世界は、霊的な存在たちによる最後の啓示として、私たちの前に姿を現しました。それらの存在たちは、自らの力をますます背後へと退かせ、ルドルフ・シュタイナーが呼んだところの、まるで愛情深い『愛撫』のように、そのアストラル的な本質をエーテル的なものの中に明かしているにすぎません。ある意味でこの下降的な発展の道筋は、古き土星周期から現代にまで至っているのです。それは現在、外的に見える天体のみに関わる事柄です。一方で、星々の背後や諸球体（スフィア）には、今なお霊的存在たちの働きかける力や権能を見出すことができます。——もっとも、これらの存在自体も、著作『神秘学概論』で述べられているような膨大な周期の過程において、当然ながら進化を遂げてはいますが。

土星紀の周囲には、まだ星々の世界は見えず、火炎の帯のようなものが見えるだけでした。そこからき太陽紀を通じて、まず十二宮（獣帯／ゾディアック）が形作られていったのです。——月紀は、それを取り巻く全宇宙と強力な相互作用の中にありました。

月期のあとの霊的な中間状態を経て、地球が最初に現れたとき、そこには将来の惑星組織全体がまだ含まれていました。第2、第3の大きな時代であるヒュペルボレアス時代とレムリア時代に、共通の地球体からまず太陽が、次いで月が分離したことは、霊的な諸存在による行為でした。その際、地球から引き出された力や実体も、当初は純粋に霊的な性質のものでした。今日の肉体的な目では、それらを見ることはできなかったでしょう。

太陽が離脱するより以前に、すでに土星存在、次いで木星存在、火星存在たちがその力を地球体から解き放っていました。水星と金星は太陽と共に地球を去り、太陽が地球を離れた後にようやく太陽から分離したのです。これらの分離の理由については、再び『神秘学概論』や「アカシャ年代記より」の論考が私たちに教えてくれています。

「宇宙に存在することとなった惑星や天体は、最初から現在私たちが観察しているような形や動きをしていたわけではありません。そのため、太陽が地球から分離した後も長い間、今日的な意味での年代紀（クロノロジーを語ることはできませんでした。つまり、『年』や『日』を現在のように測定することはできなかったのです（ルドルフ・シュタイナーの『神秘学概論』参照）。

他の惑星の動きもまた、そこに住まう霊的な存在の現れであり、それらの動きは霊的な必要性に従って調節されていました。例えば、地球進化の始まり以来、火星や水星が私たちの地球とどのような関係にあったかについては、シュタイナーの「地球の進化」や「カルマの技法」の中で語られています。

また『神秘学概論』では、地球の生存条件が過酷になった際、大部分の人間の魂が一度地球を離れなければならなかった経緯も描かれています。その後、月が地球から分離し、アトランティス時代に至るまでの間に、魂たちは再び地球へと戻ってきました。

そこには、地球と太陽系全体との相互作用があり、それはまさに霊的・魂的なものの表現であったと言えます。他の惑星から霊的な存在たちが地球へと降り立ち、当時の人間形態を身にまとって、若い人類に芸術や科学を教えました。後になると、彼らは秘儀を通じてのみ人間のもとへ降りてくることができるようになり、その交流の条件も次第に困難なものとなっていったのです。

こうした状況は、以前に定義された意味での「顕現」や「働き」の段階にまだ完全に従っていましたが、アトランティス時代に根本的な変化を遂げました。この時期の中盤は、地球進化全体のちょうど中間地点にあたります。

地球上でまさに発展しようとしていた「自我」の影響が強大にものとなりました。かつてのアトランティスを覆っていた霧の塊、すなわち『水気を含んだ空気』が分かれ、初めて太陽が姿を現した時代が到来したのです。もし地球進化の初期に、阻害要因としてルシファー的影響が介入していなければ、このアトランティス時代の中期に、キリストは太陽から「自我の衝動」をもたらす者として、すでに地球へ降誕していたはずでした。

キリストが降臨する星位は整っていたのです。しかし、当時の人類はまだ自由な意志をもってキリストを受け入れる段階にありませんでした。そのため、キリストの到来は延期され、自我が自由に発展できるよう世界がさらに整えられていくことになりました。

またこの時期は、星の存在たちが天体から退いたことで、天体が厳格に守られた周期と固定された軌道に沿って運動を行うようになった時代でもあります。私たちが現在も身を置いている、あの見かけ上の「機械

的・数学的法則性」が作用し始めたのはこの時です。この法則性は、いわば地球進化の中期全体を支配するものであり、私たちは今、その終わりの時へと徐々に近づいています。

これらすべては、人間の自由のために起こる必要がありました。神々の意志が突如介入したり、騒乱的な霊の顕現に支配されたりすることのない世界の中でのみ、人間の自我という繊細な芽は、自由に育つことができたのです。

惑星という天体は、その軌道や位置を計算できるほどの法則性の中に組み込まれました。惑星は、自らの働きの道筋を示す軌道を、壮大な静寂と規則正しさをもって進んでいます。人間の体験においては、次第に「作られた世界（Werkwelt／現象界）」、すなわち目に見える現象界が立ち現れてきました。もっとも人間は、その後も長い間、歴史時代に入ってからもなお、神聖なる諸力の働きを感じ取ることはできていたのですが。

そして、人間が死と新たな誕生の間の生（中間生）にあるとき、この「作られた世界」は消え去ります。人間は霊的存在たちの世界そのものの中に身を置き、とりわけ再受肉へと戻る際、次第に消えゆく霊界の顕現と、最後にはその存在たちの働きを体験するのです。

現在通用しているこの世界秩序においては、定められた時に星位が生じます。新月、満月、惑星のアスペクト、食（しょく）などがそれです。（ここで言う「星位（コンステレーション」とは、天体同士の角度である「アスペクト」の意味で用いられており、固定された星座を指す言葉としての意味ではありません。）

人間にとって自由の基礎を意味するこの仕組みは、霊的世界にとっては、ある意味でその作用範囲の制限を意味しています。ある出来事や特定の発展に必要な星位が訪れるのを「待たなければ」ならず、霊的な諸力の直接的な介入によってそれを引き起こすことはできないのです（すでに見たように、彗星はある種の例外となります）。

しかし、まさにこの点において、宇宙の運動が人間起源の機械の動きとはいかにかけ離れているかが示されます。機械的な性質を一切帯びない生きたリズム、そしてわずか数種類の数比に基づきながらも無限のバリエーションを持って、惑星と恒星の宇宙的な相互作用が天球上で繰り広げられているのです。

確かに、30日の間に毎月一度の新月と満月が訪れます。しかし、その時々の月は毎回異なる星の傍らに位置しています。たとえ19年周期（メトン周期）で満月がほぼ同じ星の場所に戻ってきたとしても、それを取り巻く他のあらゆる状況は以前とは異なっています。これらの割り切れない数比を持つリズムの中に、宇宙の生命が隠されており、それは「創造世界」としての存在形態となってもなお保持されているのです。

これに対して、万有引力や重力によって計算される運動には、「死の要素」が表現されています。人間が自由になるためには、この死の要素が生きた宇宙に混入されなければならなかったのです。一方、純粋にエーテル界のリズムを扱う領域、例えば古来より惑星球と結びつけられてきた音の振動数などにおいては、単純で割り切れる数比が現れます。

リズムを伴う出来事と「重力」は、互いに矛盾するものではありません。それらは、人間のエーテル体と肉体のような関係にあります。したがって、これらの法則性に従って天体と惑星の間の星位が形成されるのであり、いわば「その時」が来るのを待たなければならないのです。

作用する諸力も、そして人間も、あらかじめ定められた天の運行に従わなければなりません。人間がそれを行う第一の機会は誕生の時であり、自らのカルマにふさわしい星位に合わせて生まれてきます。

しかし、かつての秘儀の時代、特におよそエジプト・カルデア時代に至るまでは、人間はよりいっそう意識的にこれを行っていました。当時、人間は神々が自分たちのもとへ降りてくることができるかを知るために、星々を仰ぎ見たのです。地球の初期のように、神々と人間が絶え間なく交流することはもはや不可能になっていました。しかし、天のリズムが外的な機械論に収まりきらないずれを持っていたからこそ、神々が秘儀を通じて人間のもとへ降下する可能性が残されていたのです。

太陽、月、そして星々は、それぞれ独自のリズムを持っています。太陽日は恒星日とは異なり、太陽月は恒星月とは異なります。いわば強制的な星位が形成される場所ではなく、むしろ一方のリズムが、その割り切れなさゆえに、もう一方のリズムに対してある種の「余剰」を生じさせる場所において、霊的世界が介入できる可能性がとりわけ開かれています。

後世の秘儀において、神官たちが神霊的存在との交流を保つことができたのは、まさにこうした特定の時期――数日、あるいはわずか数時間――においてでした。しかし、現代の日常生活においても、外的に見える天体の直列などではなく、一方のリズムが他方のリズムを上回るような「余剰」、すなわち速度の差が、人間の生における現実的な要因として作用し、特別な役割を果たしているのです。その例を挙げてみましょう。

天文学においては古来、いわゆる「恒星月」と「周期月（朔望月）」の区別が知られています。後者（恒星月）は、星々の世界を巡る月の歩みを示しており、月がある特定の星（例えば獅子座のレグルス）に戻ってくるまでに要する時間のことです。

肉眼でも容易に観察できるように、月は毎日同じ時刻になっても、特定の位置から少しずつ東へとずれていきます。天球を一周するのにおよそ27.3日（正確には27日7時間43分11.545秒ですが、宇宙システムの内的な生命力ゆえに約3時間の幅で変動するため、ここでは分単位の正確さは問題になりません）かかります。

これを簡略化した図1で説明すると、円を天球、特に黄道と見なします。月（M1）と太陽（S1）が向かい合っている状態、いわゆる『衝（オポジション）』が満月です。月はレグルスの位置にあり、一周してそこに戻りますが、その間にS2へと移動した太陽と再び向かい合うためには、さらにM2の地点まで進まなければなりません。これが「朔望月」と呼ばれるもので、29.5日（29日12時間44分）持続します。

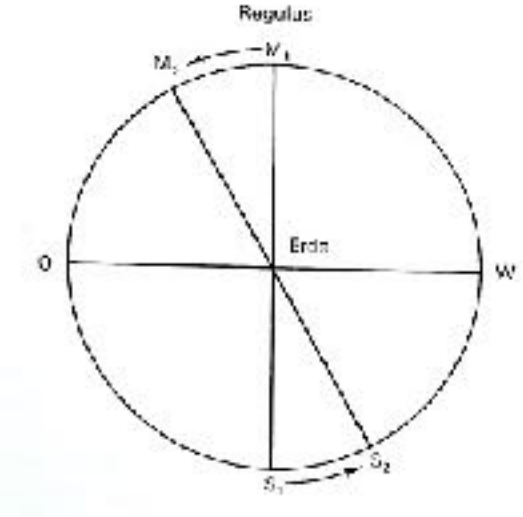
星々に対する月のリズムと、太陽に対する月のリズムを隔てているこの『2.2日（2と1/5日）』の差の中に、いわば一つの遊び（余裕）が存在しています。これが人間という小宇宙（ミクロコスモス）においては、「アストラル体」と「エーテル体」の関係として鏡のように映し出されているのです。

アストラル体が覚醒意識の体験を素早く把握するのに対し、それがエーテル体に刻印されて「思い出」や「記憶」になるまでには、より長い時間――およそ1日から2日、あるいは2日半――を要します。そしてこの時間は、まさに恒星月と朔望月のインターバル（間隔）に一致しているのです。

この刻印が行われるためには、人間はその間に数回眠り、アストラル体をエーテル体から分離させなければなりません。アストラル体のより速いリズム（月の恒星周期！）に、2、3晩遅れてエーテル体のより遅いリズム（月の太陽周期）が続くのです。それゆえ、私たちの夢の世界のイメージも、その多くは1、2日前の体験から借りてきたものになっています（1920年5月8日の講義参照）。

ここで重要なのは、空にある特定の星位や月相そのものではなく、こうした「リズムの差異」こそが、人間の生に作用する現実的な要素として働いているという点なのです。

※図1（恒星月と朔望月



あるいは、特定の時間周期がはっきりと表現されている別の例を挙げてみましょう。それは、太陽年に対する太陰年（月の年）の余剰です。

周知のように、太陽年（分秒を切り捨てれば）は365.25日の長さであり、太陽はこの期間を経て天球上の同じ位置に戻ってきます。一方で、月についてこれに対応する12（朔望）ヶ月を計算すると、29.5日 × 12 ＝ 354日（と数時間）となり、これがいわゆる『太陰年』となります。

つまり、太陽はある意味で月よりも長い作用時間を持っており、それがクリスマスから公現祭（1月6日）までの期間に反映されているのです。この時期は、あたかも月がその活動を一時期休止し、キリストが地球へと送り届ける純粋で濁りのない太陽の諸力が、12日間（あるいは13夜にわたって作用できるかのようです。

かつての秘儀において、神聖なる存在との交流にふさわしい時期として注目されていたのは、まさにこうした期間でした。その時、霊的な存在にとって地球への門がいわば開かれた状態になるのです。

単なる『差異』だけでなく、宇宙的なリズム同士の『比率』そのものが現れる時、私たちは霊的な諸力の自由な働きの中へと、さらにもう一歩踏み込むことになります。古代においては、社会生活においても、異なる時間リズムが相互に作用し合うような数（数値）に基づいて物事が組み立てられていました。

通常、占星術的なものを忌避する旧約聖書でさえ、古代カルデアの規則を繰り返しています。『わたしは一日を一年としてあなたに与える』（エゼキエル書 第4章6節）。これこそが、古の霊的な占星術において最も頻繁に用いられた組み合わせ、すなわち『一日を一年と見なす』という考え方です。

例として、私たちが「大天使の周期」と呼ぶものを見てみましょう。ここでも再び、先述した354.3日の『太陰年』を出発点にします。もし『一日が一年』に対応するならば、そこには明らかに354年4ヶ月（分単位まで計算に入れればさらに12日間）という周期が導き出されます。

この数値こそ、スポンハイムの神秘思想家トリテミウスが、大天使たちの統治（ミカエル、オリフィエル、アナエル、ザハリエル、ラファエル、サマエル、ガブリエル、そして再びミカエルという既知の順序）が交代する期間として提示しているものに他なりません。

彼は数千年にわたる計算を経て、ミカエル時代の始まりを1879年の9月または10月とし、その前のガブリエル周期の始まりを1525年6月4日と算出しました。こうして7人の大天使による統治は、この周期の7倍、すなわち354.3年 × 7 ＝ 約2480.5太陽年に相当することになるのです。

この計算には、驚くべき秘密が隠されています！ 私たちはまず月（太陰年）から出発し、そこに太陽、そして『1日＝1年』と見なすことで地球が加わりました。そして最後に、交互に交代する7人の大天使によって、7つの惑星が象徴されています。このように、この大天使の周期には惑星系全体が秘められており、さらに数としての『12』（12回の朔望周期＝1太陰年）を通じて、黄道の数である恒星界もまた表現されているのです。

ここには太古の知恵が表れています。それは、ただリズムの中にのみ織りなされ、息づいている知恵です。しかし、そのためには、歴史的現象の中に常に存在する「偶然性」や、霊的世界から突如として生じる特殊な出来事を考慮から外さなければなりません。そうした出来事は、神々の導きに対しても、遅延や加速といった形で作用せざるをえないからです。

ルドルフ・シュタイナーが一つの大天使周期を「3世紀から4世紀」とし、シュポンハイムのトリテミウスとは正確には一致しない個別の日付を挙げていることを私たちは知っています。例えば、ミカエル時代の始まりを1879年11月としたり、ガブリエル周期により長い期間を当てたりしています。しかし、これは矛盾ではなく、一方は『実際の歴史的プロセス』に基づき、他方は『純粋に律動（リズム）的な考察』に基づいているという違いなのです。

古代の人々は、このような多種多様なリズムや周期を知っていました。それらの中に深く入り込めば入り込むほど、私たちは星の存在たちの素晴らしい輪舞（ロンド）をより深く知ることになります。天体の運動とは、彼らの活動が外的な刻印として現れたものにすぎないのです。

言うまでもなく、あらゆる時代において人々は、空に現れる直接的な星位（コンステレーション）やアスペクト（坐相）を重視してきました。新月の再来、満月の訪れ、黄道十二宮を巡る太陽の道筋、あるいは惑星同士の会合や対峙などがそれにあたります。

そこには、働きかけてくるものとしての星の世界が示されています。ですから現代においても、星々や惑星の運行に親しみ、それらの位置や出会いについて意識を持つことは良いことです。月が満ちていくのか欠けていくのか、木星や土星が数ヶ月間にわたって空に輝いているのか、あるいは金星（ヴィーナス）が明けの明星や宵の明星として私たちを訪れているのか。長い不在の後、戦いの神マルス（火星）が再び東の空に現れたり、時には水星（メルクリウス）が夕暮れの西の低空にかすかに見えたりすること。

これらすべてを追い続けることは、惑星系の霊的な側面が語りかけてくるあのリズムに満ちたプロセスを、次第に共体験させてくれるようになります。星々の運行、その昇降、そして一年を通じての徐々な出現と消失も、大都市の空気がそれを許す限りにおいて、私たちにとって馴染み深いものであるべきです。こうした知識の手引きは、一般的な星図や毎年の天文暦の中に見出すことができます。

（本稿においても、来たるべき月の重要な星位について言及する予定ですが、同時にそれらへの理解を呼び起こすよう努めなければなりません。それは、単にぼんやりと眺めることでも、あるいは単なる占星術的な「解釈」をすることでもないからです。次回は、この点から話を繋げていくことにしましょう。）

今回は、11月10日に起こる水星の太陽面通過について触れておきましょう。これはあまり頻繁には起こらない現象で、13年、7年、10年、3年といった不規則な周期で繰り返されます（前回の通過は1924年5月7日でした）。

残念ながら、ヨーロッパではこの現象を十分に観察することはできません。水星が太陽の円盤に入り込む際、太陽はまだ昇っていないからです。後半部分、あるいは通過が終わる瞬間のみが観測可能であり、観測地点が東に行けば行くほど、よりはっきりと捉えることができます。正確な時刻を記すまでもありません。日の出直後の太陽をなんとか捉えようと試みるほかないからです（※決して遮光ガラスなしで見てはいけません！）。

現象の終了時刻は、中央ヨーロッパでは9時30分、イギリスではグリニッジ標準時に従いその1時間前（8時30分）となります。水星は、小さくも輪郭のはっきりした黒い点として（現在非常に多く現れている太陽黒点とは、その点で見分けがつきます）、4時間半かけて太陽面を東から西へと横切っていきます。

強大な太陽の円盤に対して、外から見える水星の円盤はいかにも小さく見えますが、これは水星の諸力による太陽の諸力の「掩蔽（えんぺい／食）」に他なりません。そしてこのような事象もまた、適切な時に繰り返し起こる必要があるのです。

〇訳註（参考）

・シュポンハイムのトリテミウス（Johannes Trithemius, 1462年 - 1516年）
ドイツのルネサンス期に活動したベネディクト会士であり、シュポンハイム（Sponheim）の修道院長として知られている。多才な学者であり、暗号学の父の一人とされる一方で、魔術や神秘学の分野でも大きな足跡を残した。

（Letter３）星空の日周運動について
Über die Tagesbewegung am Sternenhimmel
1927年11月

●基本的な視点

星空の日周運動は単なる物理現象ではなく、高次存在のリズムと人間の本性（肉体・エーテル体・アストラル体・自我）が深く結びついた、霊的・宇宙的な出来事として現れている。

●要約

前回は、「作られた世界（現象界）」から内的な作用する力のリズムへと深く入り込んでいった。

○星空の外的な現象と内的な意味

・新月・半月などの星座配置は、外的に「作られた世界」に属するが、同時に元素界（エレメンタル界）の関係を示す指標である（リリー・コリスコの実験がこれを証明している）。

・二つのリズムの差異（剰余）からはアストラル界の作用を、霊的諸存在の啓示（例：大天使の時代交代）からはより高い霊的次元を体験できる。

・キリストは地上での3年間、すべての星位・諸力を自らの中に携え、「作られた世界」そのものが即「作用」であり「啓示」であり、普通の人間の誕生が「固定」されるのに対し、キリストの場合は絶え間ない誕生であり、人類が宇宙的な生をもう一度生き直した時期だった。

○「作られた世界」を正しく見るための前提

私たちが今知るべきは、感覚（特に視覚）を通して「天界」として現れる現象界である。この世界は触れることができないため、地球が「天の鏡」であり、「上にあるものは下にもある」というヘルメス学の真理に気づくためには、コペルニクス的宇宙観の影響で魂に染みついた概念を拭い去る必要がある。

「星々は気の遠くなるような巨万の距離にあり、光年単位で光が届く」という考えや、これによって宇宙は無限の空虚な空間に解体され、地球は無意味な塵の粒、太陽はただの中規模の星に成り下がるといった観念は「意識魂の時代」の歴史的必然だったが、それ以前の人類は、恒星の世界を空間的ではなく時間的・リズム的なものとして捉えていした（土星天のすぐ後ろに恒星天があるというイメージ）。プトレマイオスも「天球は球形に回転する」と言い、無限宇宙を想定していたわけではない。

コペルニクス以降、天球が破られ、宇宙は空虚化し、ブルーノはこれを解放と感じたが、結果として感覚的な外見（仮象）を理性で修正しようとする試みが続き、現代では相対性理論のような極端な世界観に至っている。

○古代から現代への意識の変遷

・エジプト・カルデア時代（感性魂の時代）には、感覚的な星空ではなくイマジネーションで星の世界を「反対側」から体験し、空間的ではなく、近くの山のように身近だった。

・ギリシャ時代（悟性魂の時代）には、外的な視覚的な像（丸い天蓋に貼り付いた星々、動く惑星）が現れ、プトレマイオスの体系が生まれる。
・コペルニクス以降（意識魂の時代）は、感覚的な仮象を打ち破り、荒涼とした世界観が生まれた。

ルドルフ・シュタイナーの言葉「天文学とは本来、私たちの頭には収まらないもの」を思い起こし、ゲーテの「感覚は欺かない、欺くのは判断である」を念頭に、感覚的な外見そのものに語らせることが重要である。

〇日周運動の本質（星空の自転）

天空に現れる最大のリズムは、全星空が一つの軸を中心として24時間で回転する日周運動である。これは昼夜の交代、太陽・月の出没、星々の運行として現れ、体・魂・霊全体に影響を与えている。

太陽・月・惑星を除去して星々だけを考えると、「永遠の夜」の均質な回転が見える（周極星は沈まず、北極星は静止している）。

図2（子午線と地平線の円）では、観測者は常に自分自身の宇宙の中心にあり、地球は「地平平面」または「一点」としてしか現れない。これが古代人の言った「地球は天に対して一点の比率にある」という実感である。

〇太陽の介入による時間の変化

太陽・月・惑星を加えると、生命・成長・多様性が生まれ、同時に時間がわずかに「遅れる」ようになる。

星々（恒星）は太陽より少し速く進む → 恒星日は約23時間56分4秒。
私たちは太陽日（24時間）を基準に生きる（太陽の南中から次の南中までを24時間とする）。
この差（約3分56秒）が積み重なり、季節が進むにつれて同じ時刻に昇る星座が東へ移っていく。
（例：秋の夜9-10時に双子座 → 数週間後蟹座 → 冬に獅子座）。

この太陽と星々の速度差は、ルシファー的存在（速いテンポ、急激な知性の発達）とヤーウェ的均衡（太陽の遅れ）の対立として象徴される。ルシファーの性急さを太陽の運動が抑え、人間が知性で素早く把握したものを魂でゆっくり「体験」できるようにしたのである。

●本文（意訳）

　前回のニュースレターでの叙述は、私たちを諸存在の世界から「作られた世界（Werkwelt / 現象界）」へと導きました。挙げられた諸例においては、逆に私たちは、作られた世界に属する外的な可視的存在から、作用する諸力の内なるリズムへとますます深く入り込んでいきました。

　新月や半月といった星座の配置は、空に外的に見える形で存在しています。それらは「作られた世界」の中で展開されますが、その世界においては、いわば元素界（エレメンタル界）における諸関係を示す指標となっています。このことを実験的にも証明したのが、リリー・コリスコ（Lili Kolisko）の大きな功績です。これに対し、二つのリズムの剰余や差異が算出される場面では、私たちはアストラル的な諸力の作用段階を体験することになります。

霊的諸存在の啓示は、例えば歴代の大天使による統治の継承といった宇宙的関係の中に表現されます。ミカエルがその働きを顕わにするのは（その働きはもちろん中間期にも存在していますが）、彼の時代が到来した時です。その時代の計量は、ある一瞬の状況を指し示すのではなく、惑星系のあらゆるリズムの共同作用によってなされます。

キリストが人間の姿をとって地上を歩んでいた時代、彼は唯一無二の形で宇宙と対峙していました。これについては、小冊子『人間と人類の霊的導き（Die geistige Führung des Menschen und der Menschheit）』（訳註：GA15）が教えてくれています。それは、キリストがあらゆる瞬間に、その時々に存在するあらゆる星位や諸力を含む全星空を、自らの内に携えているかのようでした。言い換えれば、「作られた世界」が人間に示すものが、彼においては同時に「作用（Wirksamkeit）」であり「啓示（Offenbarung）」であったのです。

普通の人間の場合、宇宙的に言えば、誕生の瞬間がいわば固定されたまま留まりますが、キリストの場合は、それが絶え間ない誕生のようでした。キリストが地上を歩んでいた3年間、人類はもう一度、その（宇宙的な）生を生きていたのです。

私たちは今、感覚、とりわけ視覚器官に対して「天界」として現れる「作られた世界（Werkwelt / 現象界）」について知る段階にあります。この世界が私たちの周囲にある「地上の世界」と異なるのは、それが直接聞いたり味わったりできず、何よりも「触れる」ことができないためです。私たちがこの「作られた世界」を突き抜けて初めて、地球は天の鏡であり、古くからのヘルメス学の教え通り「上にあるものは下にもある」ということに気づくのです。

この感覚を再び取り戻すためには、現代の意識からある一つの概念をどうしても拭い去らねばなりません。それはコペルニクス的体系の結果として現れ、科学の通俗化によって多かれ少なかれ、あらゆる人の頭の中に幽霊のように取り憑いている概念です。すなわち、星々の気の遠くなるような「巨万の距離」や、光が星から私たちのもとに届くまでに何千、何万年もかかるという「光年」という考え方です。

こ　うした考えによって、宇宙はいわば無限に広がる空虚な空間へとバラバラに解体されてしまいます。そこでは、その数にかかわらず、実際にはごくわずかな星々が孤独に点在しているに過ぎません。その中では、私たちの太陽は中規模でそれほど若くない星の一つとなり、地球はそれ自体では光らない、まったく無意味な塵の粒に成り下がってしまうのです。（幸いなことに、最近の学説では宇宙を閉じたもの、あるいは測定可能なものと見なす傾向が再び現れており、「湾曲した空間」を説く学派も存在しますが、ここで重要なのは、多くの人の魂の中に無意識に横たわっている観念の本質を描き出すことです。）

なぜこのような観念が生じたのか、その詳細にここで立ち入ることはまだできませんが、それは先述の通りコペルニクス的体系の結果であり、深い意味においては「意識魂の時代」における歴史的な必然でした。それ以前の人類は、惑星の世界のすぐ先に、同時に死者の世界でもある「恒星の世界」が続いているという観念しか持っていませんでした。古い地図に描かれているように、恒星天は土星天のすぐ「後ろ」にあったのです。

当時は、恒星の世界について空間的というよりは、むしろ先述したようなリズムや周期といった「時間的」な捉え方をしていました。プトレマイオスが「地球は天体（恒星天までの距離）に対して、一点の比率にある」という古い命題を繰り返したとき、それは無限の宇宙を意味していたのではありません。なぜなら彼は同時に「天球は球形であり、球体として回転する」とも述べているからです。それは当時の科学的表現による、創世記以来の古い対立概念、すなわち「天と地」の言い換えに過ぎなかったのです。

コペルニクスが、太古から人々が感じてきた宇宙の中心という場所から地球を取り除いて初めて、宇宙の広がりに関する問いが本格的に浮上しました。「天球（Sphären）」は決定的に打ち破られたのです。もっとも、最初にコペルニクス体系を受け入れた人々にとって、中世的な感覚の中でますます高密度化していた「水晶天（Kristallhimmels）」を突き破ることは、当初は解放感をもたらすものであり、自由への一歩でした。ジョルダーノ・ブルーノは、街が城壁から解き放たれ無限に広がっていくかのように、計り知れない宇宙空間を宇宙的な束縛からの解放として感じ取りました。彼はその無限さと、無数に存在する居住可能な世界という自分を幸福にする構想を熱烈に謳い上げましたが、それが彼の破滅を招き、火刑台へと送り込むことになったのです。

コペルニクス理論の証拠を見つけようとする試みが始まると（周知の通り、説の提唱から成功まで数世紀を要しました）、星々はますます遠ざかっていきました。宇宙は霧散して空虚になり、星々は闇と寒冷の海へと沈んでいきました。こうして「意識魂の時代」の人類は、自らの理性的思考を感覚的な外見（仮象）へと向け、同時にその外見を修正しようと介入を試みる中で、完全に自分自身の力だけで立たねばならなくなったのです。

「感性魂（感受魂）の時代」であるエジプト・カルデア時代まで遡ると、人間に作用していたのは感覚的に見えるコスモスではなく、「イマジネーション（想像力）」、すなわち感覚世界の背後に顕現するものであったことがわかります。当時の人々（私たちの魂もかつてその一員でした）にとって、私たちが目にしているような感覚的な星の世界は、まだ存在していませんでした。その代わりに彼らは、ルドルフ・シュタイナーが表現したように、星の世界を「反対側」から示すような像、すなわちイマジネーションを体験していたのです。そこでは空間的な捉え方はまったく場違いなものでした。古代カルデア人のように体験する者にとって、星々や惑星の世界は、頂を雲に隠した近くの山よりも身近で「理解（把握）しやすい」ものだったのです。ギリシャの神々でさえ、人間から離れた別の世界であるオリンポス山に住んでいました。

エジプト・カルデア文化が徐々に衰退に向かったまさにそのギリシャ時代に、外的な星の世界に対する意識が目覚め始めました。古い像は色あせていきます。「悟性魂あるいは心情魂」にとって、特に「眼前の光景（視覚的な外見）」としての像、すなわち、丸い天蓋とそこに貼り付いた星々、その間を多様な動きで横切る惑星という像が顕現するようになります。悟性魂はその思考をこの像へと向けました。その結果、数世紀後に結実したのがプトレマイオスの体系です。それは、イマジネーションが次第に消失していった「感覚的な外見」へと理性的思考を向けたものでしたが、あくまで感覚的な外見を土台としていたのです。

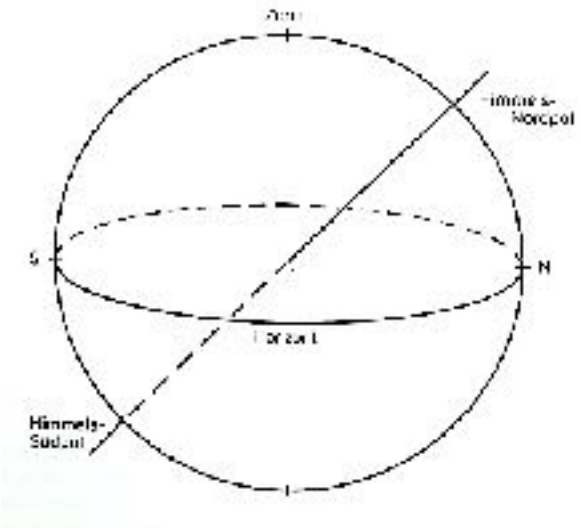
コペルニクスは、アトランティス後第五文化期の幕開けとともに、「感覚的な外見（仮象）」を打ち破りました。いまだ感覚・神経系に縛られている「意識魂」の思考は、頭部人間の一部である感覚器官が提示するものを修正しようと試みます。その結果、荒涼とした救いのない世界観が生まれました。それは最終的に、相対性理論に見られるような極端な言説へと行き着きます。そこでは感覚的な経験はもはや通用せず、感覚から解放されながらも、なお感覚を根拠とするような思考は、もはや成立しうる世界観を提示できていないのです。

これらすべてが物語っているのは、全く別の側面からこの問題にアプローチする必要性です。ルドルフ・シュタイナーが悟性的な概念について語った、「天文学とは本来、私たちの頭には収まらないものであり、適合しないものである」という言葉の意味が理解されるでしょう。理論化することによって天文学的な現実に近づけるわけではありません。一度、ゲーテの深い言葉「感覚は欺かない、欺くのは判断である」を念頭に置き、感覚的な外見そのものに語らせてみましょう。なぜなら、例えば視覚が私たちに明らかにするものもまた現実の一部であり、まさに頭部人間に属する部分だからです。それは、あらゆる外的な可視性の背後に隠された「霊的なもの」へと私たちを導くガイドとなってくれるはずです。

まず、私たちのために太陽や星々の東から西への運動として反映されている「昼と夜の交代」があります。これは疑いようもなく、私たちの人間全体に関わるものであり、体・魂・霊に影響を与えます。幼い子供を観察すれば、日光の作用がいかにして子供を徐々に意識の目覚めへと導くかがわかるでしょう。その一方で、24時間のサイクルは私たちの食物摂取や新陳代謝に刻み込まれていますが、睡眠と覚醒、特に精神的な活動においては、私たちはすでにこのサイクルから大きく自由になっています。

このように昼と夜を観察すると、私たちは包括的な事実に直面することになります。それは、偉大で崇高な諸存在の表現なのです。視覚、すなわち「天文学的な眼」にとって、これらの事実は、全ての星空がある軸を中心として回転する「自転」として天に記されています。昼の天体（太陽）と夜の天体（月）の出没、夜空を渡る星々や惑星の運行――これらは、大まかに言えば24時間で完了する、最初の大きなリズムを私たちに示しています。ここでまず星々のことだけを考え、太陽、月、惑星を一時的に意識から消してみると、そこには永遠に等質なものの像が現れます。それはもはや「昼」と「夜」の区別さえなく、星々の出没だけが時間の尺度を示す「永遠の夜」の光景です。いくつかの星（いわゆる周極星）は決して沈むことがなく、一つの星（北極星）は全く静止しているように見えます。地球の軸が指し示すその点こそ、古の言葉で言えば「天の軸」が貫く場所なのです。

※図2



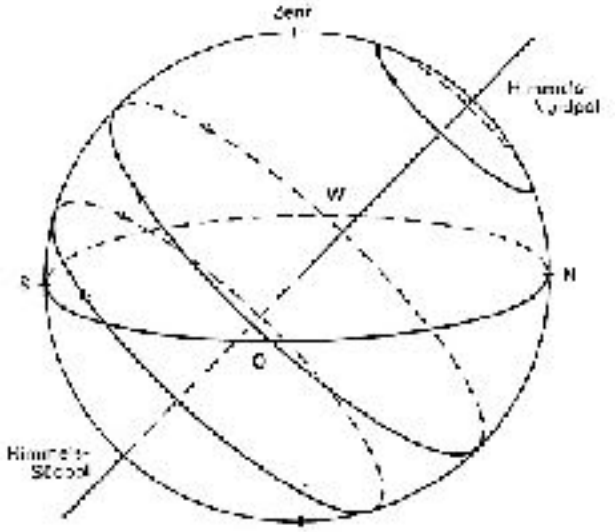
非常にシンプルな「図2」を見てみましょう。これは抽象的な図ではありますが、空に見出すことのできる多くの事柄を私たちに示してくれます。この図の中に自分自身がいる、つまり自分が中心点にいると想像してみてください。

この図の平面上にある円は、観測地点の「子午線」であるとします。つまり、私たちの真上にある最高点である「天頂」と「北極星（より正確には天の北極）」を通る円のことです。この円は、地平線において真北と真南の地点に直結しています。地平線は、水平に想定された円によって表されます。これら両方の円の中心点は、私たちが今立っている場所です。なぜなら、あらゆる人間は常に自分自身の宇宙の中心におり、いわば自分自身の天（自分にとっての天頂、極軸の高さ、そして方位）を自ら携え持っているからです。

「この図の中で、本来の地球はどこにあるのか」と問うならば、ある奇妙な結論に達することになります。基本的にここで地球を代表しているのは「地平平面」のみ、あるいは中心にある「単なる一点」にすぎないということです。私たちが立っている円盤状の地面が、星々の天蓋まで届くはずがないことは（たとえ地平線で天と地が接しているように見えたとしても）自明だからです。さもなければ、どうして太陽や月や星々が昇ったり沈んだりできるでしょうか。

このような描写を通じて、古代の天文学者たちが「地球は天に対して、円周に対する一点のような関係にある」という言葉で表現したものを、再び（実感をもって）体験することができるのです。

※図3



さて、太陽が存在しないと仮定した天空において、星々は北極星を中心に大小の軌道を描きます（図3）。その中には、正反対に位置する二つの地点で昇り沈みする星々（いわゆる「大円」を描くもの）もあります。それらは地平線の東点と西点ですが、ここで私たちは仮説として太陽を世界像から除外しているため、太陽の出没によって「東」や「西」という概念が導かれるわけではない、ということを念頭に置かねばなりません。もし世界が本当にそのようにできていたとしたら、人々はただ星の運行によってのみ「時間」を計ることになるでしょう。私たち「太陽の人間」がしているのと同じように、1恒星日を24時間に分割するかもしれません。しかし、それは奇妙なことに、私たちが知っている時間とは異なるものになるはずです。

太陽、月、惑星のない世界というのは、当然ながらひどい抽象論です。もし世界がそうであったなら、人間も今とは全く異なる存在でなければならないことがすぐに分かります。そう、人間は肉体のみで構成され、エーテル体もアストラル体も、固有の「自我」も持ち得なかったと言えるでしょう。宇宙的な意識を持った鉱物のような存在になっていたかもしれません。永遠の均質さの中で世界は「永遠の夜」を回転し続け、常に同じ時間に、常に同じ星々が昇り沈みすることになります。

では、理解を深めるために仮定したこの世界に、今度は太陽的なもの、月的なもの、そして惑星的な存在を介入させてみましょう！ すると途端に、生命、成長、多様性が入り込んできます。しかし同時に、時間もまた変化します。まるでかすかな制動や遅延が加わったかのように、時間はわずかに緩やかになるのです。

というのも、今や昼の支配者となり、昼を夜から分かつ存在となった太陽は、以前に共にいた星よりも常にほんの少し遅れてある地点（例えば、南中する際の子午線や、昇る際の東の地平線）に到達するからです。星はいわば、太陽より少し先を急いでいます。最初は太陽の光の中に消えていた星も、しばらくすると日の出の前に再び姿を現します。星が太陽を追い越して先へ進んだからです。太陽の運行に対して、星空全体が（東から西へ）前進しているように見えるのです。

この事実は、次のように表現することもできます。先ほど述べた太陽のない「恒星日」の24時間は、私たちが基準としている「太陽日」の24時間よりもわずかに短く、進行が速いのです。赤道以外の場所では、太

陽が昇る時刻は季節によって変化しますが、一日の運行の中間点では必ず子午線、すなわちその日の一番高い点に到達します。これを「南中」（kulminieren）と呼びます。

私たちは、この南中から次の南中までの時間を24時間として計測しています。（全宇宙の驚くべき生命力と可動性ゆえに、こうした精密な数値も現実には完全には一致しません。それらは常に近似値にすぎず、太陽が子午線を通過するのは、ある時はわずかに早く、ある時はわずかに遅れ、数分単位の誤差が生じます。）しかし、同一の星が連続して南中する間の時間を太陽と同じ尺度で測ると、24時間ではなく、わずか23時間56分4秒となります。つまり、星々は太陽よりも少し速く進んでいるのです。太陽はいわば、少し後ろに取り残されています。

私たちは、先ほど述べたような自動的な意識を持つ「鉱物的な存在」ではないため、日常生活においては恒星時ではなく太陽時に従って生きています。私たちの時間計算は、星々ではなく太陽に寄り添っているのです（天文学者だけが、観測や計算のために不変の恒星時を用います）。

私たちが星ではなく太陽と共に時を刻む（たとえ天の軸を中心とする星々の日周運動が、地球の自転の正確な鏡像であり、一日の運行の根源的な現象であるとしても）ことによって生じる帰結については、後ほど詳しく述べます。一方で星々は、一年を通じて東の地平線から昇る時刻が次第に早まっていくことで、太陽との速度差をはっきりと示してくれます。

例えば、この秋の時期の夜9時か10時頃に黄道帯を観察すると、双子座が昇ってくるのが見えます。数週間後には同じ時刻に蟹座が昇り、冬の盛りには力強い獅子座が昇ります。その頃、双子座はすでに夜8時頃には昇っています。一見すると数日、数週間経たないと気づかないようなこれらの違いは、恒星日と太陽日の差である「3分56秒」が積み重なったものです。

ここには、太陽の緩やかな歩みに比べて、星々がいかに速く前進しているかが現れています。私たちは肉体だけでなく、エーテル体、アストラル体、そして自我を持っているがゆえに、生活の営みを太陽に従わせねばならないのです。――ルドルフ・シュタイナーは、この星々のシステムと太陽のシステムの差異を、ルシファー的存在とヤーウェ（エホバ）的存在の対立に関連付けました。

太陽が地球から分離した後、人間に対してルシファーの影響が及んだことを想起してください。そこでは、早すぎる、性急な発達を求めるルシファー的な衝動に対し、均衡をもたらすように太陽の運動が調整される必要がありました。ルシファーは人間の特定の能力、特に宇宙から切り離された知性の形成を、あまりに速く発達させようとしたのです。このテンポは、星々の回転速度――あるいはコペルニクス的に言えば地球の自転速度――に表現されています。善なる神々は、星々の中の一つの星でもある太陽を、あえて少し引き留め、星々のテンポに完全には同調させないようにしたのです。

これによって人間は、世界を認識する際に、知性による比較的速い把握だけでなく、そのようにして受け取ったものを自らの内でより緩やかに「体験」していくプロセスを持つことができたのです。理性による理解は、魂の体験よりもずっと早く完了してしまうものなのです。

（これは、前回の円回報『リズムと星座について』で述べた、月と星々、および月と太陽の関係と同じ意味を含んでいます。月が星を追い越して再び追いつく時間は、太陽を追い越す時間よりも短くて済みます。もし先ほどの太陽のない仮説的な世界像に月だけを挿入したならば、私たちは月の「恒星月」の周期しか知ることはなく、恒星月がさらに2.5日ほどかけて「満ち欠けの周期（朔望月）」へと完成されるプロセスを知ることはなかったでしょう。）

これまで述べてきたことは、人間生活の領域においては、諸存在（霊的な高次存在）の観点から次のように言うのと同義です。「ヤーウェは、ルシファーのあまりに性急な前進を制止しなければならなかった」と。

そしてそれはまた、私たちが天空に外的に見える形で体験していることとも同義です。すなわち、太陽が星々に対して取り残されていく様子や、星々が数日、数週間、数カ月と経つにつれて前へと突き進み、東の空に現れるのも西の空に沈むのも、刻一刻と早まっていくあの現象のことなのです。

（Letter４）太陽の年周運動 - 三重の太陽
Über die Jahresbewegung der Sonne
1927年12月発行

●基本的な視点

シュタイナーによる「三重の太陽」の視点に基づき、
天文学的事実を単なる物理現象としてではなく、
人間・宇宙・神霊の進化全体と深く結びつけられた、人智学的な太陽観。

●要約

1. 太陽の年周運動

クリスマス期（1927年12月のレター）にふさわしく、
太陽の年周運動について。

太陽は毎日東から西へ回る日周運動とは逆方向に、
黄道（十二宮）を一年かけて西から東へゆっくり移動する（1日約1°）。
これは日周運動を「抑制」する動きであり、
ルシファー的な前方への駆り立て（日周・速い意識）に対し、
エホバ的（神霊的）な抑制（年周・熟成・時間）が働いている。

2. 三重の太陽の秘儀

「 三重の太陽」は、ルドルフ・シュタイナーが
現代に蘇らせた最大の秘儀の一つだが、
これは古代の秘儀では常に教えられていた。

・第一の太陽（外的な可視の太陽）
物理的・物質的な太陽。
ルシファーが人間の眼を開き、可視化した「光の太陽」。
現在科学が研究している「燃えるガスの塊」として現れる。

・第二の太陽（魂の太陽・霊的太陽）
エロヒム（特に形態の霊）が住む。
記憶・自我意識・魂の連続性を与える。
感情・リズム・愛の領域。

・第三の太陽（霊的太陽・本来の太陽）
キリストそのもの、最高の「太陽存在」。
ゴルゴタの秘儀により地球と結びついた真の霊的太陽。
真の不滅の「自我」を人間に与える。

3. 文化史を通じた三重の太陽の認識の変化

・古インド：ヴィシュヴァカルマン（キリスト相当）
・古ペルシア：ゾロアスターがアフラ・マズダとして認識
・エジプト・カルデア：ラー・オシリス（働きかける太陽）
・ギリシャ：霊的太陽＝善の源、ヘリオス（第二）、ゼウス的エーテル太陽（第三）
・ローマ時代：三重→二重（ミトラス教）へ退化
・869年コンスタンティノープル公会議：人間の「霊」を否定（三元→二元）
　これと並行して宇宙論的にも「霊的太陽」が失われる
・現代：唯一の物理的太陽のみ（アーリマンがルシファーを描写する状態）
　黒点・紅炎・コロナは進化から取り残された存在たちの痕跡

4. 人間の三重構造と三重の太陽の対応

・頭部人間：光・思考・分解（ルシファー的な第一の太陽）
・胸部人間：愛・リズム・呼吸（エロヒム的な第二の太陽）
・代謝・四肢人間：生命・構築・意志（キリスト的な第三の太陽）

　→「光・愛・生命」こそが、三重の太陽のキリスト教的呼称である。

5. クリスマスの意義

太陽が最も低く沈む冬至期に、
目に見えぬ「真夜中の太陽」（霊的太陽）として
キリストの子が毎年地上に生まれ来る。
ルシファー的な太陽を救済し、地球を霊化するための種子として。

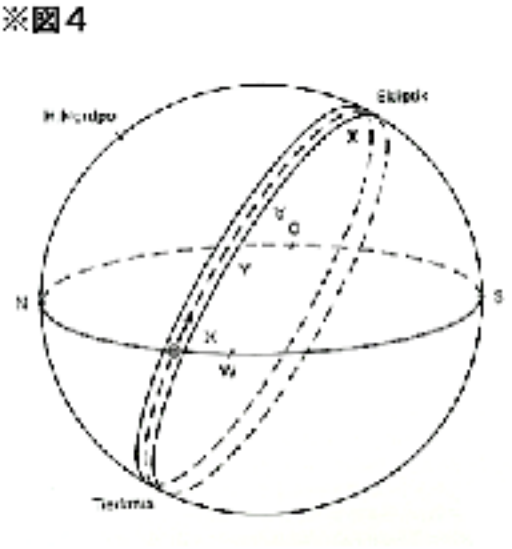
●本文（意訳）

　近づきつつあるクリスマスという時期は、私たちの思考を太陽の年周運動へと向けさせます。太陽はその軌道の最も低い点に到達すると、12月24日から再び少しずつ高く昇り始めるのです。

　それは太陽の「見かけ上の」軌道であり、黄道（Ekliptik）と呼ばれます（この名称が、不思議なことに日食や月食を意味する「エクリプス」から借りてこられたものであることは特筆すべき点です）。黄道は十二宮（獣帯）の帯の真ん中を貫いています。太陽はこの軌道の上を、日周運動で引きずられていく方向とはちょうど反対の向きに、一年をかけて移動していきます。

　つまり、私たちは毎日、太陽が東から西へと空の全天（あるいは少なくとも半天）を回っていくのを見ていますが、それと同時に太陽は、年周軌道の上を毎日少しずつ西から東へと進んでいるのです。その移動距離は、1日平均で約1度（365.25日で360度）に相当します。日中の明るさのために太陽の背後にある星々と比較することができず、目には見えませんが、このようにして太陽は、牡羊座、牡牛座、双子座といった順に十二宮を巡っていきます（図4参照）。

※図４



これは、前回「太陽の日周運動をわずかに抑制する動き」としてお話しした運動のことです。別の視点から見れば、この遅れは太陽の年周運動に起因しています。年周運動は日周運動とは逆方向に、かつ異なる円（日周運動が天の赤道に平行であるのに対し、年周運動は黄道）の上で展開されているのです。

一日の歩みにおけるルシファー的な「前方への駆り立て」と、一年の歩みにおけるエホバ的（神霊的）な「抑制」。これらの力が互いに作用し合っています。成長、生成、消滅といった「熟すために時間を必要とするもの」、そして人間の感情と結びついたものはすべて、この一年の歩みを通じてもたらされます。単なる地球自転という物理的な事象に、エーテル的・アストラル的な要素が加わるのです。

これらの根本的な関係をより深く知るためには、さらなる解説が必要となるでしょう。しかし、今のこの季節（クリスマス時期）にあたっては、天文学の一章ではなく、太陽に関連して考察すべき「働きかける霊的存在」を扱う「アストロソフィー（星の知恵）」の一章をお届けするのがふさわしいと考えます。そのため、理論的な議論は次回に譲り、今回は「三重の太陽」についての考察を挿入することにいたします。

○三重の太陽

三重の太陽という秘儀に触れることは、世界進化における最大の謎の一つに触れることを意味します。今日の時代における秘儀の更新者と見なすべき教師、ルドルフ・シュタイナーがいなければ、私たちがこの秘儀について語ることはもちろん不可能だったでしょう。彼は折に触れてこの秘儀を指し示し、一方ではそれを「三重の人間」の謎と結びつけ、他方では人間の精神では到底及ばぬ最高にしてもっとも神聖な謎、「三位一体」の謎へと私たちを導いてくれました。

ルドルフ・シュタイナーが語るには、古代の秘儀参入の場では、三重の太陽に関する知識が教えられていました。人類進化のそれぞれの時代において、この三重の太陽について説かれた内容は異なっています。もちろん、それは内面的な矛盾という意味ではなく、進化する人類が秘儀の内部においても、三重の太陽やそこに関わる霊的存在たちと、時代に応じた異なる方法で結びつかなければならなかったという意味においてです。

そこでは――今ここで少し一般的な形でまとめますと――第一の太陽について教えられていました。それは私たち全員が知っている、日々空に現れては消えていく、目には眩いばかりに輝く太陽です。今日、科学的

に理解されているような「物理的・物質的な太陽」であり、世界の事物を見えるようにしてくれる太陽のことです。古代の秘儀では、この太陽について次のように教えられていました。「この太陽が私たちに対して輝きを放っているのは、ルシファーがそれを可視化したからである」と。ルシファーが私たちの眼を開き、太陽から創り出された私たちの眼に対して、この太陽を見えるようにしたのです。外的な構成においても、今日の科学的視点から描写されるようなルシファー的な要素を内包しているこの太陽を、第一の太陽、すなわち「外的な可視の太陽」と呼びました。

しかし、その中には別の太陽が隠されています。私たちが魂の生活を送り、記憶を持ち、「自我（私）」という存在であり得るのは、この太陽のおかげです。記憶という糸に自らの体験を紡ぎ、それによって常に自分自身を認識し、思考・感情・意志を統合した一貫性のある魂の生活を営むことができるのは、この太陽の力なのです。古代、人間の魂の生活の贈り主として仰ぎ見られていた存在たちは、古代ヘブライの言葉で「エロヒム」と呼ばれていました。彼らは太陽の中に存在し、外的な物質的太陽に対して「霊的・魂的な太陽」を形作っていると言われていたのです。エロヒムの一柱であるヤハウェ（エホバ）は月と結びついたことが知られていますが、第二階層の「形態の霊」に属するエロヒムたちは太陽の内部に住まい、外的な眼からは隠されています。こうして、第一の可視の太陽の内部に、第二の太陽が存在していました。ルシファーによって点された第一の太陽は、この第二の太陽を覆い隠していました。この第二の太陽の中には、エロヒムだけでなく、「運動の霊」や「叡智の霊」といった第二階層全体が存在していると考えるべきですが、形態の霊こそがこの第二の太陽の本来の代表者であると見なすのが正しいでしょう。

さらに、この太陽の背後には――秘儀ではそう教えられていました――また別の太陽が隠されています。それこそが本来の「霊的太陽」です。そこには、自らの本質を太陽と結びつけることで、太陽を全宇宙で最も輝かしい星へと変えた「太陽存在」が住まわっています。この存在は様々な名で呼ばれてきましたが、現代の地球人類にとっては、まず「キリスト」という名としてしか呼び得ない存在です。なぜなら、この第三の太陽こそが、ゴルゴタの秘儀を通じて地球と結びついたからです。キリスト以前の時代には、この第三の太陽と地球との結合を指摘することはできませんでした。しかし、本来の「太陽霊」と呼ぶべきこの存在が、人間に「真の自我」を授けたことは指摘できました。それは、単に記憶の糸にぶら下がり、睡眠中のように記憶が途切れると消失してしまうような我ではなく、輪廻転生を貫いて歩み、人間を不滅の神聖な存在たらしめる「我」のことです。この第三の太陽について語ることは、長い人類進化の過程において、この太陽存在が地球へと向かう歩みについて語ることを意味していました。そしてこう言わねばなりませんでした。「世界の広大な宇宙空間から、さらには空間を超越した彼方から、この存在は太陽へ、そして太陽から地球へと降臨したのである」と。

アトランティス以後の様々な文化周期を考察すると、人間が太陽の多様な側面に対して抱いてきた関係の中に、いくつかの段階を見出すことができます。これらの段階は、人間の能力が常に変化し発展し続け、人間が世界に対して、そして霊界に対しても、常に異なるあり方で向き合ってきたことに関連しています。

古インド期において、私たちはある存在への言及を目にします。それは本来、人類の圏域を超えた場所にいるとされる「ヴィシュヴァカルマン」です。その名の通り「万物を造りし者」を意味するこの存在は、インド人にとって、私たちにとってのキリストに相当するものでした。しかし、当時はまだその時期に達していなかったため、古インド文化と直接的な関係を持つことはできませんでした。

ところが、第二の文化周期である古ペルシア期になると、ゾロアスター（ザラシュストラ）が太陽をどのように知覚していたかが見えてきます。彼は太陽の周囲にひとつのオーラ、すなわち「大いなるオーラ（アフラ・マズダ）」を認めていました。それは太陽存在として彼に語りかけ、私たちが本来の霊的太陽、すなわち（先ほどは「第三の太陽」として挙げましたが）「第一の太陽」と呼ぶべき存在として彼に自らを顕現させたのです。

第三後アトランティス期以後（エジプト・カルデア期）には、（以前述べたように）霊的な存在たちの「働き」が知覚されるようになりました。太陽はもはや直接的に「霊そのもの」を顕現する存在ではなく、その運動や放射、あるいは作用を通じて、まさに「アストラル的・エーテル的なもの」を顕現する存在となります。当時のエジプト人は、太陽神「ラー・オシリス」について語りました。ラーは、地上における自らの代表者としてオシリスを持ち、天の星々の中で太陽を導き、天の水の上を太陽の舟に乗って巡る存在です。というのも、エジプト人は天を「水的な要素」と親和性があるものと感じていたからです。――この時期にまず知覚されたのは、熱と光を地球へと放射する「働きかける太陽（第二の太陽）」でした。ただし、ここでまず意味されているのは外的な光ではなく、人間の内部で「思考の光」として輝くような「内的な光」としての太陽です。

エジプト時代の後期、本来のエジプト文化がまもなく別の文化へと取って代わられようとする時期に入ると、外的な太陽もまた、ますます観察の対象となっていくのがわかります。物理的に知覚可能な「外的な太陽」の活動に初めて注目を促したのは、紀元前14世紀に生きた偉大なファラオ、アメンホテプ4世（アクエンアテン／イクナートン）でした。彼の「太陽への賛歌」は今日まで伝わっています。そこでは、太陽から放射され、物理的な光線として地球に届き、人間を温め照らすものが強く強調されています。

「天の地平線に昇る汝の姿はなんと輝かしいことか、
おお、太古の初めに生きた創造主アテンよ！
汝が天の東に昇るとき、
あらゆる国々は汝の下で美しく輝き横たわる。
汝は美しく、偉大で、煌びやかであり、地のはるか高みに座す。
諸国も、汝が創り出したすべてのものも、
汝はその光線の手で愛を込めて抱擁する。
汝はラーであり、彼らを導き守り、
愛の絆をもって彼らを結びつける。
汝は遠くにありながら、その光線は地上に届き、
汝の顔はその軌道の上で、永遠に地上へと向けられている。」

ここでは、太陽からの作用が地上へと流れ下る「働き」そのものが考察の対象となっています。

第四後アトランティス期以後、すなわち「ゴルゴタの秘儀」が起きた時代を考察すると、この傾向はいっそう強まります。ギリシャ人の間でも「三重の太陽」への言及は見られます。彼らは自分たちの霊性、あるいは自国や周辺諸民族の秘儀とのつながりを通じて、三重の太陽について、少なくとも予感のようなものは抱いていました。

彼らは第一の太陽、すなわち「霊的太陽」の中に、あらゆる道徳の源泉を感じ取っていました。彼らにとって「善」はこの太陽と結びついていたのです。プラトンが根源的な原理として「善」について語り、それを太陽と結びつけているのはこの意味においてであり、ここでは霊的太陽が道徳の源として把握されています。

ギリシャ人が「ヘリオス」と呼んだのが第二の太陽です。確かにギリシャには多くの太陽神がいましたが、天空で太陽を導き、人々のために輝かせる神こそがヘリオスでした。彼はエジプト人にとってのラー・オシリスに相当します。

そして第三の太陽、つまり私たちが今日「外的な太陽」として感じているものとして、ギリシャ人は単に眩しく輝く天体だけでなく、いわば「太陽的な地球エーテル」の全体を感じていました。地球を取り巻き、太

陽の光が貫き流れているエーテルのすべてです。その中に彼らの神々という霊的存在が住まわっていました。そこで何よりも支配し、働いていたのがゼウスです。ゼウスもまた、他のギリシャの神々と同様に、ある意味でルシファー的な存在です。彼らにとってゼウスはこの第三の太陽、外的な太陽の代表者でした。ただし、それは今日の私たちが考えるような明確に区切られた天体としての太陽ではなく、ギリシャの海や陸の上に広がる「エーテル」をも含めたものでした。オリンポスを照らし、地上に降り注ぐ太陽がギリシャ人にとって何であったかを感じるには、そのエーテルまでをも含めて考える必要があります。このように、ギリシャの秘儀においても、まだ三重の太陽が教えられていたのです。

ところが、ローマ人の時代になると様相が変わります。ギリシャ人と対照的に、ローマ人ははるかに抽象的で非霊的な民族でしたが、初期の精神生活においてはギリシャから多くを継承しました。彼らが自分たちの太陽神「ミトラス」へと導かれるために呼び求めたのも、やはりヘリオスでした。ミトラス教におけるミトラスは、他の宇宙・惑星的な象徴である牡牛にまたがる太陽存在、太陽神として描かれています。

しかし、ローマが世界を席巻し、ミトラス教が素朴なローマ兵士の宗教として広まった時代には、人々はもはや「二重の太陽」しか知らなくなっていました。私たちが知るような「外的な太陽」と、ミトラス教で崇拝された「霊的な太陽」の二つです。本来の霊的太陽（第一の太陽）に関する認識が失われたことで、三重の太陽は二重へと収束してしまったのです。

その間に「ゴルゴタの秘儀」が成就し、霊的太陽が地球と結合したことを私たちは知っています。しかし、多くの秘儀参入の場においてさえ、この認識に到達するのは困難であり、ゴルゴタの秘儀の後も長い間、それが本当に起きたことだと気づかずにいました。そのこと自体が、それらがもはや正当な秘儀としての力を失っていたことを示しています。

ローマ時代後期に見られるこの衝撃的な事態――すなわちローマ人が二つの太陽しか知らず、本来の第一の太陽（霊的太陽）の認識が消失したこと――は、その後の人類の精神発展と深く結びついています。ルドルフ・シュタイナーは、人間は「体・魂・霊」の三つの要素から成る三元的な存在であると繰り返し述べてきました。そして、この人間の三元論（トリコトミー）が、ある時期の公会議（869年の第8回コンスタンティノープル公会議）の決定によって廃止され、それ以降、人間は「体と魂」だけで構成されると見なさねばならなくなったことについても語っています。

しかし、教義（ドグマ）を乾燥無味に固定したこの公会議の決定は、それに先立つ発展過程において、人間の意識から「第一の太陽」が失われていなければ不可能だったはずです。かつて崇拝され祈りを捧げられた霊的太陽を人々が忘れてしまったがゆえに、人間を二分割（ディコトミー）する考えに先立って、宇宙論的な二分割が起きていなければならなかったのです。

869年の公会議で廃止された「霊」とは、輪廻転生を繰り返す人間の真の「自我」であり、キリスト存在、すなわち「霊的太陽」と結びつくことで初めて持続し得るものです。このようにして、歴史の中で三重の太陽は二重の太陽へと移行し、「太陽存在としてのキリスト」という秘密は失われてしまいました。その結果、私たちは次第に「宇宙的視点を欠いたキリスト教」を抱えることになり、今日の文化はその弊害に苦しんでいるのです。

しかし、さらに先へと進むと、このプロセスの自然な帰結を目にすることになります。かつてローマ人がまだ知り、崇拝していた太陽（霊的太陽）さえも忘れ去られてしまうのです。今日では、ただ唯一の太陽、すなわち空に見えるあの外的な「太陽球」だけが存在するものとされています。科学がそれを調査し、独自の方法で描写・説明し、それこそが唯一の現実であると信じているものです。今日、一般的な通念にとどまる限り、科学的意味においても宗教的意味においても、太陽の中に「霊的なもの」を見出すことは不可能です。

現代人にとって太陽は、単なる「燃え盛るガスの塊」に成り下がってしまいました。熱を放射するストーブのように、灼熱のガスで構成され、空から熱を送ってくる球体にすぎません。

最後に残されたこの太陽こそが「ルシファー的な太陽」であり、そこでは最高位から最低位に至るまでの「取り残された存在たち（退化した霊的存在）」が支配し、働いています。ルドルフ・シュタイナーは、一方では極めて高く評価していた自然科学について（その内容を知れば評価せざるを得ないものですが）、かつて簡潔な一文でこう表現しました。「自然科学において、一体何が起きているのか。それは、『アーリマンがルシファーを描写している』ということだ」と。

この言葉が意味するのは、アーリマンが人間の中に発達させた能力、すなわちアーリマン的な力によって見出された認識手段や補助手段、器具を用いて、自然界の至るところで「立ち止まり、取り残されたもの」を描写しているということです。これが「アーリマンがルシファーを描写する」ということであり、今日唯一の太陽として知られている「取り残された存在たちの太陽」も、そのように描写されています。なぜなら、その太陽がいかに美しくとも――ルシファーもまた輝かしい存在ですから――、それは取り残された存在たちによって構成された存在だからです。分光計や望遠鏡、その他のアーリマンからインスピレーションを受けた発明品を用いて、人々は太陽を調査します。そしてその調査の結果、次のような結論に達します。「太陽には核（中心部）があるに違いない。しかし、その内部で何が起きているかは知るよしもない。なぜなら、その核は上に重なっている層によって覆い隠されているからだ」と。

さて、人々が語るこの太陽の中心点、この太陽の核こそが、通常の意味での空間ではない領域なのです。シュタイナーが常に「空虚よりもさらに空虚である」と語っていた場所です。そこは単に空っぽなのではなく、「負の空間」、すなわち「吸引する空間」なのです。そこは（空間的な表現を使わざるを得ませんが）第二階層の霊的存在たちが住まう場所です。自然科学が、太陽の表面が層を成しているために内部については何も知り得ないと主張するのは、ある意味で全く正しいのです。私たちは表面だけを見ているのです。

まず「光球（フォトスフィア）」があります。これは私たちが遮光ガラス越しに見たり、日没時に見たりする太陽の姿です。この光球とは何でしょうか（彩層やコロナもこれに含めて考えましょう）。それは私たちに、実在する「太陽面」や「球体」といった空間的な印象を与えるものです。しかし、空間そのもの、すなわち「空間の否定（負の空間）」ではないものこそが、まさに「取り残された形態の霊」の産物なのです。本来、太陽の内部に真に住まっているのは「正常な形態の霊」たちです。彼らの本質が内的太陽の本質を形作っています。しかし、その手前には、本来は「知恵の霊」であるべきだったのに、進化から取り残されて「形態の霊」の段階に留まっている存在たちが層を成しており、彼らが天空を移動する空間的な太陽という「幻影（イリュージョン）」を作り出しているのです。空間は本来、光と共に放射されるものであり、それは「異常な形態の霊」たちの産物です。

素朴な人間は、空間には形があるはずだと考えますが、空間に形はありません。まさにそこに、取り残された霊的存在、取り残された形態の霊による造形物が現れているのです。彼らは「叡智の霊」であるべきなのに「形態の霊」の段階に留まっており、私たちが「形あるもの」と感じたがるような空間を魔法のように見せていますが、実際にはそこに形はありません。（もちろん、この空間の謎の背後にはさらに多くのことが隠されていますが、まずはこのように感じ取ることができます。）そして、本来あるべきではない、そのような空間の象徴こそが、灼熱のガスでできているとされる太陽面であり、光球として私たちに現れているものなのです。

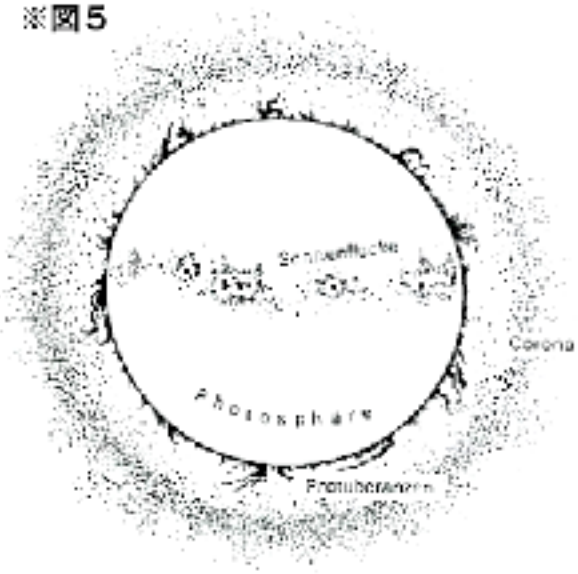
この光球の中には、暗い斑点、すなわち「太陽の黒点」が現れます。それらは光球から放射される光に比して暗い場所です。そこには、かつての「古土星紀」から「古太陽周紀」への移行に同調しなかった存在たちがいます。彼らは古土星紀の段階で立ち止まってしまったために、太陽と共に現れた「光の性質」を取り

込むことができませんでした。彼らは、古土星において自らの人間段階を通過した「取り残された人格の霊（アルヒャイ）」なのです。

太陽の光を十分に遮れば、光球はいつでも見ることができます。それに対して太陽の黒点を肉眼で見ることができるのは極めて稀なことで、一般的には望遠鏡を使わなければ観察できません。

さらに知覚が困難なのは、いわゆるプロトベランス（紅炎）です。これらは皆既日食の際、あるいは光を遮断する特殊な器具を用いることで観察されます。その時、いわゆる「太陽の炎」であるプロトベランスが姿を現します。それは一見、地球の火山噴火で燃え盛る溶岩が噴き出すように、太陽の縁から炎状に立ち昇っているような印象を与えます（図5参照）。

※図５



しかし、まさにその点に、太陽の本質に矛盾する現象が隠されています。というのも、本来の太陽においては、すべてを中心点に向かって、つまりそこに向かうものすべてを消滅させてしまう「エーテル空間」へと引き込む傾向があるからです。ここで、たとえばシュタイナーの連続講義『創世記の秘密』における「古太陽紀」の描写を思い出してみましょう。そこでは、光り輝く素晴らしい植物のような光の造形が太陽の中を通り抜け、分離しては再び戻り、現れては消えていく様子が語られています。今日のプロトベランスの中には、かつての太陽が持っていた存在性が「取り残されたもの」として生きています。それはちょうど、光はなく熱だけがあった「古土星」の法則性が、黒点の中に今なお示されているのと同様です。

プロトベランスの中には、古太陽の進化段階から取り残された大天使（アルヒアンゲロイ）たちがいます。彼らは本来、アーリマン的な存在です。そして、科学が太陽について研究する最後対象が、皆既日食の時にしか観察できないあの奇妙な現象、すなわち欠けた太陽の周囲に広がるコロナです。この最も希薄な構造、広大でありながら淡く輝く顕現の中に、私たちは「古月紀」の間に立ち止まってしまった最後の人類以前の存在、すなわち天使（アンゲロイ）たちの残存を見ることになります。コロナの中に、私たちは取り残された天使たちを見るのです。

このように、可視的な太陽を形作っているこれらの存在は、すべて「取り残された存在」として捉えられなければなりません。

今日考察すべき姿としての「三重の太陽」を、もう一度見つめ直してみましょう。語るべき多くのことのうち、ここではわずかな暗示にとどめるほかありませんが。

知っての通り、人間もまた「頭部人間」「胸部人間」「代謝・四肢人間」という三つの部分から成ると説明されてきました。私たちの頭部人間は、最も硬い物質を含んでいます。そこでは物質が最も重要であり、霊は物質の内部にあるのではなく、いわばその外側にあります。この動かざる脳という「反作用の場」において、霊が自らを鏡のように映し出すことで、私たちは意識を得るのです。そこには、私たちの中で最も物質的な側面があります。しかし同時に、私たちの頭部には最も強い「破壊の力」「分解の力」も存在しています。意識を浮かび上がらせるためには、絶え間ない分解現象が不可欠なのです。

分解現象を土台として私たちが発達させるこの意識こそ、ルシファーが人間の中に最初に点したものです。私たちが「思考の光」や「知性の光」と呼ぶのは、決して根拠のないことではありません。私たちは思考生活の中に実際にある種の光を持っており、それはルシファー的な思考生活、ルシファー的な光を体現しています。それは「認識の太陽」として、しかし最初は「ルシファー的な太陽」として私たちの中に輝いているのです。（これはまた、星空の日周運動と関わりのある、はっきりと目覚めた「昼の意識」でもあります。太陽は、天体の東から西への日周運動に同調する限りにおいて、この速すぎる回転に加担しています。ルシファーによって導かれるこの日周運動の太陽に対し、前回見たように、年周運動の太陽が「抑制」として働きます。それは頭部ではなく、心臓、すなわち感情生活に影響を及ぼすのです。）

胸部人間においては、霊と物質が波打ちながら混ざり合っています。そこでは両者の間で絶え間ない振り子のような動きが起きています。胸部人間には呼吸が息づき、そこから血液循環やあらゆるリズムが生じます。そこでは、人間に息（息吹）を吹き込んだ霊たち、すなわち地球進化の初期に胸部人間を通じて愛をもって人間と結びついた「ヤハウェ・エロヒム」の霊たちが働いています。ここにあるのが第二の太陽、すなわち第二階層の太陽であり、キリストが地球と結びつく前に、とりわけ深く結びついていた太陽です。血液、リズム、脈動の中に、第二の太陽は人間内部の存在として生きています。

そして代謝・四肢人間において、霊と物質は最も密接に結びついています。もちろん、代謝生活を価値の低いものと見なす通俗的な観念にとどまってはなりません。物質と完全に織り合わされているこの霊は、あまり高く評価されないこともありますが、実際には人間全体を構築・維持し、頭部が破壊したものを修復するという奇跡を成し遂げているのです。私たちがルシファー的な知性によって絶えず分解と破壊の力を体へ送り込む一方で、代謝人間による絶え間ない生命プロセスによって再構築が行われています。

この代謝・肢体人間において、私たちは一方では、あらゆる物質に秩序を与え介入する「父なる原理」の働きを強く感じ取ることができます。しかし同時に、「私と父とは一つである」というキリストの言葉を感じ取ることもできます。そこでは霊と物質がまさに一つなのです。もちろん、これらの言葉をあまりに形式的に解釈してはいけません。これらは秘儀の言葉（Mysterienworte）であり、いわばその全オーラを含めて受け取られるべきものです。代謝人間に「神の質（実体）」を注ぎ込み、神性を体験させることは、聖なるサクラメント（秘跡）に属することなのです。

このようにして、代謝人間や意志の人間とも結びついている「霊的太陽」を理解しようと試みることができます。頭部人間には「光」が生き、胸部人間には「愛」が波打ち織りなされ、代謝・意志人間には「生命」が流れています。この「光・愛・生命」という三つの言葉こそ、三重の太陽に対する純粋にキリスト教的な呼称なのです。真の秘教的キリスト教において、三重の太陽の知識が失われたことは一度もありません。これらの言葉はキリストと結びつけられてきました。この言葉を語った者は、根源において三つの太陽が一つであることを知っていたのです。

第一の、最高位の太陽は「キリストの太陽」です。それは太初にあり、万物を創造しました。第二の太陽は、キリストの導きの下、高次の階層の存在たちが地球から強力すぎる霊的力を切り離し、宇宙に太陽という天体を創設せねばならなくなった時に生じました。この太陽は、今日の物理的な眼には見えなかったはずのものです。ルシファーの働きが加わって初めて、太陽は視覚的で、光り輝き、眩いばかりの実体をまとうことになったのです。

キリストの太陽は地球と結合しました。これこそが、私たちが復活祭（イースター）の時期に思い起こす出来事です。そして聖なるクリスマスの時期に、私たちはキリストを宿す者（Christusträger）となるべき子の誕生を目にします。毎年、キリストの子はやって来ます。なぜなら太陽は一年に一度、その軌道の最も低い点、すなわち誘惑的な「高みの力」を最も発揮しない地点に到達し、同時に、目に見える光を持たず霊の眼にのみ輝く「真夜中の太陽」としての時刻を迎えるからです。

誕生から30年後、1月6日のヨルダン川での洗礼に始まり、その先3年3ヶ月続く「キリスト事件（キリストの地上の歩み）」の中には、地球進化の終わりに、霊化された地球と「第二の太陽」が結合できるための種子が宿っています。それはまた、単独では地球に対して焼き尽くすように作用してしまう「ルシファー的な太陽」を救済するための種子でもあります。

このような意味において、私たちはクリスマスという祭りに際し、地球がいかにして選ばれ、人間によってさらなる準備を整えられるべき存在であるかに思いを馳せるのです。

（Letter５）太陽と星々の年周運動について
Über die Jahresbewegung von Sonne und Sternen
1928年1月発行

●基本的な視点

・私たちが普段意識しているような「太陽が東から昇って西へ沈む」という
日周運動（地球の自転によるもの）ではなく、
一年かけて太陽が星座の間を移動していく年周運動について基本的理解を求める。

・太陽は東から西へ動くように見えるが、
星々との相対的な位置関係（年周運動）だけで見ると、
太陽は星座の中を「西から東へ」進んでいるように見える。

・ テキストのなかで「西から現れる」と表現されているのは、
地球の自転を無視して考えた場合、
太陽が背景の星々に対して少しずつ東へと遅れていく
（あるいは星々が西へ早く進む）様子を、
天球上の動きとして捉え直しているためである。

・私たちの24時間は太陽に基づいた「太陽日」だが、
星に基づいた「恒星日」は約23時間56分。
このわずかな差が、毎日少しずつ見える星座を変え、
季節の移り変わり（年周運動）を生んでいる。

●要約（ポイント）

○日周運動と年周運動の合成:

24時間の回転（赤道基準）と、
一年をかけた回転（黄道基準）が組み合わさることで、
空の景色は複雑に変化する。

太陽は一年かけて黄道（十二宮の帯の中心）を
西から東へゆっくり移動する（1日約1°）。
これにより、星々は逆に東から西へ追い越されるように見え、
真夜中に南中する星座が季節ごとに変わっていく。

実際の空の様子は、以下の2つの運動が重なり合って生まれる。

・日周運動：天の赤道に平行に、24時間で
東→西へ高速回転（太陽・星・黄道全体が一緒に回る）。
・年周運動：黄道に沿って、365.25日で西→東へ緩やかに移動。

○黄道の蛇行:

黄道が赤道に対して約23.5°傾いているため、
一日のうちでも星座が昇る場所や角度がダイナミックに変化する
「蛇行運動」を描く（図7参照）。
これが季節による日の出・日の入りの位置の移動や、昼の長さの変化の原因である。

〇季節による太陽の軌道:

太陽は常に黄道上にいるため、黄道の傾きに従って、
夏は高い南中高度と北寄りの出没点、
冬は低い南中高度と南寄りの出没点を持つようになる。

〇歳差運動と北極星:

数千年単位で見ると、天の北極は黄道極の周りを回っており、
時代によって北極星は入れ替わる（かつてはりゅう座の星だった）。

〇太陽の歩み:

太陽は1日に約1度ずつ黄道上を移動しながら、日々の出没を繰り返す。

・春分（3月21日頃）：真東から昇り、真西に沈む。昼夜同長。
・夏至（6月22日頃）：日の出が北東より約36°寄り、南中高度が最高、昼が最も長い。
・秋分（9月24日頃）：再び真東・真西。
・冬至（12月）　　：日の出が南東寄り、南中高度が最低、昼が最も短い。

日の出・日の入りの地点は毎日少しずつ移動するが、
そのことは固定の目印（木・山など）で観察できる。

〇月と太陽の比較:

月は太陽よりもはるかに速く（1日約12度）西から東へ移動するため、
その動きは肉眼でも短時間で確認できる。

・月は約27.3日で黄道を一周（太陽の約12倍速い）。
・1日約12°西から東へ移動するため、
　短時間で星や惑星を追い越す様子が肉眼で確認できる。
・新月後、数日で夕方の西空に「三日月」として現れる。
・満月前後は、太陽が沈む頃に月が昇る。
・出没時刻は毎日約1時間遅れる（黄道の傾きにより遅れ幅に差が出る）。

〇黄道帯（ゾディアック）:

黄道は線ではなく、一定の幅を持った「帯」のようなものであり、
月や惑星はその帯の中を、黄道から少し傾いた軌道で通っている。

○新月後の三日月:

月が太陽から数度（数日分）東へ離れることで、
夕方の西の空に初めて見えるようになる。

○月の遅れ:

月は太陽よりもゆっくりと西へ沈んでいくため、
毎日約1時間（場所や時期により変動）ずつ、出没の時間が遅れていく。

○黄道の傾きの影響:

出没時間の遅れ幅が一定でないのは、黄道と赤道の傾きが関係している。

○観察の基礎:

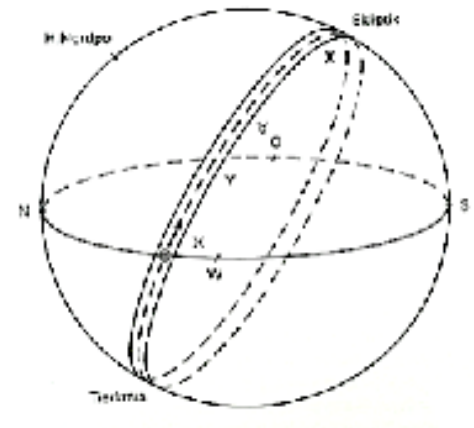
数学的な計算よりも先に、まずは肉眼で見える動きの基本を理解することが、
天文学を学ぶ上での土台となる。

●本文

　私たちは今、日が長くなり、太陽が高く昇っていく季節の中に生きています。図4を見ると、太陽がこの上昇軌道に乗っているのがわかります。ただし、これは一年のうちのもう少し先の瞬間、つまり太陽がまさに「牡羊座」のサインに入ろうとしている時を示しています。

※図4

※図4



・黄道十二宮とその記号

　牡羊座 ♈、牡牛座 ♉、双子座 ♊、蟹座 ♋、獅子座 ♌、乙女座 ♍、天秤座 ♎、蠍座 ♏、射手座 ♐、山羊座 ♑、水瓶座 ♒、魚座 ♓

こうした関係を明確に把握するためには、まず太陽の（あるいは地球の、と言ってもよいですが）「日周運動」を完全に度外視して考える必要があります。Lette 3 において、私たちが一種の仮定として太陽を排除し、地球の自転のみを考察したように、今度はこの地球の自転、すなわち東から太陽や星々が昇ることなどを一旦脇に置いて、天球上にどのような動きが残るのかを明らかにしなくてはなりません。

そのように観察すると、太陽は一年をかけて、いわば西から現れ、地平線を越え、子午線を通過し（つまり最高点に達し）、秋にはいわば東へと沈んでいくことがわかります。そしてクリスマスには、太陽はその軌道の最下点に位置することになります。太陽はこのようにして「黄道」を通り抜けます。黄道とは、前述の通り、黄道十二星座の真ん中を貫く円のことであり、太陽はここを一周するのに丸一年を費やします。

この動きは肉眼で直接追うことはできません。太陽の光が星々を覆い隠してしまいますし、さらに私たちは、この動きを組み込む形で時間を設定しているからです（太陽日と恒星日の違い）。しかし、その代わりにこの動きは星々の中に反映されます。星々は太陽とは逆の動き（現代の視点から言えば、これらはすべて「見かけの運動」です）、つまり前述の図にある矢印とは逆の方向に動いていくのです。そのため、一年の経過とともに、星々が（太陽の動きとは逆に）東から西へと追い越していくように見えるようになります。そして、ある特定の時刻（例えば真夜中）に南の空（子午線）に見える星座は、季節が進むにつれて次々と入れ替わっていくことになるのです。

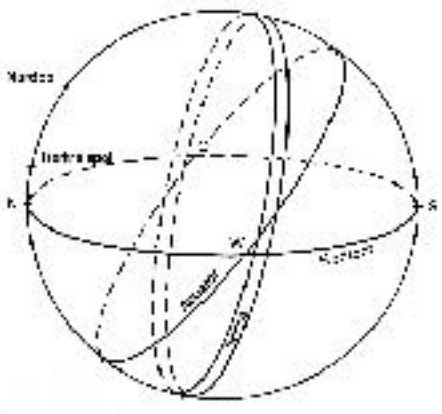
さて、これら二つの動きを合わせて考えてみましょう。つまり、単なる「年周運動」あるいは単なる「日周運動」という一方的な見方をやめて、一日の時間の流れの中で何が起こっているのかを問うてみるのです。

そこでは当然、本来の「日周運動」が強く意識されることになります。それは東から西へと向かう動きであり、天の赤道上、あるいは赤道に平行に展開されます。ここで言う「赤道」とは、地球の両極の中間を走る地上の赤道のことではなく、いわばその円平面を天球へと延長したもので、天の北極と南極のちょうど中間に位置するものです。この赤道は、あらゆる観測地点において地平線と真東（東点）および真西（西点）で交わり、南方に向かって、その土地の緯度に直接依存する高さまで上昇する円となります。北極に近づくほど赤道は低く横たわり、一方で北極星は北の地方へ行くほど高く昇ることになります。

24時間で一周するこの動きに比べれば、「黄道に平行して」行われる星々のもう一つの動きである年周運動は、完了までに365.25日を要するため、極めて緩やかなものです。ですから、例えば牡牛座が昇るのには約2時間かかりますが、（年周運動の結果として）同じ夜の時間帯に双子座が昇るようになるまでには、およそ一ヶ月が経過することになります。

黄道（十二宮）全体も、当然ながら他の星空と同様に日々の回転に巻き込まれています。そして黄道は赤道に対して傾いているため、この回転によって、赤道、ひいては地平線や子午線に対して、毎日非常に奇妙な「蛇行運動」を黄道が描くことになります（図7を参照）。

※図7



星空を観察する良い機会に恵まれている人、つまり大都会に住んでいない人であれば、わずか数時間のうちに、黄道（ちょうど東や西にある部分）が地平線と交わる点が、先ほどとは全く別の地点に移動しているのを追うことができます。以前よりも少し北寄り、あるいは南寄りになっていたり、あるいは地平線からの昇り方が以前より高く、あるいは低く、急峻に、あるいは緩やかになっていたりするのがわかるでしょう。

例えば、付随の図7では（北半球において）黄道が赤道よりも高く位置しており、地平線との交点は東点よりも北側に、西点よりも南側にあります。おそらく2時間後には、これらの交点は東点・西点と重なり、その後は反対側に移動します。それと同時に、地平線の上にある半円は次第に低く横たわるようになり、数時間後には再び反対方向に向かって同じ遊びを繰り返すのです。

黄道がこのように一日のうちに行うのと同じ動きを、一年を通じても示します。ただしそれは、常に同じ時刻（例えば真夜中）に観察を行った場合です。冬の夜には、黄道は牡牛座や双子座を伴って高く昇り、夏の夜には地平線に向かって低く傾きます。日の出・日の入りの地点も地平線上で移動します。

これと同じ現象が、一年の歩みにおける太陽の昇降地点の変化や、太陽の南中高度の高低にも現れます。なぜなら、太陽は常に黄道の中に位置しているからです。3月21日には、太陽は真東から昇り、真西に沈みます。その後、日の出の地点は日に日に北へとずれ、日の入りの地点も同様にずれていきます（太陽が西に到達するまでに、黄道もそれだけ北へと押し出されているからです）。正午の地点、すなわち南中点はより高く昇り、その結果、全体としてより長い昼の弧（日弧）が描かれるようになります。

これが6月22日まで続き、私たちの地方（ドイツ付近）では、太陽は真東から約36度離れた地点から昇り、同じく真西から離れた地点へと沈みます。南へ行くほどその差は小さくなり、赤道上では23.5度になります。その後、帰路が始まります。9月24日には再び東点と西点に到達し、その後は日の出・日の入りの地点は地平線上のより南寄りになり、南中点はますます低く、昼の時間は短くなっていくのです。

自宅の部屋から西または東の空を見渡せる環境にある人なら、日の出・日の入りの地点が移動していく様子をうまく観察できるはずです。比較対象となるもの――木、家、山など――があれば、そのずれは日々実感できるほど明確だからです。

また、黄道極（または十二宮の極。りゅう座にある一点）も、天の北極（小熊座にある一点）の周囲を毎日回転していなければなりません。しかし、後に見るように、2万5920年という壮大な「プラトン年（大歳）」においては、逆にりゅう座の点が不動のものとなり、天の北極のほうがその周りを回ることになります。この動きによって、人類は「方位」を定めるための北極星を、時代ごとに異なる星に求めてきたのです。

かつてギリシャ人が地中海を航海していた頃、彼らはりゅう座にある明るい星（この星座で最も明るく、尾の端の方に位置する星［※訳注: トゥバン（Thuban）：「かつての北極星」で、りゅう座の「しっぽ」の付け根あたりにあるアルファ星。現在は星座の中で一番明るいわけではなく、現在はエルタニンが最も明るい星。トゥバン」という名前は、アラビア語で「ヘビ」を意味する言葉に由来している］を、自分たちの極星あるいは導き星として仰ぎ見ていました。一方で、先ほど黄道極と呼んだ点は、当時もやはり黄道極でした。この数千年におよぶ運動を前にすると、ゲーテが「現象の流転の中に静止する極」と呼んだものを永劫にわたって見守るために、龍がそこに配置されたのだという感慨を抱かずにはいられません。もっとも、こうした事柄については、また後ほどお話しすることにしましょう。

さて、西から東へと進み、一年かけて太陽に十二宮のサインを巡らせる「太陽の年周運動」に話を戻しましょう。例えば、太陽が牡羊座の1度にあるとき、太陽の進行はもちろん漸進的なものですが、その一日の間、太陽はいわばずっとその「1度」の地点に留まっています。そして、十二宮のその特定の地点とともに、

赤道に平行して東から西へと向かう日々の回転（日周運動）を行うことになります。つまり、太陽は「牡羊座1度」という点とともに昇り、子午線を通過し、沈んでいくのです。そして次に太陽が昇るまでには、太陽は「2度」の地点に到達している、といった具合です。黄道、すなわち太陽の軌道は、他のあらゆる円と同様に360度に分割され、さらに12×30度に細分化されています。これは、黄道と赤道が交差する二つの点のうちの一つ、すなわち3月21日に太陽が位置する点（春分点）を起点として計算されます。

これらの動きを月の動きと比較してみるのは興味深いことです。月は常に天文学者にとっての偉大な導師でした。なぜなら、その主要な運動は少なくとも概観しやすいものだからです。もっとも、そのせいで月は時として天文学者を誤った方向へ導くこともありました。月には本来の自転がなく、常に同じ面を地球に向けているため、かつての天文学者たちは「月が回らないのであれば、地球も回るはずがない」と考え、地球自転の可能性から目を逸らされ続けてきたのです。また、17世紀にニュートンが自らの万有引力の法則を月で検証し、それが証明されたとき、彼はこの法則が遠くの星々に至る全宇宙に共通する普遍的なものだと結論づけました。こうして、天文学の中に決定的な「唯物論」が持ち込まれることになったのです。

月も太陽や他の星々、惑星と同様に日周運動を行っています。月が毎日はっきりと東から昇るように見えない（実際には昇っているのですが！）のは、月の場合、太陽の年周運動に相当する「西から東への動き」の影響が非常に強く現れるためです。太陽の場合、その動きはすでにお話しした通り、一日につきほんの一歩に過ぎません。しかし月は、一年ではなくわずか27.3日（恒星月）で全天を一周します。しかも、一日の長さの設定において月の動きは考慮されていないため、月はその動きを太陽のように星々の背後に隠す（太陽日と恒星日の差にする）のではなく、私たちの目の前ではっきりと示してくれます。月は毎日（あるいは毎晩）、太陽が1度しか移動しないのに対し、約12度も東へと移動します。月がちょうどある星や惑星の近くにあるとき、一時間ほど観察していれば、月が共通の東から西への回転を行いながらも、西から東へとその星を追い越していく様子がよく分かります。この動きを12倍遅くしたものが、年周軌道における太陽の動きであると想像してみてください。

月の軌道も十二宮の中にありますが、太陽の軌道である黄道と完全に一致しているわけではありません。十二宮とは、いわば十二星座の幅ほどの広さを持ったベルト状の領域であり、その中には（黄道に対して）いくぶん傾いた軌道も収まることができるのです。黄道に対してこのようにわずかに傾いた軌道を持っているのは、月だけでなく惑星も同様です。

月と太陽の関係については、以前すでにお話ししました。月が太陽のそばにいた時、つまり新月の後、三日月として初めて再び姿を現すとき、月はその一ヶ月の歩み（月周運動）において、すでに太陽から2、3日分遠ざかっています。そのため、太陽の光線に遮られることなく見えるようになるのです。

もちろん、月が西の夕映えの中に姿を現すその日、月は同じ日の朝、太陽のすぐ後に東から昇り、いわば一日中太陽の後を追いかけていたのだと理解しなければなりません。ただし、一日の間に数度ずつ、徐々に太陽から遅れを取りながら進んでいるのです。朝の太陽光が月をかき消してしまいますが、夕方、太陽が沈んだ後のわずかな時間、月は「若き三日月」として輝くことができます。そしてその後、日周運動に従って、まもなく西へと沈んでいくのです。

月が満月になるまで、月は太陽から完全に離れて反対側の東へと移動し、太陽が沈むのとちょうど同じ頃に昇ってくるようになります。そこからは、月が毎日少しずつ遅れて昇ってくる様子を観察することができます。これは、月がその一ヶ月の軌道の始まりにおいて、毎日少しずつ遅れて沈んでいったのと同じことです。この日々の出没の遅れは、大抵は1時間強ですが、それよりも大幅に短くなることもあります。こうした興味深い差異もまた、黄道が赤道に対して傾いていることに関連しており、宇宙の姿に豊かな多様性をもたらしています。

ここでは、見たままの現象に基づいた「日周」と「年周」の基礎的な概念について、あえて詳しく説明しました。というのも、これらを完全に把握して初めて、天体現象を追い、それらに親しむことが可能になるからです。基礎的な概念さえ一度身につけてしまえば、他のあらゆる事象をこれらの運動の上に容易に組み立てていくことができます。

（Letter6）私たちの惑星系について
Über unser Planetensystem
1928年2月発行

●基本的な視点

太陽系の外見上の「仕組み」は、
霊的進化の闘争と犠牲の結果として生まれたものであり、
かつては「神々の事柄」だったが、地球進化の過程で
「人間の意識が宇宙に対してどのような態度を取るか」という
人間自身の問題へと移行した。

つまり、天体は単なる物理的物体ではなく、
霊的なヒエラルキー、後れを取った存在、人間の自由のための舞台であり、
その認識の仕方自体が人間意識の進化の鏡である、という壮大な物語。

●要約

シュタイナーの人智学的な視点から、
太陽系（惑星系）の霊的進化の歴史と、
それを人間の意識がどのように捉えてきたかが描かれる。

1. 太陽系の霊的・進化的起源（古き土星紀〜地球紀）

○天体の形成は高次の霊的階級と「後れを取った存在」の進化の過程であり、
人間が主要な要因となるために宇宙の外側に諸天体が築かれた。

・太陽・月・地球の三位一体として、太陽は「古き太陽紀」、
月は「古き月紀」、地球は現在の「地球紀」を象徴し、
それぞれが共通の地球体から順次離脱した。

・これらの分離の背後には、ルシファーによる誘惑、
ヤーヴェ（エホバ）の月への移行、エロヒム（太陽に留まる）、
そしてキリストの犠牲的行為という霊的闘争と進化がある。

・土星・木星・火星・小惑星帯などは、
「後れを取った存在たち」（ルシファー的要素）が物質と結びつき、
宇宙に独自の居所を築いた結果である。
小惑星帯は古き太陽紀〜月紀の「巨人たちの戦い」の跡とされる。

・惑星の運行そのものが、
「内面的な不満足・渇望」から生じたルシファー的な「惑い」の表現である。

・太陽は地球を離れる際に
エーテル（生命エーテルなど）だけでなく空気要素を伴い、
キリストはこれを後にゴルゴタの秘儀（死の体験）の準備とした。

現在も太陽にはキリストの力で貫かれた「エーテル化された空気」が存在し、
再臨が「雲の中で」語られる理由となる。

・月は当初「イマジネーション的」な存在だったが、
ルシファーとアーリマンの攻撃から人間を守るため
ヤーヴェが鉱物（硬い物質）を注入して変質させ、強力な先祖返り的透視能力を弱めた。
これにより人間の自由が確保された。

2. 人間の意識による太陽系認識の歴史的変遷（アトランティス時代以降）

・アトランティス中期以降、「仕組みとしての世界」が現れるまで、
惑星系は神々の領域であり、人間は直接体験していた（エジプト・バビロニア）。

・ギリシャ時代に「思考の誕生」とともに理論的考察が始まる。
プラトンは「惑星の運動を一様な円運動で説明せよ」と課題を出し、
神にふさわしいのは規則性と円だと主張。

・これを最初に数学的に解決した
エウドクソス→アリストテレス（55球体）→アレクサンドリア学派を経て、
プトレマイオス体系（2世紀）が完成した。

地球中心、周転円（エピツィケルEpizykel）＋導円（デフェレントDeferent）で
惑星の見かけの逆行・静止を説明。
内惑星（水星・金星）は太陽との強い親和性を保ち、
外惑星とは構造が異なる（秘儀的知識の残滓が見られる）。

・コペルニクス：
太陽中心の幾何学的モデル
（より簡潔だが本質はプトレマイオスと同じく純粋幾何学）。

・ケプラー：
円軌道・一様運動の要請を初めて放棄し、楕円軌道などの三法則を導く。

・ニュートン：
地上の力学法則を宇宙全体に拡張し、
「球体（スフィア）」を廃止して重力・放射状の力に置き換える。

●本文（意訳）

太陽、月、そして地球の中に、私たちは宇宙的進化の巨大な指標ともいえる天体の「三位一体」を見出します。これらは私たちの霊的な視線を、かつての「古き太陽紀」、「古き月紀」、そしてまさに私たちの「地球紀」の始まりへと引き戻してくれます。その始まりの時、太陽と月は相次いで共通の地球体から離脱していきました。ただ「古き土星紀」だけが、さらに初期の存在段階から今に姿を留めているように見えます。

この全プロセスの中には、壮大な進化の事実が表現されています。私たちは、今やその眷属とともに地球上で主導的な役割を担うことになったルシファーによる誘惑を思い起こします。また、月と結びついたヤーヴェ（エホバ）の決断についても同様です。ヤーヴェが月へ移った一方で、彼と同階級の霊たちであるエロヒムは太陽に留まりました。そして、太陽霊たちの最高代表者として、彼らと共に一度地球を去ったキリストの行為を思い起こすのです（『神秘学概論』参照）。今日の姿としての太陽系の背後には、こうした霊的な事実、闘争、そして進化の諸段階が横たわっています。惑星という存在が、単に空を彷徨う光の点以上のものとなるためには、惑星をもこのように考察しなければなりません。

さて、かつての「古き月」の進化の段階ですでに、太陽と月のほかに多くの天体が存在していました。それらは、土星紀、太陽紀、月紀の存在段階において、様々な段階で「後れを取った」存在たちの結果として生じたものでした。それらの存在たちは、同じく「後れを取った」特定の物質と結びつきました。もしそうでなければ、世界には物質（実体）は存在せず、霊的な存在性だけが存在することになったでしょう。彼らはこれらの物質とともに古き月を去り、自らの本性に従って活動できるよう宇宙の中に居所を築きました。

こうした分離が闘争なしに行われたのではないことを、私たちは連続講義『霊的ヒエラルキアとその物理的世界における反映（Geistige Hierarchien und ihre Widerspiegelung in der physischen Welt»）』［訳註：GA110］から知ることができます。そこでは、今日の木星と火星の間にある小惑星帯（プラネトイド）が、いかに一種の戦場の跡（瓦礫の原）であるかが描かれています。それは古き太陽紀から月紀にかけて戦われた巨人たちの戦いであり、当時は今日の木星軌道にまで達していた古き太陽の本体を、火星の軌道まで凝縮させようとしていた時の出来事でした。太陽自体は、当時すでに、他の天体を凌駕する進化した霊性を備えていました。それは、後に私たちが地球上で「キリスト」として認識することになる、あの存在のおかげなのです。

「運動の霊（デュナメイス）」たちによって凝縮されたこの太陽の周囲を、かつての「古き月」が回っていました。この周回運動の中に、私たちはある意味で太陽系における最初の回転運動を見出すことができます。素晴らしい連続講義『実相の観点から見た進化（Die Evolution vom Gesichtspunkte des Wahrhaftigen）』［訳註：GA 132］の中では、この運動の開始――まさに運動の霊たちに端を発するもの――がいかに、進化の歩みに最早ついていくことができなくなった存在たちのうちに生じざるを得なかった「内面的な不満足」や「切実な渇望」の表現であったかが描かれています。

内なる不安のようなものがそれらの存在を捉え、天体を動かしたのです。こうして私たちは、宇宙におけるルシファー的な「後れを取った」要素の中に、あらゆる惑星の運行、かつて繊細な感受性をもって「惑わされる星（惑星）」と呼ばれたものたちの運動の起源を見ることになります。たとえその「惑い」が、はるか昔から法則に従って進行しているとしてもです。

地球紀の進化の過程で、まず土星の存在たちが、次いで木星と火星の存在たちが共通の地球惑星から分かれ出し、宇宙の中に自らの居所を築きました。超人間的な存在だけでなく、地球進化の初期段階にすでについていくことができなくなった人間の魂たちも、地球を去ってこれらの新しい惑星へと移っていきました。

その後、いわゆる「ヒュペルボレオス時代」の終わりに、太陽が地球を離れます。その際、太陽はまもなく地球と太陽の間に水星と金星を形成することになる存在たちを伴っていきました。彼らは自らの内にルシファー的な性質を含んでいた存在、つまり月紀進化の目標に完全には到達していなかった存在たちでした。しかし彼らは人間を遥かに凌駕しており、太古の時代には人間の教師や指導者となったのです。

ここで、水星圏や金星圏（これらの圏域にとって、外的な[目に見える]水星や金星はある種の境界標となっています）に留まっている大天使や原始の霊（アルヒャイ）のような「規則的に進化した存在」と、個々の

惑星体と結びついている「多かれ少なかれ後れを取った存在」との違いを考慮に入れなければなりません。もちろん、高次のヒエラルキアに属する通常の霊たちも惑星と関わりを持っています。惑星の形成におけるルシファー的な性質を持つ存在たちの活動については、すでに第1回のレター（Ｉ）で指摘した通りです。

周知の通り、太陽は地球を去る際に、エーテルの諸種（生命エーテル、音エーテルなど）を携えていきましたが、それだけでなく、より物理的な物質である「空気」をも伴いました。キリストは、かつての太陽紀においてすでに空気の要素と結びついていました。当時における最も濃密な要素（空気）は、本来彼の崇高な本質にふさわしいものではありませんでしたが、彼はそれによって、後にパレスチナの地で成し遂げることになる「犠牲」への礎を築いたのです。すなわち、人間の肉体へと降下し、それを通じて「死」を体験するという犠牲です。

それゆえキリストは、太陽が地球を離れる際、後にゴルゴタの秘儀を真に成し遂げ、太陽と地球を再び結合させるために、当時存在した最も濃密な物質である「空気」を再び身にまとい、それを太陽へと組み入れなければなりませんでした。ですから、私たちは今日の太陽の上に、以前言及した様々な存在や物質に加えて、次のものを見出すことができます。それは、キリストの力によって貫かれた「ガス状・空気状のもの」であり、これは今日の地球の大気ともある種の親和性を示しています。そして私たちは、キリストの再臨が「雲の中に（大気の要素の中に）」語られる理由を理解することができます。それは通常の外面的な空気のことではなく、ある種エーテル化された、地球進化の初期にあったような空気のことなのです。

地球の太古の時代において、月の状況はまた異なっていました。ルシファー的な影響によって地球上の生存条件が悪化し、極少数の例外を除いて人間魂がもはや人間の肉体に留まることができなくなったとき、月は地球を去らねばなりませんでした。この離脱した当時の月は、本来「イマジネーション的」な形成物であり、現代の人間の目では捉えることのできない物質で構成されていました。

当初、月には「古き月紀」の作用が残っており、それが人間に強力な「先祖返り的な透視能力」を呼び起こしてしまったため、そのままでは人間が「自由」に到達することは不可能でした。ルシファー（およびアーリマン）によるさらなる攻撃に対し、善き神々、とりわけヤーヴェ神は、月をある種作り変えることを余儀なくされました。地球から取り出した硬い物質（鉱物）を月に浸透させ、ルシファーとアーリマンの攻撃に耐えうる濃密な鉱物組織へと変えたのです。

月から発せられる「イマジネーションを抱く力」は、現代の私たちの想像力（ファンタジー）の中にも今なお作用していますが、進化の過程でその力は弱められました。その結果、かつての霊視能力の代わりに、私たちの思考生活における「影のような像」をもたらすに留まるようになったのです。こうして人間の自由は確保されました。

以上のことからわかるように、天体の誕生の歴史は、まず高次の存在や後れを取った存在たちの進化の考察から始まらねばならず、そのプロセスの中でいかに人間が徐々に主要な要因となっていったかを見なければなりません。人間のために、宇宙の外側に天体が築かれねばならず、諸存在は自らの居所を去って地球へと降下したのです。

ここまでの記述は、第1回のレター（Ｉ）で述べた太陽系進化の初期段階に完全に基づいています。計算可能で厳格な法則に従って動く「仕組みとしての世界」が、太陽系の諸天体に関しても現れてくるのは、以前述べた通り、実はアトランティス時代の中期以降のことです。そして、人間がこれまでの文化期を通じて以前の段階を（体験として）繰り返した後、ギリシャ文化に至ってようやく、太陽系に対する「理論的な取り組み」が少しずつ始まります。

それ以前の民族、すなわちエジプト人やバビロニア人は、星の世界の謎について思索したわけではありませんでした。彼らは宇宙の法則を直接的に体験し、星々から地上界の秩序のあり方を教わっていたのです。初期のギリシャ人でさえ、まだ非理論的なやり方で星の世界に関わっていました。「例えば、タレスが商人、数学者、天文学者として自然現象について思索し、現代の研究者のように不完全ながらも自らの認識を『万物の根源は水である』という命題にまとめた、と考えるなら、それは確実に誤りです。その古い時代において数学者や天文学者であるということは、思考的・科学的な認識に依拠するのではなく、手業を頼りにする職人のように、実際的な事柄に携わることを意味していたのです。」

「思考の誕生」とともに、人間が宇宙について思索を巡らすことは避けられない事態となりました。惑星系の「上方」では、法則性によって運動の中にもいわば静謐と持続が支配しているのに対し、地上では、人間が時代とともに太陽系に対して抱いてきた、多種多様に動き変化するイメージが生じました。

エジプトやバビロニアへ旅して秘儀参入を受けたギリシャ人たちは、それらの民族が古くから記録してきた惑星の運動や日食・月食のリズムなどに関する膨大な知見を学びました。プラトンの時代のギリシャ人にとって、この認識はほとんど衝撃的なものでした。惑星が順行や逆行をし、静止したり不規則な動きを見せたりすることは、美と神的な支配を重んじるギリシャ的な感性とは相容れないものだったからです。彼らにとって天体は今なお神的な存在、あるいは少なくとも神的な存在の「体」として感じられていました。例えばアリストテレスは「金星」や「水星」とは言わず、「アフロディーテの星」「ヘルメスの星」と呼んでいました。それらと結びついたルシファー的な要素は、決して反神的なものとは見なされていません。ギリシャの神々は多かれ少なかれ皆ルシファー的な性質を帯びていたからです。しかし、「神が酔っ払いのように千鳥足で歩くことなどあり得るだろうか？」と、ある古代の天文学者は問いかけました。

そこでプラトンは弟子たちにある特定の課題を残しました。それは、「惑星の運動を、円を描く一様な運動として説明せよ」というものです。なぜなら、プラトンによれば、神々にふさわしいのは一様で規則的な運動と、神的と感じられる円の形だけだからです。

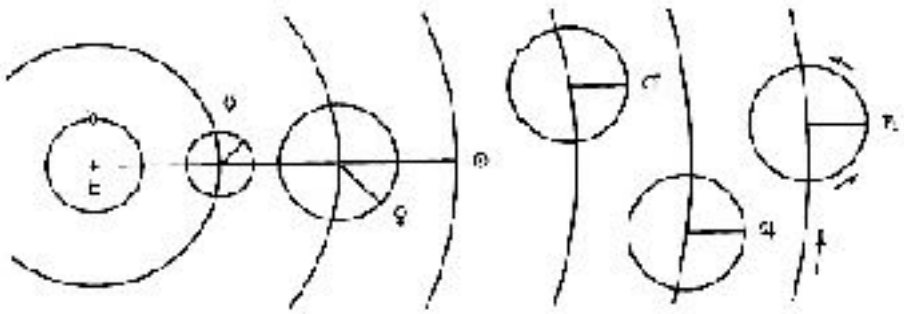
この点に、秘儀伝承で教えられてきた「惑星球（スフィア）」から、その球体の境界を示す「惑星の運動」の認識へと移り変わる重要な転換点が見て取れます。とはいえ、惑星はまだ球体と密接に結びついたものと感じられていました。球体全体が動くことで、その運動の響き合い（コンビネーション）の結果として、逆行や静止を含む惑星の軌道が生じると考えられたのです。エジプトで秘儀参入を受け、プラトン学派とも繋がりのあったエウドクソスが、このプラトンの課題を最初に解きました。アリストテレスはそれをさらに物理的な方向へと推し進めましたが、そこで行き詰まらざるを得ませんでした。彼が５惑星、太陽、月の運動を説明するために必要とした55の球体は、すでにある種の「メカニズム」と化しており、死後の生活の探究から生まれた古い秘儀教義の球体（スフィア）からは遠くかけ離れたものだったのです。その後、この課題はアレクサンドリア学派の天文学者たちによって、より数学的・幾何学的な手法で取り組まれました。球体は次第に実体性を失い、単に重なり合い、巡り合う「円」へと変わっていきました。

前述のすべてを総括した「プトレマイオス体系」を理解しやすくするために、こうした歴史的経緯を述べる必要がありました。紀元2世紀のアレクサンドリアで活躍したプトレマイオスは、その体系の背景に辛うじて「球体」を留めてはいたものの、自らをプラトンの要請を完遂する者であると自認していました。それゆえ、彼はその有名な著書『アルマゲスト（天文学大全）』の中でこう述べています。

「太陽や月と同様に、5つの惑う星（惑星）についても、その見かけの不規則性がすべて円上の等速運動によって表現可能であることを証明するという課題を我々が自らに課したならば――なぜなら、不規則や不均衡は神的な存在には無縁であり、等速運動こそがふさわしいからである――、そのような企てを幸福にも達成することは一つの偉業であり、真に哲学的基礎に立つ数学的科学の到達点と呼ぶにふさわしい。」

こうして彼は、惑星のループ状の軌道とそのあらゆる特異性を導き出すために、円の上に円を重ね、周転円（エピツィケルEpizykel）［訳註：主に古代の天文学において、惑星の複雑な動き（逆行など）を説明するために使われた数学的な円のモデル］を導円の上に載せました。彼はすべての惑星を地球の周りに回転させましたが、太陽と月を除き、それらは直接回転するのではなく、惑星自体が小さな円（周転円）を描き、その中心が地球を囲む大きな円（導円）の上を動くようにしました（図8参照）。

※図８



水星 ☿ と金星 ♀ の導円は太陽 ☉ と同様に1年で一周します。水星と金星の周転円は、いわゆる会合周期（太陽との合から次の合までの時間）で一周します。対照的に、外惑星（火星・木星・土星）では、小さな円（周転円）が1年で一周し、大きな円（導円）は惑星が十二宮を一周するのに要する時間、つまり恒星周期（木星 ♃ は12年、土星 ♄ は約30年）で一周します。

この体系の特別な特徴は、水星と金星の周転円の中心が常に太陽の中心と一直線（図に示されている線）上に並んでいることです。この二つの内惑星自体は、いわば一本の棒に繋がれたように、特定の法則に従って周転円の中心の周りを導かれます。これに対し、外惑星の場合は、周転円の内部で惑星を繋ぐ「棒」が、常に先述の（太陽を通る）ラインと平行でなければなりませんが、周転円自体は導円（大きな円）上のどの点に位置していても構いません。図8では、火星、木星、土星はスペースの都合上、太陽の近くに寄り添って描かれていますが、これらは地球や太陽の反対側、つまり満月のように「衝（オポジション）」の位置に来ることも可能です。

一方で内惑星については、それらが直接そこから生じ出た「母体」である太陽との、より親密な親和性が認められます。内惑星は太陽から決して遠く離れることはできず、いわば一本の大きな棒によって、周転円の中心を通じて太陽と連結されているのです。このようにプトレマイオスの記述は、太陽系のさまざまな親密な法則性を美しい形で表現しており、そこには秘儀の知識に由来する遠い源泉を認めることができます。コペルニクス体系では大きくかき消されてしまった、内惑星と外惑星（太陽の下方にあるか上方にあるか）という本質的な違いも、ここでは（周転円と導円の役割の入れ替えなどを通じて）見事に浮かび上がっているのです。

プトレマイオス体系をこのように図式的、ある意味では現代的に再現する場合、扱うのは常に一つの周転円（エピツィケル）――周転円を持たない太陽と月は除きます――と、その円周上を周転円の中心が移動する一つの導円（デフェレント）だけです。完全に構成された状態のプトレマイオス体系はもっと複雑なものでしたが、その主要な特徴はここにはっきりと表れています。

内惑星の周転円における回転は、会合周期（水星116日、金星584日）に対応すると述べました。これはプトレマイオス自身もそのように記述しています。しかし、小さな「棒」自体は、〔黄道面あるいは図の平面に

対して〕恒星周期（水星88日、金星225日）で一回転します。この差異の理由は、月の場合と同様の根拠に基づいています（第2回のレターⅠ参照）。外惑星の場合、これらの「棒」は、太陽や内惑星がそれぞれの導円において回転するのと同様に、1年で一周します。プトレマイオス自身は水星と金星の恒星周期を知りませんでした。それは本来、計算の結果として導き出されるものであり、一方で会合周期は、太陽との連続する合を観測することから直接得られるものだからです。

この体系は、先述の通り純粋にフォロノミー（運動幾何学）的なものです。つまり、運動の背後にある「動動力」を問うことなく、当時の状況においてプラトンが課した課題を（運動の一様性も維持したまま）完全に解決したものでした。ニュートンの影響を受けた現代的な思考からすれば、何の実体も存在しない点（つまり、導円上を回る数学的な点、あるいは「仮想の惑星」にすぎない周転円の中心点）を中心に惑星が円運動をするというメカニズムは、物理的に不可能です。しかし、古代の人々はそのようなメカニズムを問いませんでした。惑星や円を導き回すのは依然として「神々」の仕事であり、「引き合う力」や「重力」といった考えは存在しなかったのです。

コペルニクス（1473–1543）もまた、この点に関しては完全に古い魂のあり方を保っていました。彼の体系もまた純粋に幾何学的なものです。それは単にプトレマイオス体系よりも「簡潔」であるにすぎません。太陽を天体の中心に据え、惑星をその周りに巡らせ、地球を自転させるという幾何学的なモデルも成立し得ます。この体系は古代ギリシャでも知られていましたが、普及することはありませんでした。それは、水星と金星がすでに太陽の周りを回っている〔ちなみに他の惑星も同様ですが、太陽自体は地球の周りを回るという〕いわゆる古いエジプト体系とも共通しており、ティコ・ブラーエ（1546–1601）の非常に興味深い体系とも、ある種の親和性を持っています。

ケプラー（1571–1630）は、依然として霊性に貫かれたメカニズムの中から、コペルニクス体系に基づいて「ケプラーの三法則」を展開しました。ここで初めて、プラトンが求めた「運動の一様性」と「円軌道」という要請が放棄されることになります。

そしてニュートン（1643–1727）が、先述の通り、地上の物体と月との間に成り立つ力学的法則を全宇宙へと拡張しました。彼は辛うじて残っていた最後のアスペクトである「球体（スフィア）」を廃止し、それを放射状の力、すなわち「地上的な力の成分」へと置き換えたのです。これによって、人間の精神の発展史における、もう一つの必然的な段階に到達しました。惑星系の運動をめぐる問いは、地球進化の中間期全体（すなわちアトランティス時代から現代、さらにはその先まで）において、もはや「神々の事柄」ではなく、「人間の意識、および人間が宇宙に対してどのような態度を取るかという問題」となったのです。

（Letter7）金星と水星の運行、および復活祭について
Über die Bewegungen von Venus und Merkur Das Osterfest
1928年3月発行

●基本的な視点

人類の精神史において、惑星運行は時代ごとに多様な解釈がなされてきた。
現在目覚めつつある新しい霊的な意識に対応するためにも、
プトレマイオスやコペルニクスとは根本的に異なる
「魂の力」から生まれる宇宙観が必要である。
ルドルフ・シュタイナーの示唆している「レムニスカート運動」も、
抽象的な図式ではなく、精神科学的な全体像の中で、
人間とコスモスとの感情的・意志的な新たな結びつきを生み出す前提として
理解しなければならない。

復活祭の移動祝祭日という形式は、
ゴルゴタの秘儀と直接結びついた唯一の生き残りとして、
古い星の知恵を現代に正当なかたちで保っている。
単なる天文学的説明ではなく、
人間がコスモスと再び感情的・意志的に結びつくための道筋として、
この考察は位置づけられている。

●要約

1．金星と水星の運行（内惑星の特徴）

○金星（明けの明星／宵の明星）

太陽の内側を公転するため、「衝」はなく、内合（地球・太陽の間に位置、新金星）と外合（太陽の背後、満金星）の2種類の合のみ。

・明けの明星（東の空）として現れ、太陽から離れて西方最大離角（約48°）→最大光度（五日月状）→再び太陽に近づき見えなくなる。
・その後、宵の明星（西の空）となって逆の過程を繰り返す。
・月と同じ満ち欠け（位相）が見られる（肉眼ではわからず、1610年にガリレイが望遠鏡で初確認）。
・内合前後に約6週間の逆行（ループ）が発生。
・会合周期：約584日（19ヶ月半）。明け／宵の明星としてそれぞれ約290〜294日間観測可能。

○水星

太陽に極めて近く、周期はわずか116日。最大離角約29°と小さく、観測困難。
1年に最大7回の合と4回の逆行が可能で、動きが非常に躍動的（図13参照）。

古代人は明けの明星（ルシファー＝光をもたらす者、神々の使者）と宵の明星（ヘスペロス＝冥界へ導く者）を別々の存在として区別していました。

（本文の図10〜13は、これらの動きを地平線・黄道・位相・逆行などで模式的に描いたものです。）

2. 復活祭（イースター）の宇宙的・霊的意義

復活祭は「春分の後の最初の満月の後の日曜日」と定められています（325年ニカイア公会議）。これは古代神秘学の最後の名残であり、宇宙的思考が失われつつあった転換期に残された深い知恵です。

〇天文学的ルール

春分＝太陽が赤道を越える「勝利の太陽」。
満月＝エーテル体がコスモスに開かれる象徴。
日曜日＝7惑星の曜日順による「主の日」。
これら三つの要素が重なることで日付が毎年変動します（「リズム天文学」の例）。

〇霊的解釈（シュタイナーによる復活祭講義について）

古代参入体験が外在化したもの：満月でエーテル体がコスモスへ、太陽でアストラル体・自我が「太陽を運ぶ者」となる。
現代では太陽の力は衰退傾向にあり、満月は太陽の力を「奪う」存在として働きます。
それでも満月の後の日曜日にキリストが復活する――これは「人間がキリストの力と結びつくならば、太陽と共に地球を支え、担っていける」という希望の宣言です。
そこにはキリスト・ヤーウェ・ルシファーという人類進化の全容が凝縮されています。

（本文中の「現時点」の具体例［水星3月22日頃最大離角、金星7月1日外合］は執筆当時の状況です。）

●本文

私たちは、人類の歴史の中で惑星系がいかに多様な方法で考察されてきたか、そしてそれら個々の見方が、人類の精神史（それは同時に「人類の教育」を意味します）を考慮に入れるとき、いかに正当性、さらには必然性を持っているかを見てきました。

同様に、現在から近い将来にかけて新たに目覚めつつあるスピリチュアルな意識に伴い、宇宙に対する新しい観が到来せねばならないことも理解できるでしょう。この世界像は、プトレマイオス体系やコペルニクス体系とはまったく異なる魂の力から生み出されなければなりません。コペルニクスが、空間を孤独に転がる球体として描き出したものが、永遠に唯一正しい発見であると信じるのは神話にすぎません。

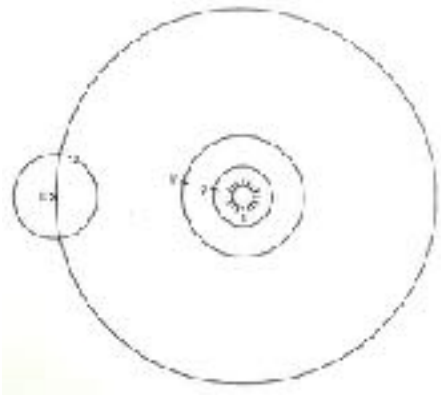
しかし一方で、ルドルフ・シュタイナーが伝えたような惑星運動に関する新しい見方が、コペルニクス体系と同じような方法で受け入れられると考えるのもまた誤りです。まさに新しい意識に訴えかけるべきものであるからこそ、シュタイナーが語った「レムニスカート（連珠形）状の運動」は、抽象的な図式で提示することはできないのです。

何よりも重要なのは、精神科学的な探求の全体像の中から、新しい体系を研究するための前提条件を作り出すことです。なぜなら、私たちが今必要としているのは、宇宙に対する新しい知的な説明ではなく、人間とコスモスとの感情的・意志的な新たな結びつきだからです。そしてこの結びつきは、認識を通じて、すなわち現

象そのものを知ること、あるいは過去から現在に至る人類の現象に対する知識を知ることによってのみ、実りあるものとなります。

言葉による表現であれ、図画による表現であればなおさら、あらゆる現象の描写は一面的なものにしかなり得ません。特に本質的に二次元である図面は、その時に照らし出そうとしている一つの側面を再現できるにすぎないのです。したがって、私たちはこの問題については、今のところこの程度に留めておきましょう。

※図9：内惑星（太陽より内側の惑星）の模式図

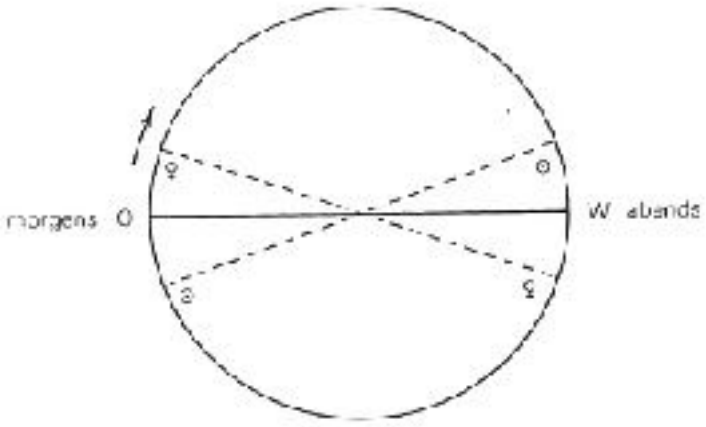


ここで、今月もそうであるように、金星が「明けの明星」である場合を考えてみます。添えられた「図10」において、円は太陽と金星が移動する黄道帯（獣帯）を表し、東西の線はある地点の地平線を表しています（天体図では地図とは逆に、東を左、西を右に配置するため、軌道の最高点［南］が上になります）。矢印は日周運動の方向を示しています。

したがって、上半分が目に見える天球（地上）となります。ここでは太陽が昇る直前の瞬間を描いています。金星は太陽に先んじて東の空に見えており、つまり「明けの明星」となっています。このとき金星は実際には太陽の「西側」に位置しているため、東の空で太陽から最も離れた状態を「西方最大離角」と呼びます。

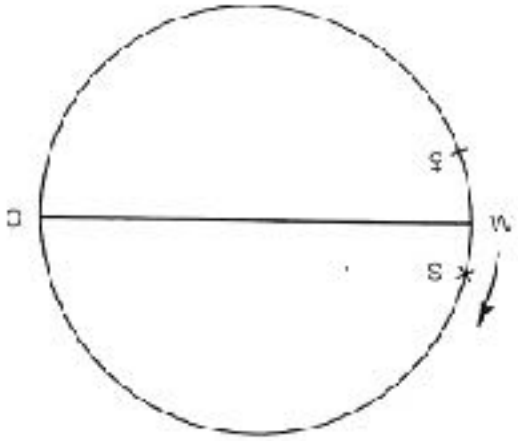
太陽が昇ると同時に、あるいはその少し前に、太陽の光が金星の光を打ち消します。すると金星は日中は見えなくなり、太陽に先んじて移動しているため、太陽より先に西へ沈みます。つまり、夕暮れ時に姿を現す機会がないまま、地平線の下に隠れてしまうのです。（この図を参考に、同じ日の夕方の西の空、日没時の状況を想像してみてください！）

※図10　（この模式的な二次元図面では、黄道帯と日周運動の円が重なる形で描かれています。）



こうした動きが長い期間（金星の場合は数ヶ月間）繰り返されます。ただ「明けの明星」としての金星は、最初は太陽からどんどん離れていき、太陽が昇るより前の出現時間が次第に長くなっていき、ついに「最大離角」に達します。その後、再び太陽に近づき、合（ごう）の状態になると太陽と一緒に昇るため、まったく見えなくなります。しばらくすると、今度は太陽の反対側に現れます。――ここで、太陽が日周運動によって西に沈んだ後、金星が遅れて地平線に到達する様子を想像してみてください。金星は「宵の明星」になったのです！（図11参照）

※図11



この経過はさまざまな方法で表現できます。ここでは、なぜ金星（および水星）が月と同じように満ち欠け（位相）を見せるのかがわかる別の図解を示しましょう。図10と図11では黄道帯を平面上に置いていましたが、今度はそれをいわば透視図法的に想像する必要があります。ここでは、太陽と金星の戯れを遠くから眺める観測者としての地球との関係で金星の公転を捉えますが、地平線（すなわち地球上の特定の地点）との関係は除外します。

そうすると、図12のようになります。そこには「新金星」とでも呼ぶべき状態、つまり金星が地球と太陽の間に位置する「内合（ないごう）」があるのがわかります。このとき金星は地球に最も近いため、円盤（の見かけの大きさ）は非常に大きくなりますが、合の状態にあるため数日間は観測が極めて困難か、あるいは全く見えません。その直後、東の空に「明けの明星」として現れます。この時の金星は、円盤自体は大きいものの、月でいう細い三日月のようなわずかな満ち欠けの状態にあるため、まだ光はそれほど強くありません。その形は、やはり東の空に見える「欠けていく月」に対応しています。

それから約35日後、満ち欠けの状態はまだ小さいものの、円盤が比較的大きいため「最大光度」に達します。この時の姿は生後5日の月（五日月）のようですが、形としては欠けていく過程にあります。さらに35日後、「最大離角」つまり太陽から最も離れた位置に達し、東の空で最も高く昇り、太陽よりかなり早い時間（4時間以上前）に昇るようになります。そして7ヶ月かけてゆっくりと太陽の方へ戻っていきます。このとき金星は「満金星」となり、太陽の背後に位置する「外合（がいごう）」の状態になります。そのため円盤の見かけの大きさは非常に小さくなります。

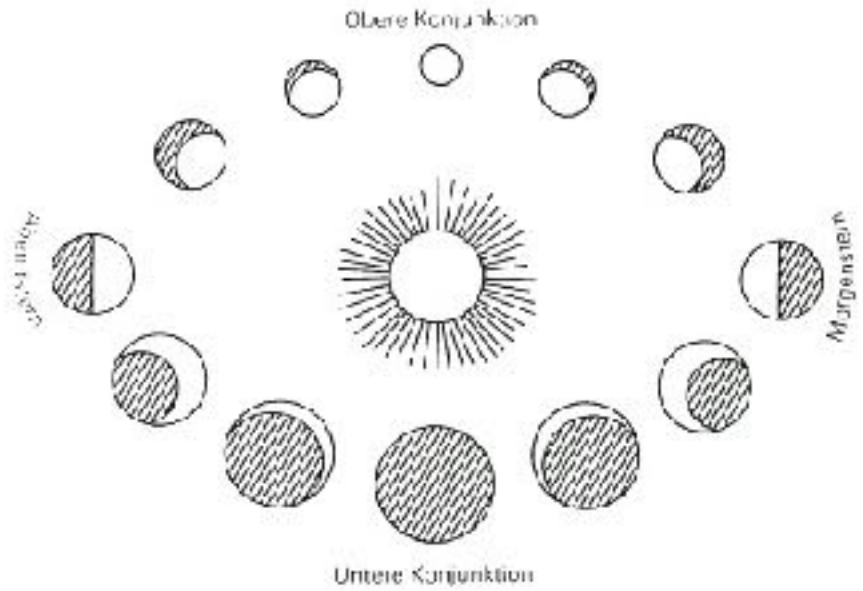
このように、金星と水星には2種類の「合」があり、「衝（しょう）」はありません。外合を「満月」と比較することはできますが、金星が太陽に対して地球の反対側に位置することは決してありません。太陽を通り過ぎた金星は、外合の後は空の反対側、西の空に「宵の明星」として現れます。そこで再び逆の順序で満ち欠けを経て、再び最大離角、最大光度へと至り、太陽へと戻っていきます。

内合に近づくと、金星は「逆行（ループ）」を描きます。短期間、見かけ上静止したあと、約6週間逆行します。つまり、太陽が（年周運動で）西から東へ進むのに対し、東から西へと太陽に向かって進むのです。この逆行運動の最中に内合が起こります。

その後、金星は再び「明けの明星」――かつて彼の故郷であり、今は彼の憧憬の対象であるルシファーの星――となります。古代人にとって「ルシファー（光をもたらす者）」あるいは「フォスフォロス」とは明けの明星のことだけを指し、宵の明星である「ヘスペロス」は、まったく異なるものを放射していました。ヘルメス（水星）においても、明けの明星と宵の明星は別個の存在として区別されていました。明けの明星は、翼のある足で神々の知らせを地上に運ぶ輝かしい「神々の使者」であり、宵の明星は「冥界へと魂を導く者」、あるいは現代の視点から言えば「真のイマジネーションの世界へ、そしてその中へと導く者」でした（『開始者の意識（イニシエート意識）』第10講参照）。

こうした満ち欠け自体は、古代全体を通じて知られていませんでした。肉眼では感知できず、非常に細い三日月状の金星であっても、素通しの目には強く輝く一つの星にしか見えないからです。1610年、ガリレイが発明されたばかりの望遠鏡を金星に向けたとき、初めてこの満ち欠けが発見されたのです。

※図12



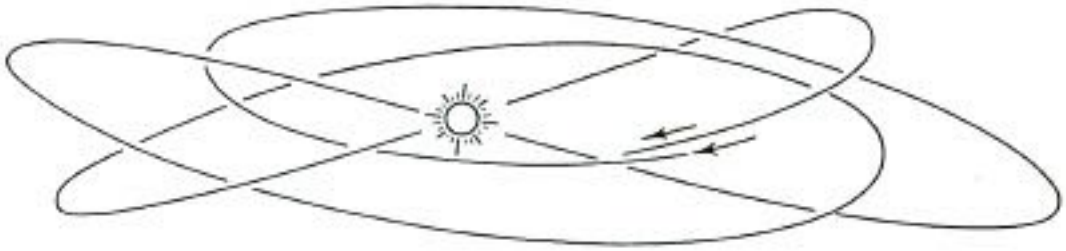
ここで、これまで静止しているものとして描いてきた太陽を、再び動かして考える必要があります。太陽が一年をかけて黄道帯（獣帯）を巡る一方で、金星や水星がその太陽の周りを振り子のように往復する様子を捉えることで、いわゆる「会合周期」を考察することができます。

金星が内合（あるいは外合）から次の合に達するまでには、584日、つまり19ヶ月半（1年半以上）を要します。その期間の半分にあたる290日から294日間、金星は「明けの明星」または「宵の明星」となります。それぞれの合の前後には、肉眼では見えなくなる一定の期間があります。

水星の場合も状況は似ていますが、太陽により近いため、その周期はすべてはるかに短く、全体でわずか116日です。水星は太陽から約29度までしか離れることができず（金星は48度）、そのため観測が非常に困難です。水星は1年に最大7回の合と、4回の（完全な形ではありませんが）逆行（ループ）を行うことができます。一方、金星は場合によっては一年を通じて一度の合で済むこともあり、それが外合であれば、その年に

は逆行が全く起こらないこともあります。水星の運動の躍動感を示すために、ある特定の年におけるその軌道を、特定の視点から描いたものが図13です。水星の持つあらゆる可動性がこの図に表現されています。

※図13



「現時点では水星は明けの明星です。条件が良ければ3月22日頃に、最大離角となる東の空で見ることができるでしょう。5月からは再び宵の明星となり、6月初旬に再び発見のチャンスが訪れます。このように一年を通じて数回チャンスがあります。金星は現在、明けの明星ですが、7月1日に太陽と外合になります。そのため、来たる晩夏から秋にかけて、再び私たちの夜空でその輝きを放つことになるでしょう。」

より動きを追いやすい外惑星については、後ほど考察することにします。ここでは、近づきつつある「復活祭（イースター）」に関連する考察を付け加えたいと思います。

周知の通り、復活祭は天文学的な観点から見て、その日付の変動性と決定方法において特徴的です。地球の歴史における最大の出来事である歴史的事実の記念日を、コスモス（宇宙）と結びつけるこの決定方法の中に、私たちは古代の神秘の知恵や参入体験の最後の名残を見ることができます。

325年に移動祝祭日としての復活祭を導入し、その算出規則を定めたニカイア公会議は、宇宙的な思考を持つ可能性が失われる世界史の転換点の直前に開催されました。この公会議自体、今日の基準で測れば、特別な神の啓示を期待できるような経過を辿ったわけではありません。それにもかかわらず、復活祭の決定方法には深い知恵が働いているのが見て取れます。

復活祭は「春分の日の後の最初の満月の後の日曜日」に行われることになっています。天文学的には、春分は太陽が赤道を越える時として特徴づけられます。そこでは太陽と地球がひとつの関係に置かれています。すなわち、暗い地上の領域を克服する、勝利の太陽です。そこに月が加わります。それは満月でなければなりません。そしてさらに、7つの惑星の曜日の順序に従って日曜日を待たねばならないのです。

これは、ルドルフ・シュタイナーが最後のアストロノミー講義（復活祭講義）で解説したように、かつての参入体験が宇宙的に外在化したものです。古代の神秘学において、人間は自らのエーテル体とともに満月の光の中へ、つまりコスモスの中へと出て行くことを学びました。そして高次の構成要素であるアストラル体と自我によって太陽の力に参与し、「太陽を運ぶ者」となったのです。その一方で、エーテル体においては、満月から来る反射された太陽光だけを受け取ることが許されていました。

神秘の時代は去り、人間の魂はもはやコスモスへと導かれることはなくなりました。しかし人々は、地球がその魂をコスモスへ、太陽へと送り出し始めるまさにその時期に、外なる満月を仰ぎ見ました。そして「主

の日」としての第一曜日（日曜日）に注目し、かつて人間が太陽や月と精神的に結びついていたように、太陽・月・地球を一つに結びつけたのです。

視点を変えてみれば、太陽・月・地球の相互関係によって決定される復活祭（イースター）――すなわち「復活の祝祭」には、いかに多くの事柄が表現されていることでしょう。キリスト、ヤーウェ、ルシファー。人類進化の全容が、あたかも一つの断面図のようにそこには現れています。

実のところ、この星々の配置には、宇宙的存在の第三段階、すなわち星々の力が及ぼす「作用」に対する記憶のようなものが残されています。満月は3月21日（後世の閏年の設定により、春分はこの日に固定されました）のすぐ後に来ることもあれば、ずっと後になることもあります。また、満月が週の初めに来るか終わりに来るかによって、「太陽の赤道通過（春分）」「満月」「日曜日」という三つの出来事が、互いに非常に接近することもあれば、大きく離れることもあります。そのどの場合においても、コスモスの作用はそれぞれ異なります。これらがいつ訪れるかは、空から読み取るか、あるいは公会議に由来する古い規則に従って算出しなければなりません。

そしてこの規則自体、かつての「リズム天文学」の素晴らしい例となっています。そこでは、月の公転周期に生じる（それ自体もまた法則的ではありますが）不規則性にはとらわれず、特定の「リズム」に基づいて計算されます。そのため、実際にはまだ満月になっていないのに、算出上は復活祭の日になることさえあります。確かに一度限りであったはずの歴史的な出来事の記念日を、このように変動する日付に結びつけるやり方そのものが、かつての魂の在り方を深く照らし出しています。今日では、こうしたやり方は「古臭いもの」と感じられるかもしれません。

しかし、私たちは自問しなければなりません。今日、復活祭の日付を（固定化して）確定しようとする理由が、こうした古い知恵の財産を一掃することを正当化できるのかどうか。そして、その日付を固定しようとする試みが今のところ成功していないという事実に、現代の物質主義に対する古い精神性（スピリチュアリティ）の力強さを見て取ることはできないだろうか、と。大天使ミカエルの課題がそうであるように、ここでも過去のものが正当な形で現代へと持ち込まれているとは考えられないでしょうか。

かつての星々の知恵は、鳴り響くのを止め、ルシファーの手に落ちてしまいました。しかしここ、移動祝祭日としての復活祭の決定方法の中においてのみ、その知恵は私たちの文化の一点に生き続けています。それが正当である理由は、それが「ゴルゴタの秘儀」と直接結びつけられているからです。だからこそ、古い知恵を現代の言葉で語ることも可能なのです。

ここで問題となっているのは、太陽・月・地球の間の相互的な力の関係を表現することです。ルドルフ・シュタイナーはかつて、春の訪れが人間にとってこれほど喜ばしいものである理由をこう指摘しました。それは、地上で新たに芽吹く力が、「地球は人間がその使命を果たすために、まだあなたを支える準備ができている」と告げているからだと。

しかし、それが可能となるのは、単に外面的・空間的に太陽が赤道を越えるだけでなく、地球にある混沌とした冬の力を克服するための力が、太陽の中に真に、実在として存在している場合に限られます。現在の地球進化の過程において、太陽の力は増大しているわけではありません。太陽はその最良のものをすでに地球に与え尽くしてしまい、今は衰退の途上にあるからです。そして満月こそが、太陽からその力を奪う存在なのです。

それゆえ、春が訪れるたびに、太陽の作用は弱まっていきます。そこで一つの問いが生じます。「太陽は、人間が進化のために必要とする期間、地球を生命ある状態に保ち続けることができるだろうか？」と。そのとき、その年の性質に応じて、春分の後に早かれ遅かれ満月が差し込みます。それはあたかも、楽園にいた地球の黎明期に、ルシファーに誘惑された人類をヤーウェ神が怒りをもって見下ろしたかのようです。

しかし、その満月の後に来る日曜日、キリストが地上の墓から復活します。人間は、自らをキリストの力と結びつけるならば、太陽と共に地球を支え、担っていくことができるのだということを知るのです。

（Letter8）惑星界について
Über die Planetenwelt
1928年4月発行

●基本的な視点

惑星界について
上級惑星＝土星・木星・火星の考察

人類の精神科学的な視点では、上級惑星（土星・木星・火星）は
下級惑星（水星・金星）と本質的に異なっている。
プトレマイオス体系では太陽が両者を明確に分かつ境界として機能し、
コペルニクス体系でも太陽を中心とした序列の中でこの区別が保たれている。

●要点

1. 上級惑星の天文学的特徴

・太陽に対する自由度が高い
　地球の反対側（衝＝オポジション）に位置可能。
　夜空で最も明るく、一晩中観測しやすい（特に真夜中に南中）。

・恒星周期（公転周期） vs. 会合周期（太陽との合からの周期）

　○土星：恒星周期 30年（29年167日）
　　会合周期 378日（1年＋13日）
　　※衝は毎年13日遅れ
　○木星：恒星周期 12年
　　会合周期 399日（1年＋1ヶ月）
　　※衝は毎年約1ヶ月遅れ
　○火星：恒星周期 687日
　　会合周期 780日（2年＋50日）。

・逆行・ループ運動
　上級惑星は衝の時期に逆行ループを描く（下級惑星は内合時）。
　ループは肉眼で追跡可能で、惑星が遅いほど長く続く。

　○土星：逆行約140日、ループ形成約8ヶ月
　○木星：逆行約120日、ループ形成約6ヶ月
　○火星：逆行約80日、ループ形成約4.5ヶ月

・天王星・海王星・冥王星も同様に逆行期間が極めて長い（5ヶ月以上）。

ループは単なる視覚的錯覚ではなく、
現象そのものとして捉えるべきであり、
シュタイナーが指摘するように、

上級惑星はこの時期に最も強く人間に働きかける。

2. 霊的・精神科学的な意味（シュタイナーによる）

上級惑星と下級惑星は「反転」の関係にある。

・上級惑星（霊的原型）：

○火星圏 → 「宇宙のロゴス」（言葉の源）
○木星圏 → 「宇宙の思考」
○土星圏 → 「宇宙の方向付け（オリエンテーション）」

これらは死と再生の間の霊界で、
人間が地上で再獲得すべき能力の宇宙的原型として体験される。

・下級惑星（肉体的・有機的刻印）：

○金星 → 言語（喉頭）
○水星 → 地上の思考（脳による論理的知性）
○月 → 歩行（地球重力への適応）

・対応関係：土星⇔月、木星⇔水星、火星⇔金星。

3. 現代における惑星の力の変容

ゴルゴタの秘儀以降、上級惑星の力は外なる自然界から退いた。
これは人間に自由を与えるための必然的な過程である。

・かつては感覚（特に視覚）を通じて
　道徳的・霊的な力として直接感知されていた。
・今や自然は「死んだ感覚知覚」となり、
　人間は抽象的思考で対応するようになった。
・これらの力は人間の内的な自由な霊的活動
　（集中演習、瞑想、世界思考への没入、発話形成など）によって、
　自ら掴み取らなければならない。
・無視し続けると、文明病（神経症、幻想増大、虚言癖など）が発生する。

下級惑星はカルマ・運命・性格を強く規定するのに対し、
上級惑星は「自由を授ける惑星」である。
シュタイナーの『自由の哲学』や
『いかにして超感覚的世界の認識を獲得するか』、
あるいは発話形成の仕事は、
まさにこの宇宙的法則性を現代に活かすための実践である。

この考察は、再び人間がコスモスと感情的・意志的に結びつくための
重要な一歩として位置づけられている。

●本文（意訳）

私たちは今、土星、木星、火星という「上級惑星」の考察へと移ります。これらは精神科学的な視点で見ると、下級惑星とは大きく異なります。ここでもまた、こうした考察においてはプトレマイオスの天動説的な宇宙像から読み取れるものが最も多いことがわかります。なぜなら、その体系では、太陽を境にして下級惑星と上級惑星が切り離されているからです。

コペルニクスの体系では、この位置（境界）に地球が置かれ、惑星は軌道の共通の中心である太陽から順に、水星、金星、地球、火星、木星、土星と、かなり画一的な順序で数え上げられます。この見方では、月は惑星とはみなされず地球の衛星（伴星）とされ、それは上級惑星の周りをそれぞれ複数の月が回っているのと同様に扱われます。

一方、惑星天球（スフィア）に基づいた順序は、周知の通り、地球、（月）、水星、金星、太陽、火星、木星、土星となります。このように、ここでは太陽が下級惑星と上級惑星を繋ぐと同時に隔てる要素として現れます。

上級惑星の第一の特徴は、太陽に対する運動の自由度が大きいことです。それらは太陽と比較して、地球の反対側に位置することができます。私たちが夜空に輝く上級惑星を眺めているとき、太陽はまさに地球の反対側の階下に位置しています。そのため、天文学者は上級惑星の「衝（しょう／オポジション）」を好みます（いわゆる占星術師たちは、全く別の理由からそれには同調しませんが）。なぜなら、この時期が観測に最も適しているからです。

例えば、土星が「衝」にあるとき、それは（大まかに言えば）真夜中に子午線を通過します。言い換えれば、南の空で夜の軌道の最高点に達する「南中」を迎えるのです。したがって、一晩中その姿を見ることができます。特に火星が「衝」に達するとき（この場合、暗黙のうちに常に太陽との反対位置を指します）

木星と土星は、幾何学的に見て火星ほど離心的な軌道（エキセントリックな軌道）を描かないため、その出現の仕方ははるかに安定しています。また、これらの惑星が「衝（オポジション）」または「合（コンジャンクション）」に戻ってくるまでの期間も、火星より短くなります。ここでもまた、月や水星、金星で行ったように、「恒星周期（恒星革命）」と「会合周期（会合革命）」の違いに注目しなければなりません。

前者は惑星と星界との関係、いわばその「アストラル的関係」を表し、後者は太陽との関係を表しており、こちらはより「エーテル的な性質」を帯びています。周知の通り、恒星周期とは惑星が黄道帯を一周して元の星の位置に戻るまでの時間のことです。その間に太陽も黄道帯を進んでいるため、太陽との「合」から出発した場合、再び太陽に追いつくまでにはさらに時間が必要になります。こうして、月、水星、金星における「会合周期」が生じるのです。

土星の場合、本来の公転周期である恒星周期は約30年（正確には29年と167日）です。1年経って太陽が黄道帯の元の場所に戻ってきたとき、土星は全軌道の30分の1しか進んでいません。つまり、太陽が1年の30分の1（約12日間）で進む距離しか移動していないことになります。そのため、太陽が土星を再び追い越すには12日余りの時間が必要となります。（これは「アキレスと亀」の逆バージョンのような問題です。）

それゆえ、土星の会合周期はわずか378日、つまり「1年と13日」となります。このことから、土星が夜の東の空に新たに現れたり、衝を迎えたりするのは、毎年12日か13日ほど遅れていくことになります。〈例えば、昨年5月26日に衝となったならば、今年は6月6日、来年は6月18日……といった具合です。〉

土星が長い間見えなくなる太陽との「合」は、常に「衝」から半年と6日後に起こります。そのちょうど中間にあるのが、いわゆる「方（ほう／クアドラチュール）」と呼ばれる、太陽から90度離れた位置です。このとき、太陽が沈む瞬間に惑星が南中する、といった現象が起こります。［ただし、これは一般的には非常に大まかな目安であり、正確に当てはまるのは、例えば太陽が日没時に春分点にある場合など、いくつかのケースに限られます。］

太陽の年周期によって大部分が決まる土星の「会合周期」に対し、土星固有の動きは黄道帯において低速で重々しく、その「恒星周期」には30年を要します。平均して土星は一つの黄道十二宮に2年半ほど留まるため、太陽はその年周期の中で、同じ星座にいる土星と2、3回続けて遭遇することになります。

木星の場合、恒星周期（公転周期）はほぼ正確に12年です。そのため、太陽が1年経って出発点に戻ってきたとき、木星を追い越すにはさらに12分の1年、つまり1ヶ月を要します。したがって「衝」は毎回、1ヶ月強の遅れで発生します。〈今年の場合、衝は10月29日、合は4月6日です（そのため木星は現在見えません）。1年前のデータでは9月22日と3月1日でした。〉

火星においては、2つの「衝」の間の期間はかなり長くなります。というのも、火星自体が空を回るスピードがはるかに速いため、太陽が再び火星に追いつくまでに長い間追いかけ続けなければならないからです。火星の恒星周期は687日で、丸2年には届きません。一方、会合周期は780日、つまり2年と約50日です。〈火星は今年の12月21日に太陽との「衝」を迎え、ちょうど今、早朝の時間帯に昇り始めたところです。7月以降は真夜中前に昇るようになり、年末に向けて昇る時間はさらに早まっていきます。〉

これらすべての運動において考慮すべき重要な事実は、それらが一定の速度で進むのではなく、「逆行」や「留（りゅう／静止）」を伴うということです。惑星は各会合周期の間に、ループ（回帰線）やジグザグの軌跡を描きます。ここでまた重要な違いがあります！ 上級惑星の場合は「衝」のときに、下級惑星の場合は「内合」のときにこの現象が起こるのです。

これらのループは非常に大きく、空の上で数度にわたって長く伸びるため、近くに比較対象となる明るい恒星さえあれば、肉眼でも十分に追うことができます。昨年の春（1927年）は、さそり座の星々が土星の描くループを観察するための明確な目印となりました。今年（1928年）の土星はさそり座の東側に位置しており、比較対象としてはあまり条件が良くありません。それでも、すでに3月29日に始まり8月17日まで続く逆行の様子は、肉眼でも観察できるはずです。火星についても、今年の後半から来春にかけて、ふたご座とおうし座の中に良い比較星が見つかるでしょう。

惑星の年周運動は、太陽や月と同じく、日周運動とは反対の「西から東」へと向かっています。したがって、土星が逆行していないときは、さそり座からいて座の方向へと動いていくのが見えます。やがてその動きが遅くなり、数日間静止します（今年の場合、それが3月29日頃でした）。そして今度は反対側、つまり西側のアンタレスの方向へと戻っていきますが、そこまでは到達しません。（この説明では、全天の恒星系が毎日回転する「日周運動」については常に除外して考えています。

8月17日頃になると、再び速度が落ちて静止し、そこからまた西から東へと順行し始めます。8ヶ月後には、この一連の動きが繰り返されます。時間的にも空間的にも、2つの静止ポイントのちょうど真ん中に「衝」が位置します。土星がいて座に入るのは来年（1929年）の初めになってからで、その後1931年までそこに留まることになります。

惑星の動きが遅ければ遅いほど、逆行に要する時間は長くなります。火星が比較的早く逆行を終える（会合周期26ヶ月のうちの約80日）のに対し、木星は各会合周期において約120日間、土星は約140日間も逆行します。さらに土星軌道の外側にあり、84年かけて一周するため会合周期がわずか369.66日である天王星（海王星は165年周期で会合周期367.5日、［冥王星は約248年周期で会合周期367日］）にいたっては、1年のうち5ヶ月を逆行に費やします［海王星と冥王星はさらにわずかに長くなります］。

一方で、単に逆行部分だけでなく、惑星がループ（回帰線）を描く全期間、つまり軌道上のほぼ同じ地点を2度通過する間の時間を考察すると、火星は約4ヶ月半、木星は6ヶ月、土星は8ヶ月かけてそのループを描くことがわかります。このことから、惑星の出現において「ループ形成」がいかに重要な役割を外見的にも果たしているかが理解できるでしょう。

このループ形成は、純粋な「現象」として捉えるのが最善です。つまり、プトレマイオス式であれコペルニクス式であれ、遠近法的な（視覚上の錯覚としての）説明を試みるべきではありません。なぜなら、それは外的な観測において紛れもない「現象」であり、レムニスカート状（八の字型）の惑星運動という観点からも、一つの実在として把握されるべきものだからです。事実、ルドルフ・シュタイナーは、上級惑星はまさにこのループを形成している時期に最も強く働きかけるという点に注意を促しています。

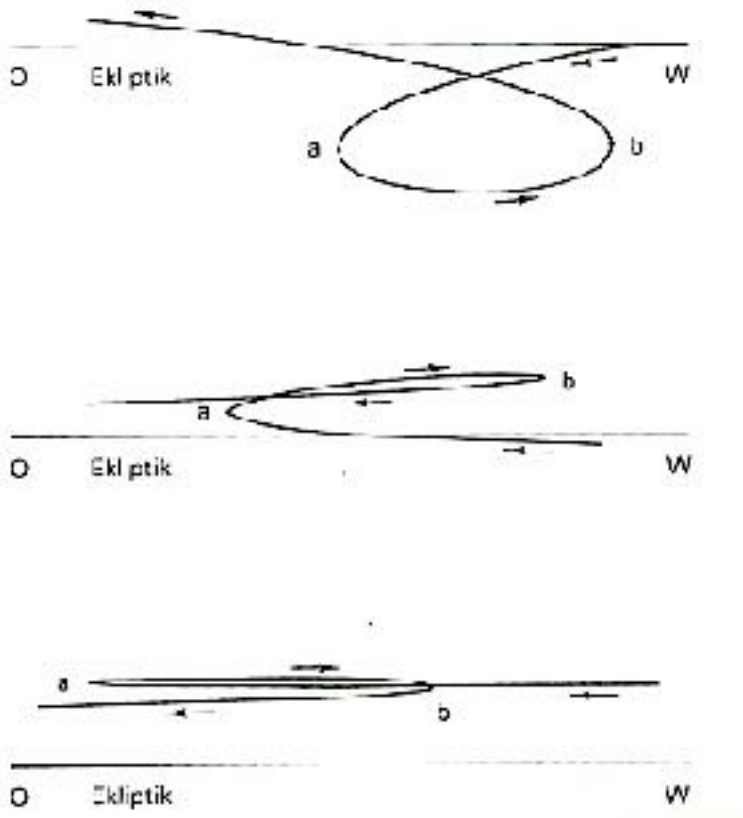
それに対して内級惑星（下級惑星）は、軌道のそれ以外の部分、つまり最大離角にあり輝きが最も強い時期、あるいは外合（上方のコンジャンクション）の時期に最も効果的に働きます。金星のループは8年間に5回起こり、その大きさ自体は全惑星のループの中で最大ですが、上級惑星に比べれば速やかに通過してしまい、金星軌道におけるその意味は火星や木星のループとは全く異なります。

金星の逆行運動を肉眼で追うことは非常に難しく、水星に至ってはほぼ不可能です。それらは（太陽との）合の前後で起こるからです。奇妙なことに、金星や水星は「最大離角」から再び太陽へと戻るたびに、運動の反転を行います。しかし、それは厳密な意味での逆行運動ではありません。宵の明星（夕方の金星）の場合、運動は確かに東から西へと向かいますが、例えばループ形成時の逆行のように黄道帯の順序（ふたご座、おうし座、おひつじ座……）に逆らって進むわけではないからです。この現象は、太陽と比較した際の順行運動の減速によって引き起こされます。徐々に速度が落ち、短い「静止」を経て、本来の逆行運動へと導入されるのです。

明けの明星（明け方の金星）の場合、状況はまた少し異なります。こうした諸関係を追っていくと、金星が「明けの明星」として、あるいは「宵の明星」として、まさに二つの異なる本性（存在）を現していることが、純粋に外的な観察からも示唆されるのです。そしてそれは水星についても同様です。

黄道に対して空に描かれるループ（回帰線）の形態について、ここでは火星と土星は1928年の軌道に基づいて示しています。金星については、この年にはループ形成が起こらないため、1927年のものを用いています（図14）。

※図14（説明文）：
金星の軌道：
1927年7月16日から10月19日まで。8月20日（a）から10月2日（b）まで逆行。
火星の軌道：
1928年9月から1929年4月まで。11月12日（a）から1月27日（b）まで逆行。
土星の軌道：
1927年末から1928年末まで。3月29日（a）から17月17日（b）まで逆行。（火星・金星の軌道に対して、尺度は3倍に拡大されている）



〈火星の「衝」は12月21日まで起こりませんが、晩夏以降におうし座で容易に見つけられるようになり、その後ふたご座に位置します。木星は9月初めから12月末までおひつじ座を逆行するため、その動きは十分に追跡可能です。土星についてはすでに述べました。天王星はうお座に、海王星はしし座のレグルスの近くにありますが、両惑星とも肉眼では見えず、小型の望遠鏡でも容易には識別できません。だからこそ、それらは18世紀、あるいは19世紀になるまで発見されなかったのです。〉

惑星をより霊的な側面から考察すると、すでに示唆した通り、下級惑星は多くの点において上級惑星の「反転」であることがわかります。上級惑星がより霊的な機能として持っているものを、下級惑星はより肉体的、有機的なものの中へと刻み込んでいくのです。

講義録『星の世界と人間、人間と星の世界の関係』（第1回講演）〔訳註：GA219。第1回講演「人間の身体的器官の霊的種子。歩行・発話・思考と霊的世界との対応」は、 1922年11月26日、ドルナハ Dornach。）〕では、死と再生（新しい誕生）の間の期間を歩む人間の魂が、どのようにして火星圏で「宇宙のロゴス」に、木星圏で「宇宙の思考」に、そして土星圏で「宇宙の方向付け（オリエンテーション）」に至るかが詳述されています。つまり人間は、幼少期の最初の数年間に、地球上の力として自ら再獲得しなければならない能力の「宇宙的な原型」を体験するのです。

これは、人間がいわゆる「霊の国」（『神智学』や『神秘学概論』の意味における）を通り抜ける時期に起こります。太陽圏を通過し、アストラル体という「第三の遺骸」を脱ぎ捨てた後、人間が真に宇宙的・霊的な存在として上級惑星の諸圏を歩むときのことです。その後、再誕生への帰路において、人間はさまざまな性質を持つ惑星の「重力（重さ）」に次第に捉えられていきます。ルドルフ・シュタイナーは、受肉への渇望が再び目覚める際、人間が自らに取り込むこうした重力の力について語りました。土星自体は「歓喜に満ちた憧憬」を重力として授け、木星は「地上の課題を喜びをもって引き受けること」を授けるのです。

太陽は、人間が霊的に獲得した諸特性を、より物理的・エーテル的なものへと変容させます。私たちは金星を通じて、後に地上で喉頭を鳴らして言語を話す能力を身につけ、水星は、木星の宇宙的な叡智とは対照的な、地上の脳で考え得る思考（論理的思考や結合的知性）を授けます。そして最後に月が、人間を地球重

力の圏内へと導きます。月は、下降してくる魂に、後に地上で物理的な体を持って「歩く」ことを可能にする力を組み込むのです。

ある意味で、土星は月に、木星は水星に、火星は金星に対応しています。地上へと向かうこの全行程において、黄道帯における惑星の位置やその軌道（ループを形成しているか、明けの明星か宵の明星かなど）が重要な役割を果たします。

地上に到着すると、人間はいわば再び「月」から始まります。最初の7年間（第1七年期）の発達は月の力に、次の7年間は水星の力に支配されます。子供が最初に身につける能力は、地上の重力の中で歩き、立ち上がり、動くことです。次に言葉が続き、最後に思考が続きます。ここで力の順序に一見「入れ替わり」があるように見えても、驚く必要はありません。これは金星と水星に関して繰り返し現れる、先に少し触れたあの入れ替わりなのです。

現代人にとって、下級惑星と上級惑星の関わり方は異なります。下級惑星の圏（スフィア）は、地上に戻る人間がすでにアストラル体を再びまとった後に通過するため（月圏ではさらにエーテル体が加わります）、カルマ（業）の決定に深く関わっています。ルドルフ・シュタイナーが「宿命の小包」〔訳註：Schicksalspaket／人間が生まれる際に持ってくる「運命の荷物」や「カルマの束」のような比喩的な概念。〕と呼んだものは月圏で受け取られますが、人間の肉体的な本質に現れるカルマについては、すでに金星と水星が強く働きかけています。

新しい地上生活における民族、家族、言語はこれらの圏内で決定され、性格や気質の素質も太陽と下級惑星によって形成されます。地上生活における分泌機能や腺機能などもこれらに支配されています。それに対して、上級惑星を通じて、人間ははるかに大きな「自由」の中に置かれます。これらの惑星は、少なくともその作用の一部を人間から引き込めています。それは、もはや道徳的な自然作用という回り道を介して人間に働きかけることがないからです。

かつて、ゴルゴダの秘儀において暫定的（最終的ではないにせよ）な終止符を打たれた古い時代においては、土星・木星・火星が外なる自然界に及ぼす作用は、人間の中で道徳的な形成力として表現されるものでした。かつての人間は、感覚、とりわけ目を通じて、例えば土星の作用を感知していました。物体から色彩を伴って反射する光の中に、人間はごく自然に、それを霊的な力として、一つの「道徳的なもの」として体験していたのです。感覚知覚とともに「宇宙の思考」が流れ込み、感覚界の物象や存在たちからは「宇宙の言語」が響いていました。それらは人間の中で単なる知識になるのではなく、まさに道徳的な力となったのです。

しかし、その状態では人間は完全に自由になることはできませんでした。そのため、これらの力は自然界から徐々に退かなければなりませんでした。まさに、人間を自由へと到達させるためです。外なる自然は、宇宙的・道徳的な要素を失い、人間に「死んだ感覚知覚」のみを提示するようになりました。人間はそこに、自らの抽象的な思考認識を適用するようになったのです。これは中世まで続く長いプロセスであり、中世において、かつての霊が浸透していた自然観は完全に枯渇し、近代的な自然科学が台頭しました。

しかし、これらの力が外部世界から退いたからといって、無効になったわけではありません。ただ、今や人間が「自由な霊的活動」によって、それらをいわば自ら掴み取らなければならなくなったのです。自然物の色彩豊かな光とともに、目を通じて道徳的な土星の力を「吸い込む」代わりに、ルドルフ・シュタイナーが示した集中演習（瞑想）において必要とされるような内的な努力を通じて、自ら「霊的な目」を発達させる能力を身につけなければなりません。世界思考へと没入することを通じて、自由になった木星の力と結び

つかなければならないのです。また、言語の力を、単に生体組織に規定されたものとしてではなく、「宇宙のロゴス」の顕現となり得るように扱う術を学ばなければなりません。

ここには、高次の世界へと至る発展のすべての道――シュタイナーが中世以降に形成された「新しい秘教（エソテリシズム）」と呼んだもの――が、この短い記述の中に含まれていることがわかります。錬金術師たちのように自然過程の中に道徳的な力を必死に探し求めたり、人間が宇宙に対して不自由であった時代の古い占星術の規則に固執したりする代わりに、ミカエル的な意味での現代人は、人間のために地上の直接的な環境から退いたこれらの「惑星の力」を活用する義務があります。それらの力は、人間によって「自由」のうちに把握されることを望んでいるのです。

このような光を当てて、シュタイナーの著作『自由の哲学』や『いかにして超感覚的世界の認識を獲得するか』、あるいは彼が私たちの運動のために示した「言語形成（シュプラッハ・ゲシュタルトゥング）」などを眺めてみてください。そうすれば、彼の生涯にわたる業績がいかに計り知れない射程を持ち、宇宙的な法則性に適ったものであるかを、別の側面から理解できるでしょう。

上級惑星は、道徳的影響に関する限り、外なる自然からは退きましたが、人間自身の中では働き続けています。ただし、ここでもその作用は下級惑星よりも微細で霊的なものです。下級惑星はまさに「運命を規定する惑星」であり、上級惑星は「自由を授ける惑星」なのです。もっとも、シュタイナーは次のようにも述べています。現在の外的な文明において一般的であるように、これら自由になった土星・木星・火星の力を無視し続けることは、悲惨な現象を招かざるを得ない、と。それを受け入れるための「新しい霊的器官」を作り出す代わりに、これらの力をいわば自由奔放に飛び交わせたままにしておくと、文明病としての神経症、幻想に陥る能力の増大、虚言癖の増加といった結果をもたらします。惑星が人間に及ぼす作用に関するこの認識の中には、精神科学の教えを単なる知識として受け取るのではなく、自分自身の「能動的な活動」への呼びかけとして受け取るべきだという、厳粛な戒めが込められているのです。

（Letter 9）日食と月食について、および聖霊降臨祭
Über Sonnen- und Mondfinsternisse
1928年 5 月発行

●基本的な視点

「食」という現象は、
宇宙の闇と光、悪と善のバランスを示す二重性を持っている。
一方で聖霊降臨祭は、それを超克する人間の霊的未来を指し示す。
空間と時間の束縛から解放され、
聖霊が人間の内なる霊に直接語りかける瞬間こそが、
現代のスピリチュアルな課題である。

●要点

1. 食の周期と外的な仕組み

・毎年2つの食の周期があり、それぞれ1〜3回の食（日食・月食）が起こる。
周期の開始は年々平均20日程度早まる。

・食は必ず節点（ノード）の近くで発生する。
月軌道と黄道（太陽軌道）が約5°傾いているため、
新月・満月が節点付近にないと食は起こらない。

○日食：新月時に月が太陽の前を通る（節点近くで重なる）。
○月食：満月時に月が地球の影（本影）に入る。

・1928年の例（本文執筆時）：

○第1周期（5〜6月）：
5月19日（皆既日食）→6月3日（皆既月食）→6月17日（部分日食）
○第2周期（11月）：
11月12日（部分日食）→11月27日（月食）

食は18年周期（サロス周期）でほぼ同じ順序・日付で繰り返される。

・月食と日食の違い：

○月食：地球全体から広く見える
（影の中に入れば全球的に皆既）。
○日食：局地的な現象
（影の帯は最大200km幅で高速移動）。
皆既・金環・部分に分かれる。

2. 霊的・精神科学的な意味

食は単なる物理現象ではなく、宇宙的・霊的な過渡現象である。

・古代北欧神話では日食を「太陽を追いかける狼」と表現。
　これはアストラル的観察として真実に近い。
・食の瞬間、霊的な闇の存在（悪の霊）に対する「排出口」が開かれる。
　神の計画の中で、悪に一定の場を与えるための必要不可欠な現象。
・月食では地球の影が「霊的な闇の存在たちの場」として機能し、
　月がそこに入ることで物質化される。
・食によって、空間的な要素（影・遠近法）が宇宙に持ち込まれ、
　普段はエレメンタル界に留まるものが一時的に目に見える形を取る。

食は「闇と悪の霊たちに必要な通り道」を提供する一方で、
人間が自由意志の中で善と悪を乗り越えるための宇宙的バランスでもある。

3. 聖霊降臨祭（ペンテコステ）とのつながり

キリスト教の三大祝祭は、それぞれ「空間・時間・超越」の次元を象徴する。

・クリスマス：
　幼子イエスの降誕。空間的なものの祝祭（宇宙の中心としての地球）。
・復活祭（イースター）：
　キリストの復活。空間の克服。時間の中で働き始める。
・聖霊降臨祭：
　空間・時間を超えた聖霊の降臨。
　火の舌として使徒たちに降り、それぞれの国の言葉で語らせる体験。
　空間も時間も超越し、人間を「癒し・健康にする」霊が直接内面に輝き入る。

●本文

（今年の5月は、第一の食の周期の始まりにあたり、それは6月まで続きます。第二の周期はその6ヶ月後、11月と12月にやってきます。）

　毎年2回の周期があり、各周期には1回から3回の食が含まれます。しかし、その開始時期は毎年平均して20日ずつ早まり、時にはわずか8日、あるいは4週間（丸一月の月周期分）早まることもあります。食が繰り返し、かつ次第に早く到来する様子をイメージしやすくするため、1924年から1928年までの該当する日付をここに挙げます（m＝月食、s＝日食）。

・1924年：2月20日(m) — 3月5日(s) ／ 7月31日(s) — 8月14日(m) — 8月24日(s)
・1925年：1月24日(s) ／ 7月20/21日(s) — 8月4日(m)
・1926年：1月14日(s) ／ 7月9/10日(s)
・1927年：1月3日(s) ／ 6月15日(m) — 6月29日(s) ／ 12月8日(m) — 12月24日(s)
・1928年：5月19日(s) — 6月3日(m) — 6月17日(s) ／ 11月12日(s) — 11月27日(m)

この表から、2つの周期がはっきりと現れていることがわかります。1927年に1月、6月、12月と3つの食の周期があったように見えるのは、3番目の周期がいわば（周期の）前倒しによって、年越しを挟んで1928年1月の周期から移ってきたものにすぎないからです。

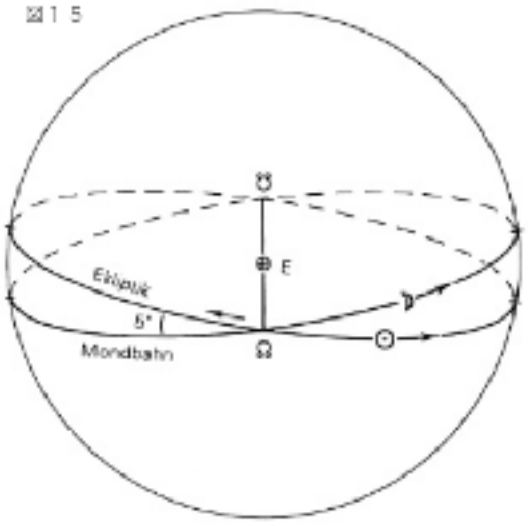
また、既述の通り、各周期における食の回数は1回から3回までの間で変動し得ること、一つの周期内では常に日食と月食が交互に起こらなければならないこと、しかし新しい周期が始まる際には、日食と月食のどちらからでも「心機一転」スタートし得ることが見て取れます。1926年のように、1年に最小回数である2回しか食が起こらない場合は、それらは常にどちらも日食となります。

もちろん、これらすべての法則の証明をここで簡潔に述べることはできません。ここで「食の周期」と呼ばれているものは、太陽と月（あるいは地球）の運動だけでなく、太陽の軌道と月の軌道の交点（これを「節（ふし）」と呼び、古語では「龍の頭（☊、昇交点）」および「龍の尾（☋、降交点）」と呼びました）の移動とも関係しています。

これらの節は、月の軌道にとって、太陽と地球の軌道における春分点や秋分点に似た役割を果たします。つまり、月がその軌道上で上昇したり下降したりすることを意味し、また逆行運動も行っています。この節の逆行は18年7ヶ月で1回転しますが、食はこの節の位置に縛られているため、これによって毎年、食の発生時期が早まっていくのです。

月の軌道は、黄道（太陽の通り道）に対して5度の角度をなしています（図15では少し誇張して描かれています）。他の惑星も空において、黄道に対して多かれ少なかれ傾いた軌道を示しますが、それらはすべて、かなりの幅を持つ帯である「黄道帯（十二宮）」の中に収まっています。唯一の例外は、火星と木星の間にある小惑星（プラネトイド）の一部で、これらはしばしば軌道が大きく傾いているため、黄道帯から大きく外れて移動することがあります。これらは私たちの太陽系の「通常の」構成物ではなく、ある「世界の闘争」の結果なのです（第5講参照）。

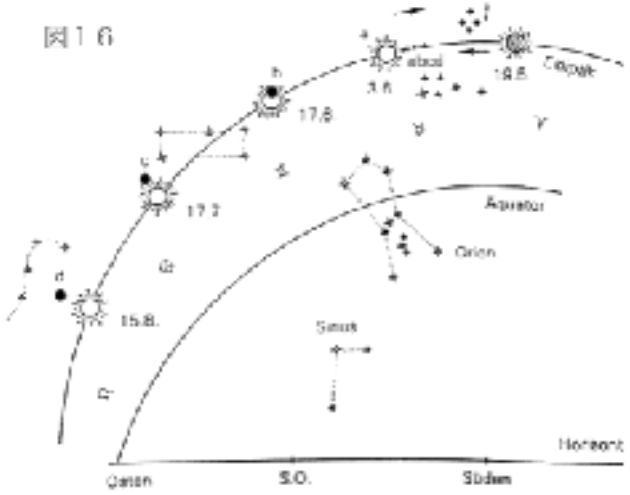
※図15



私たちの魂の生活においても重要な役割を果たすこの「交点（ノード）」を、一度空で探し出し、その月の月の軌道を想像してみることは良いことです。（現在、昇交点は牡牛座の恒星アルデバランの近くにあり（図16参照）、降交点は黄道帯の反対側、すなわち蠍座の赤いアンタレスの上にあります。したがって、双子座、蟹座、獅子座などの領域では、月の軌道は太陽の通り道の最高点よりもさらに高く上昇します。しか

し、月においてはこれらすべての状況がかなり急速に変化します。来年の4月には、一方の交点は牡羊座に、もう一方は天秤座に移っていることでしょう。（ここでは常に実際の「星座」のことを指しています。）

※図16



交点についてさらに詳しく触れる前に、純粋に外的な現象として現れる「食」の原理を考察しなければなりません。実は、月食と日食とでは、その根本にあるものが大きく異なっているのです。

月軌道と黄道（太陽軌道）が互いに5度の角度をなしているため、月による太陽の掩蔽、すなわち日食が起こり得るのは、第一に新月であること、第二に両者が交点（ノード）の近くに位置している場合に限られます。太陽がその年周軌道上において、すでに交点から遠ざかりすぎていたり、あるいはまだ遠すぎたりする場合（その限界は日食で18度、月食で12度です）、月の軌道およびその上の月自体が太陽の上側または下側を通り過ぎてしまうため、掩蔽は成立しません。これが通常の新月のたびに起きていることであり、その場合は「合（コンジャンクション）」ではあっても掩蔽ではありません。交点の付近においてのみ、太陽と月の円盤が重なり合うことができるのです。

図16からその様子が見て取れるでしょう。ここには1928年の第一周期の食が展開される黄道の一部が描かれています。逆行運動をする昇交点は、6月3日、6月17日、7月17日、8月15日の太陽の位置に対応して、連続する4つの時点a、b、c、dとして示されています。

5月19日には皆既日食がありますが、その時の交点はaの少し左側に位置します。この地点では、月の軌道は実際には太陽の軌道のかなり下を通っています。というのも、月がまだ昇交点の手前にあるからです。それにもかかわらず掩蔽、しかも皆既日食が成立するのは、この数日間、月がちょうど地球に最も近い位置（近地点）にあり、そのため月の円盤が最大となって、少なくとも短時間は太陽を覆い隠すことができるためです。この食は南極地方で起こり、部分食を含めても、人が住む地域ではほとんど観測されません。

14日後の6月3日は満月です。この時、太陽はちょうど昇交点（a）に位置し、月はその反対側、蠍座にある降交点に位置します。これが皆既月食です（この場合、月は当然ながら図の中に示すことはできませんでした）。

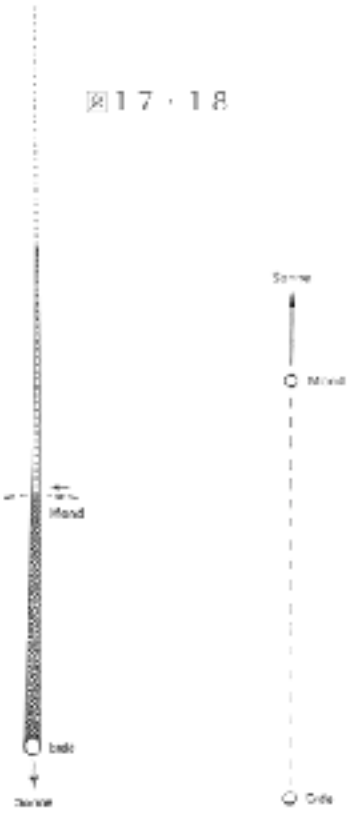
さらに14日後の6月17日は新月です。しかし、今度はごくわずかな部分日食しか起こりません。月の軌道が上がり、月は太陽の円盤の最上部を斜めに通り過ぎていきます。

次の段階である7月17日には、太陽はすでに交点から離れすぎており、月はもはや太陽に触れることはありません。次の新月である8月15日には、その差はさらに大きくなります。太陽がもう一方の交点に到達する11月になって初めて、再び掩蔽が発生します。太陽は11月23日にこの交点を通過しますが、その月の新月と満月の日付（11月12日、27日）の関係上、食は3回ではなく2回しか発生しません。これら5つの食のうち、中央ヨーロッパで見ることができるのは11月12日の部分日食だけです。

ある特定の年の日食と月食は、常に18年が経過すると、同じ順序で、かつわずか10日の違い（日付が早まる）を伴って同じ日付に繰り返されます。したがって、今年の5つの食は1910年のものに対応していますが、5月19日の代わりに5月9日に、6月3日の代わりに5月24日に、といった具合になります。ただ、今年6月17日の新月だけは、当時（1910年6月7日）はまだ掩蔽に至るまでにはなっていませんでした。こうした食の発生と消滅という非常に興味深い事実については、後ほど（101ページ以降参照）詳しく触れることにします。ここには、古くはカルデア人にも知られていた有名な「サロス周期」があり、これは節（ノード）の逆行運動と密接に関連しています。サロス周期には極めて重要な事柄が多く結びついており、それについても後でお話ししましょう。

食を記述し、外的な意味で説明するためには、普段は用いる必要のない空間的・透視図法的な要素を考慮に入れる必要があります。食においては、太陽、月、地球が空間的に前後に並ぶこと、さらには一つの天体がもう一つの天体に影を投げかけることが問題となるからです。これまでは天球上に月と太陽の軌道を描き、その交点である節を示すことができましたが、食そのものについては、月の軌道が太陽の軌道の内側にあり、月は太陽よりも地球に近いという、いわば球体的な視点ではなく半径方向の視点（奥行きの視点）を考慮しなければなりません。食が強いるこの二重の考察方法は、すでにその二面性（両義性）を私たちに明らかにしています。

外的な現実において月食が発生するのは、地球が太陽とは反対側の空間に投げかける円錐形の影（影錐）の中に月が入るためです。古代ギリシャの天文学者たちはすでにこの食の説明を知っており、月面（の欠け際）に映る影の輪郭から地球が球形であることを結論づけていました。一般的な天文学の著作では、この地球の影の円錐はほとんどの場合、単なる模式図として描かれています。実際の大きさの比率を考慮すると、通常の印刷ページでは明確に再現することができないからです。月と太陽の距離に関する通常の数値比率から出発すると、地球が空間に投げかける影の円錐は、地球の直径に比べて非常に細長く伸びたものになります。例えば地球の直径を12mm（1000kmにつき1mm）とすると、影の長さは約1.35mになります。その一方で、反対側にある太陽は150mの距離にあると考えなければなりません。太陽、地球、月の中心が一直線上に並ぶとき（それは天球上の月節の近くでなければなりませんが）、影はその長さの3分の1のところで月の軌道と交差します。その時に月食が発生し、それ以外の場合、満月時の月の軌道は影のすぐ上か下を通り過ぎてしまいます。食の際に月が潜り込む位置での影の幅は、もはや満月3個分ほどの広さしかありません。図17では、模式的ではありますが、ほぼ正確な比率で地球の影を描いています。少なくとも月軌道までは描かれており、残りの3分の2は点線で示唆されるに留めています。



※図17・18

食が起こっていないとき、本来なら「空虚な空間」に投げ出されているはずのその影が、果たして現実に存在するのかという問いを立てることは、確かに正当なことです。なぜなら、何もない（虚無の）場所へと落ちる影など想像できるでしょうか。地球のすぐ近傍、つまり地球を包む大気の層の中では、影は大気の中にその姿を現し、私たちにとっての「夜」という現象を引き起こします。（地球はいわば24時間かけて、その影の円錐の下を自転しながら通り抜けています。円錐そのものは、1年かけて一周します。）

地球の外側では、影は本来、霊的な形成物として、あるいは「霊的な闇の存在たち」が集まる場所としてのみ存在し得るのであり、月がその領域に入ったときに初めて、影は物質的な天体に落ちることで、いわば肉体を得る（具体化する）のです。このように考察することで、後に語られることになる「食の霊的な本質」についての準備が整うことになります。

一方、日食においては、月が太陽の円盤の前に立ち、月自身が影を作り出します。その影の先端は、地球に触れることがあります。皆既日食の際、最大で幅200kmにもなるこの影が、猛烈な速さで西から東へと地表を駆け抜け、すべてを夜の闇へと包み込む様子が見られるはずです。（月食の図と同じ比率で描けば、この月の影もまた細い線のようにしか見えず、月食と同様に、地球の大気圏内においてのみ実在性を認められるものです。図18参照。）

月が太陽の円盤の真ん中ではなく、少し上か下を通り過ぎる場合は、単なる部分的な掩蔽、つまり部分日食となります。さらに、すべての皆既日食は、中心帯（影の通り道）から外れた地域（影の帯の左右）にとっては、単なる部分日食にすぎません。また、月が地球から少し遠い位置（遠地点）にあるとき、影の円錐の先端が地球に届かず、地表の上空に浮かんだような状態になることがあります。その場合、皆既日食の代わりに、いわゆる「金環日食」が起こります。

ここでは「遠近法」や「視差」が重要な役割を果たします。これは月食の場合とは異なります。月食の場合、月が地球の影の中に完全に潜り込みさえすれば、その食は、月が地平線の上に出ている地球上のすべての場所、つまり地球のかなりの広範囲にわたって、等しく皆既月食として観察されます。それに対し、日食ははるかに限定的な地域現象なのです。

以上が、外的な観察から見た食の姿です。しかし、食において単なる外的な現象以上のことが起きているということについては、ルドルフ・シュタイナーがすでに1910年の講義録『ゲルマン・北欧神話に関連した個々の民族魂の使命』（第9講）の中で次のように述べています。
〔訳註：GA 121。第9講は「Loki – HödurとBaldur – Götterdämmerung（ロキ。ヘズとバルドル。神々の黄昏）」。北欧神話におけるロキの役割、盲目のヘズ（Hödur）がヤドリギでバルドルを殺す神話、そしてそれが象徴する「神々の黄昏」（Götterdämmerung = ラグナロク、神々の終末）を人智学的に解釈する講義。〕

「古代の北欧人が日食の際に見ているもの（もちろん、昔の透視能力を持っていた時代の人々は、今日の望遠鏡を使う人々とは異なる見方をしていました）を説明しようとするとき、太陽を追いかけ、それに追いついた瞬間に日食を引き起こす『狼』のイメージを選びました。これは、事実と深く一致しています……。今日の唯物論的な人々は、『それは迷信だ。太陽を追いかける狼など存在しない』と言うでしょう。……しかし、オカルト主義者（秘教研究家）にとって、それ以上に迷信深いと思えることがあります。それは、日食は月が太陽の前に立つことによって生じる、という考え方です。それは外的な観察としては全く正しいのですが、アストラル的な観察において『狼』のことが正しいのと同じくらい正しいにすぎません。むしろアストラル的な観察の方が、現在の本に書かれていることよりも正しいのです。なぜなら、後者（現代科学的視点）の方がより多くの誤りに陥りやすいからです。」

この一節は、単に空間を移動する天体についてだけでなく、食が近づくときに「諸球（Sphären）」の中で何が起きているのかを語っています。というのも、食とは「純粋に物質的・宇宙的なものと、宇宙的・霊的なものの中間に位置する、そのような移行現象」だからです。食は、外的な空間性のために、霊的なものを否定します。私たちが地球上で知っていると信じている「空間」、つまり地球的な存在における正当な現象としての「空間」が、食の際にはある意味で宇宙へと持ち込まれるのです。影は——月のものであれ地球のものであれ——、普段は元素的な領域（Elementarischen）にのみ存在しているものが、目に見える形成物へと凝縮されたものなのです。

先ほど引用したルドルフ・シュタイナーの講義からもわかるように、これらすべてには宇宙における正当な理由と必要性があります。意志や思考の中に生きる「悪」に対しても、排出口（Ventile）がなければなりません。そしてその排出口こそが、短時間あるいは長時間にわたって太陽や月の光が失われる「食」なのです。悪が神の決議によって世界に許容されたものである以上、食もまた神の計画の中に位置づけられたものなのです。

こう言いたくなるかもしれません。「この世界が創られたとき、神の知恵をもってすれば、食が起こらないように設えることも容易だったはずだ」と。例えば、月が今よりもほんの少し地球から遠いだけで、月の円盤が太陽を完全に覆い隠すことは不可能になり、皆既日食は起こらなくなります（しかし、その場合には人間もまた今とは全く異なる性質を持っていただろうことも事実です）。食が発生することによって、闇と悪の霊たちに対し、必要な量だけ、必要な場所において、宇宙空間へと通じる道が開かれたままにされるのです。

しかし、善なるもの、私たちが「聖霊」と呼ぶ霊は、空間の中にも、時間の中にさえも生きていません。そして「五旬節（ペンテコステ）」の祝祭において、私たちはキリストの弟子たちが一時的に空間と時間を超えて引き上げられた、あの体験を記念するのです。

初期キリスト教が——太陽が最も低くなる冬至を起点として——年初に定めた3つの祝祭をこのように考察してみましょう。深い冬の時期に、幼子イエスが地球という空間の中に生まれ落ちます。そのとき地球は、宇宙の中の一つの星として横たわり、宇宙全体がいわばその一点を凝視しています。宇宙的な父なる力に満たされた空間的なもの、太陽でさえ「真夜中の太陽」として射し通すもの、それを私たちに明らかにするのが「クリスマス（降誕祭）」です。

「復活祭（イエス・キリストの復活）」においては、すでに空間は克服されています。キリストは復活し、死と地球と空間に打ち勝ちました。空間的な残骸である聖なる遺体さえも、墓から消え去りました。復活した方は、物理的な空間的肉体のようでありながら、それとは似て非なる体をもって、あちこちで弟子たちの前に現れます。そこから、時間の中での彼の働きが始まります。キリスト衝動（Christus-Impulse）のさらなる発展にとって重要なのは空間ではなく、キリスト・イエスが生きた地球上の場所でさえありません。キリストはすべての民族のために死んだのであり、彼の衝動がどのように地上の空間に広がっていくかは、時間の中でしか辿ることができません。復活祭の日付の決定も、以前お話ししたように「時間」の原理に従っています。

しかし、五旬節の祝祭は、その根底において空間的な出来事でも時間的な出来事でもない、あの事件の追憶であり、また繰り返される更新です。そこにおいて人間は実際に空間を超越しており、空間と時間の彼方から聖霊が人間の霊の中へと輝き入るのです。雷光のような火の舌——雷光には時間がなく、空間を引き裂きます——のように、使徒たちの魂からは、聖霊が彼らに注いだものが放射されました。

聖霊とは、物質の中に生きない霊であり、それゆえに「聖なる（Heilig）」、すなわち人間に「癒やし（Heilend）」と「健康（Gesundend）」をもたらす霊です。キリストが「自分自身がゴルゴタの秘儀を通り抜け、死を通じて空間を克服し、父なる神と再び結ばれた後に初めて、その霊が来るだろう」と語った、その霊のことです。初めて聖霊が人間の中に現れることができたとき、そこにいた人々は、使徒たちが「それぞれ自身の言語で」話すのを聞きました。空間は克服されました。なぜなら、誰もがいわば自分の国、自分の故郷にいるかのようだったからです。時間は克服されました。なぜなら、ゴルゴタの秘儀が直截な体験として使徒たちの魂の前に立ち現れたからです。時間と空間の彼方から——当時も、そしてあらゆる時代においても——聖霊が人間に語るべきことが輝き差してくるのです。

1927年12月24日の日食に始まり、五旬節までもが食の周期の真っ只中に落ち込んでいるこの時期において、こうした思想に思いを馳せることはふさわしいと言えるでしょう。

（Letter10）食について（サロス周期とその意義）
Über die Finsternisse
1928年6月発行

●基本的な視点

サロス周期は、単なる機械的な繰り返しではなく、
宇宙の「生きているメカニズム」を示している。

食は悪に一定の場を与える神の計画の一部であり、
同時に人間が霊的に目覚め、物理的現象の背後にある
霊的実在を正しく評価するための重要な機会である。

この考察は、食を「恐ろしい天変」ではなく、
宇宙と人間の深層をつなぐ霊的現象として理解する視座を提供している。

●要点

1. サロス周期の仕組み

・月の節点（ノード）（昇交点・降交点）が
黄道を一周する周期は約18年7ヶ月。

・これを基にした「サロス周期」は18年10日（または11日）で、
太陽・月・節点の位置関係がほぼ完全に一致し、
日食・月食が同じ条件で繰り返される。

○この間に月は223回、太陽は18回公転。

・食の「シリーズ（家系）」は長期間続き、同一シリーズの食は
18年10日ごとにほぼ同じ特徴（食分・形状）で再来する。

・さらに三重サロス（54年33日）で地球上の位置がほぼ元に戻る。
（1回ごとに地球円周の1/3西へ移動）

2. 食の「生滅（誕生・生涯・死）」

・各食のシリーズには寿命があり、約1200年（日食の場合）続く。

○誕生：極地方でごく小さな部分食として始まる。
○成長：徐々に食分が増え、皆既／金環食になる（数世紀）。
○最盛期：赤道付近で最大の食。
○衰退・死：再び部分食となり、極地方で消滅。

・1928年は特別な年：

○5月19日：皆既日食の生涯の末期（南極通過）。
○6月17日：新しく「誕生」したばかりの食（北極海のみ）。
○11月12日：すでに衰退期に入った部分食。

3. 個人と人生への影響

・節点が誕生時の位置に戻る
　18年7ヶ月ごと（18歳7ヶ月、37歳2ヶ月…）に、
　人間の下意識・アストラル界に対する感受性が極めて高まる。
・奇妙な夢や重要な内面的体験が起こりやすい時期である。
・9年3ヶ月半ごとの「半周期」にも同様の影響が見られる可能性がある。

4. 霊的・精神科学的な意味（シュタイナー）

・食は「物理的・宇宙的なものと霊的なものとの過渡現象」。

・日食：
　地球から宇宙へ向かう「邪悪な意志」の排出口（安全弁）。
　皆既日食の暗闇の中で、技術の産物からデーモン的なものが現れる。

・月食：宇宙から地球へ流入する「悪い思考」の排出口。
・古代では食の時期に重要な神秘儀式を中断した。
　日食は「意志の問い」、月食は「思考の答え」と深く結びついていた。

・約70の「食の存在（Finsternis-Wesen）」があり、
　それぞれ独自の軌道を地球上に刻みながら、誕生・生・死を繰り返す。

●本文（意訳）

サロス周期（Die Sarosperiode）

　太陽の軌道と月の軌道の交点である「月の節点（Mondknoten）」（現在は牡牛座と蠍座に位置しています）が、18年7か月（と数日）かけて黄道帯を一周することはすでに説明しました。この周期は、あらゆる人の人生において重要な役割を果たします。なぜなら、節点は現代天文学が定義するように、単に「延長された月軌道面（verlängerten Mondbahn-Ebene）」と「見かけの太陽軌道（scheinbaren Sonnenbahn）」が交わる数学的な点として捉えられるべきではなく、いわばアストラル的なものの入り口であり、各個人の誕生時のホロスコープにおけるアストラル的に敏感な点だからです。

　ルドルフ・シュタイナーは次のように指摘しています。節点が誕生時の位置に戻ってくるたび、つまり人間が18歳7か月、37歳2か月……といった年齢に達するたび、その人の下意識（潜在意識）はアストラル世界に対して特に感受性が高くなります。それは奇妙な夢などの形で現れることがあります。こうした時期に経験する夜こそが、全人生の中で最も重要な時間なのです。ただ、多くの人はそれに気づかないため、この重要な時期をほとんど「眠りこけて（verschlafen）」過ごしてしまいます。少なくとも、この周期を生涯で4回経験したゲーテの場合、その伝記や日記、手紙、対話篇から、節点の回帰が与えた影響を興味深い形で証明することができます。人智学徒が自らの人生において、こうした時点を捉えようと試みるのは良いことです。ま

た、昇交点と降交点が黄道帯上の場所を入れ替える、9年3か月半ごとの「半周期」においても、同様の現象を見出すことができるかもしれません。

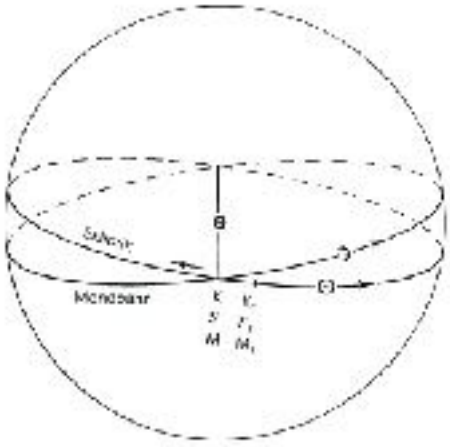
この周期はさらに、地球自転軸の「章動」（Nutation der Erdachse）と呼ばれる動きの中にも反映されていますが、これについては次回お話しします。

節点の公転をある程度短縮したものが「サロス周期」であり、これは「食の再来（Rückkehr von Finsternissen）」に関係しています。――今、皆既日食が起きたと仮定しましょう。太陽（S）、月（M）、節点（K）が黄道上の特定の場所で密接に重なっています。ここから三者はそれぞれの運動を続けます。太陽は約1年で一周し、月は1か月で一周、節点は逆方向に18年7か月かけて一周します。

すると、節点が元の場所に戻る少し前、18年と10日が経過したとき、節点は再び太陽と出会い、月もまたその場所にやってくることがわかります（この間に月は223回、太陽は18回公転しています）。その結果、かつての食がほぼ同じ条件下で繰り返されるのです。――もちろん、その間にも太陽と月がいずれかの節点で出会うたびに、日食や月食は繰り返し起こっています。しかしサロス周期が特別なのは、太陽と節点の距離、月の位置、食の欠け具合（食分）などが、18年10日前の状況と「ほぼ正確に」一致する点にあります。

これにより、最初の大本となる食に先行、あるいは後続する一連の食も、同じ順序で繰り返されることになります。すで指摘した通り、1924年～1928年に記録された食のシリーズは、1906年～1910年のシリーズ、および1942年～1946年のシリーズと、わずか10日か11日の違いで一致しています。つまり、18年10日の周期で展開され、長期間にわたって繰り返される日食・月食の「系」（eine Reihe von Sonnen- und auch Mondfinsternissen）が存在するのです（図19参照）。

※図19



しかし、まさにこの規則性の中に、宇宙の「メカニズム（Mechanik）」の驚くべき生命力を体験することができます。というのも、これらの条件はすべて「ほぼ」一致するのであって、随所に見られるわずかなズレが、単調になりがちな繰り返しに変化をもたらすからです。

特定の食は、18年10日（18年間に含まれるうるう年が4回か5回かによって11日の場合もあります）ののちに、ほぼ同じ条件で戻ってきます。この「18年」に「10日余り」が加わることで、太陽は約10度先に進んでおり、そのため食は天球上の全く同じ場所ではなく、10度東にずれた場所で起こります。しかも正確には10（あるいは11）日ではなく、10日と7時間42分です。

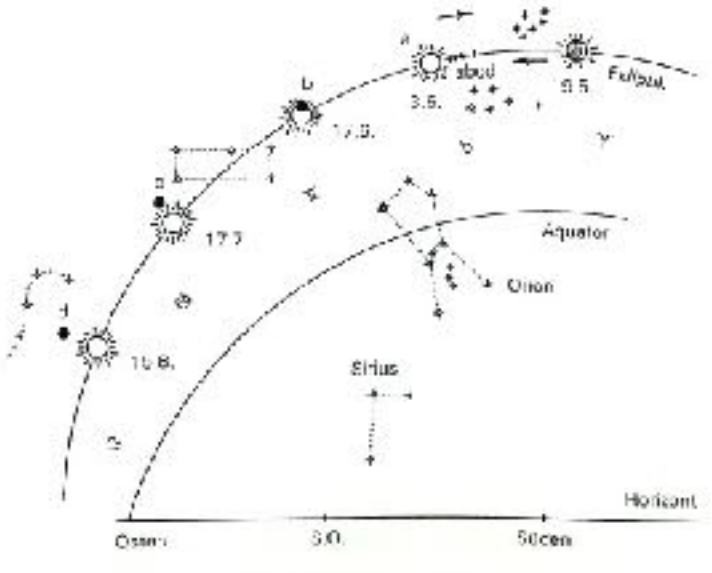
新しい食は、該当する日に7時間42分（一日の約3分の1）遅れて発生します。これは、地球が自転によって3分の1回転分進んでいることを意味します。そのため、再来した食（特に局地的な現象である日食）は、前回と同じ地域ではなく、地球の円周の3分の1だけ西にずれた地域で起こります。その次はさらに3分の1西へ。そして3回目の再来、つまり4回目の食となる54年33日後に、ようやく最初とほぼ同じ地域に戻ってくるのです（ただし、南北のズレは生じます）。こうして「三重のサロス周期（54年33日）」という食の連鎖が形成されます。

しかし、この54年後でさえ、新しい食は節点から全く同じ距離で起こるわけではありません。食は東から西へと、節点に向かって、そして節点を越えて、極めてゆっくりと移動していきます。こうして、長い歳月の間に新月が節点に十分近づき、太陽の円盤をごくわずかに覆い隠すことが可能になったとき、そのシリーズの「最初の食」がごく小さな部分日食として誕生します。次回の18年10日後、食は再び部分日食となりますが、前回より少しだけ大きくなります。そしておそらく6回から10回ほどのサロス周期を経て、節点に十分に近づいたとき、皆既日食として現れるようになります。

その後、数世紀にわたって皆既日食（あるいは金環日食）としてその地位を保ちます。18年ごとに節点に少しずつ近づき、やがて節点を通り過ぎると、再び部分日食へと戻り、最終的には食としての寿命を終えます。それは重なりを伴わない、単なる新月へと戻るのです。月食に関しても同様のことが言えますが、ただ満月の場合は常に太陽とは反対側の節点に位置するという違いがあるだけです。

こうした関係性は、図16を眺めてみると非常によく理解できます。例えば6月17日の食は、まさに「初めて」発生するタイプの大変珍しい食です。先述した通り、この食は1910年のシリーズには存在しません。いわば、この時期に食として「誕生」したのです。18年10日後には、太陽と月が節点に重なる距離が今よりもわずかに縮まり、食の発生場所は双子座の方向へさらに10度移動します。これにより、太陽と月の重なりは少しずつ大きくなっていきます。この食が節点の極めて近くで起こり、皆既日食となるのは、22世紀になってからのことです。

※図16



あるいは、5月19日の食を追ってみましょう。この食は節点の右端に位置しており、食の発生可能領域から外れつつあります。事実、5月19日がこのシリーズにおける最後の皆既食でした。次回の1946年5月30日には

すでに部分食となり、その後は欠け具合が減少していき、2054年8月3日に食としての存在を完全に終えます。過去に遡れば、この食は西暦936年から「金環日食」（月が小さく見える一種の皆既状態）として始まり、その姿で1000年ほど存続してきました。この食は西暦792年6月24日に昇交点の左端で「誕生」し、2054年8月3日に「死ぬ」のです。

つまり1928年の食の周期において、私たちは「新しく生まれる日食」と「皆既食としての寿命を終える日食」という、極めて稀な二つの事実に立ち会っていることになります。皆既日食の寿命は約1200年ですが、月食の寿命はそれよりも少し短くなります。

また、11月12日の日食が部分食であるのは、これがすでに皆既食の期間（1171年〜1874年まで続きましたが、実際には金環食でした）を過ぎ、再び部分食の段階に入っているためです。再び部分食として現れたのは1892年のことでした。

食のこうした「生滅」の様子は、天球上ではなく地上での動き、特に顕著な日食の影を追うことで、より鮮明にイメージできます。日食とは、先ほど述べた月の影が地表をなぞる現象であり、最長4時間かけて急行列車のスピードで地球上を移動します（特定の地点で皆既が見られるのは、長くてもわずか8分間です）。18年後、この影の通り道は地球の円周の3分の1だけずれて戻ってきます。そして54年後には、最初の通り道とほぼ並行する位置に戻ります。

新しく誕生した日食（例えば6月17日のもの）は、常に最初に地球の「極地方」をかすめます。昇交点（ドラゴンの頭／Drachenkopf）で生まれる食は北極を、降交点（ドラゴンの尾／Drachenschwanz）で生まれる食は南極をかすめるのです。最初の皆既食も、やはり極地方で起こります。その後、数世紀かけて影の軌道は徐々に赤道へと降りていき（この時、食は節点の真上で起こります）、さらにもう一方の半球を通り抜け、反対側の極に達してその生涯を閉じます。今年の（1928年の）日食に当てはめると、具体的には以下のようになります。

・5月19日：西暦792年6月24日に北極で誕生。現在、皆既食としての末期にあり、皆既帯は南極地方を通過している。

・6月17日：今回初めて食として発生。そのため、影は北極海にのみ落ちる。

・11月12日：西暦991年4月12日に南極で誕生（降交点で発生したため）。すでに部分食の段階に戻っており、食の最大地点は北半球の高い緯度を通過している。部分食の範囲はアジアを越えて広く及び、私たちの地域（ヨーロッパ）でも日の出時にごく小さな食として観測される。

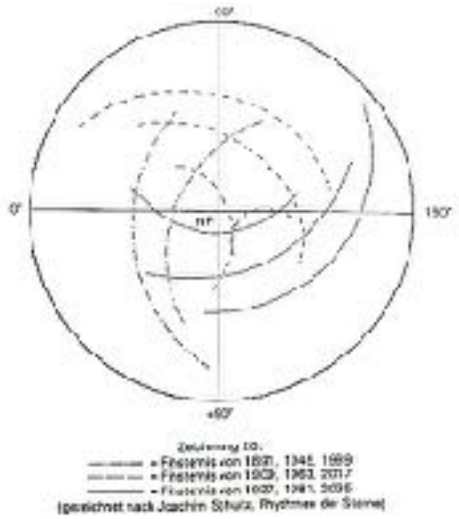
6月3日の月食は節点の近くで起こるため、いわば「働き盛り」の年齢にあり、皆既食の期間の真っ只中にあります。私たちの地域で見られなかったのは、月が地球の影を通過する際、まだ月が昇っていなかったためです。観測可能だったのは南北アメリカの西側でした。
11月17日の月食も前者のものと似ていますが、今回は太陽が降交点側にあります。これも皆既食で、寿命の中ほどにあり、より北寄りの位置で起こります。西欧や北欧では、月没直前にわずかに観測できるでしょう。中央ヨーロッパでは観測されません。

地球上を描く日食の軌道——月の影の円錐の先端が地表に記す線——は、極めて驚くべきものです。ここでは、多くの人が記憶しているであろう1927年6月29日の日食について、「三重のサロス周期」を3回分図示します（図20）。この食はイギリス北部とスカンジナビアで皆既となり、北極海とシベリア北東部を通り抜けました。この食はまだ比較的「若く」、部分食として始まったのが1639年、皆既食となったのは1891年で

す。そのため、現在もかなり北寄りの地域で発生しています。図では、北極を円の中心とし、外周を赤道とする投影法で地球を描いています。北極から0度に向かう線は、グリニッジ子午線にあたります。

ここで扱っている食（1927年のもの）について、1891年から2035年までの各サロス周期における軌道を図20に示しています。3×3＝計9回のサロス周期分を、異なる点線で描き分けました。影が極から赤道へと徐々に降りていく様子が見て取れますが、これに続く数世紀の間には、さらに南極へと向かって下降していくことになります。

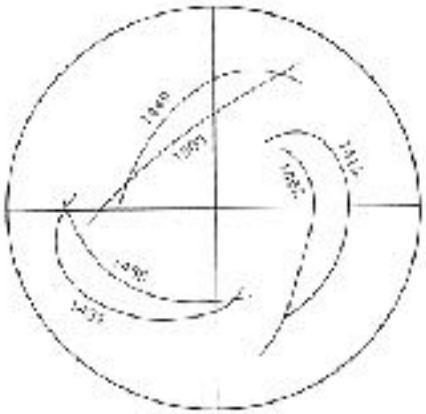
※図20



私たちは、いわば空間と時間の中にある地球が、食の軌道という奇妙な網目に覆われているのを目にしています。それはあたかも、悪というものが地球上のあらゆる場所で一度は顕現する機会を得ているかのようです。毎年、ある一連の食の曲線が北極から南極へと降りていき、別の（降交点による）一連の曲線が反対方向へと昇っていきます。数世紀の時を経て、これらの軌道は多種多様な「ルーン文字」のように地球に刻み込まれてきました。

実際、これらの文字を追っていくと、特定の「食の存在（Finsternis-Wesen）」たちが、ある決まった様式で極から極へと自らの誕生・生・死を経験していく際の、刻印や足跡に触れているような印象を受けます。ある存在は、図20に示した1927年の食のように、サロス周期の再来ごとに美しく整った一連の線を地球に描き出します。またある存在は、先日終わったばかりの5月19日の食のように、地表に真の「いがぐり頭」のような荒々しい軌道を描きます。さらに別の存在は、二つの食の軌道が三日月形に交差するようなサロス周期を持っています。（図21参照。数字は食の年を表します。）

※図21



全部で約70の「食の存在」があり、そのうち30は月、40は太陽に属しています。月食は日食に比べると個性が薄い印象を与え、特定の軌道を描くというよりは、むしろ地球の全域を照らし出します。食を一種の「安全弁」として捉えるなら、この違いも理解できます。日食は、地球から宇宙へと放射される「邪悪な意志」のための弁であり、対して月食は、宇宙から地球へと流れ込む「悪い思考」のための弁なのです。

1922年6月25日の講義では、古代の秘儀参入者たちが太陽と月の光についてどのように語っていたかが伝えられています。彼らは自らの問いを、日の出の時、しかも「新月」の時に宇宙へと預けました。日食もまた新月の時に起こり、しかも地球上のどこか、太陽がちょうど昇る場所で発生します。神秘劇の司祭たちは、その問いへの答えを「満月」の時に期待しました。これは、満月の時にしか起こり得ない月食を思い起こさせます。

古代の秘儀参入者にとって、食の発生は、自らの公務の中断を意味していました。「問い」の中に込められた意志の行為は日食の際に行ってはならず、答えをもたらすべき「思考の啓示」は月食の際に行われてはならなかったのです。これを知れば、まだ「抽象的な科学」が行われていなかった大昔に、なぜこれほどまでに食の到来が注視されていたのかが理解できます。――おそらくここに、大衆向けの書籍でよく語られる、中国の天文学者「羲（Hi）」と「和（Ho）」の悲劇的な物語の真の理由があるのでしょう。彼らは紀元前2154年の日食を天子（皇帝）に正しく奏上することを怠ったため――ある説では酒を飲みすぎ、別の説では計算を誤ったためとされますが――処刑されました。もし計算ミスが理由であれば、前世紀まで食の発生を分単位で正確に計算することは不可能であり、今日でさえ数秒の不確実性が残っていることを考えれば、その判決はあまりに不当です。［食の計算は、依然として数理天文学において最も複雑な部類に属します。］月の軌道の凄まじい流動性と可変性は、硬直した公式の中に完全に閉じ込めることは決してできないのです。

※訳註
〔「羲」と「和」の物語：日食の予測を怠ったために死刑に処されたという、世界最古の日食にまつわる悲劇的な伝説。中国の歴史書『尚書（書経）』の「胤征（いんせい）」や『史記』に記されており、天文学の歴史において非常に有名なエピソードとして知られている。
物語の舞台は、今から約4000年前の中国の伝説的な王朝「夏（か）」の時代、第4代帝・中康（ちゅうこう）の治世。
当時、天体観測や暦の作成を司る最高責任者の官職（または一族）が「羲氏（ぎし）」と「和氏（かし）」でした。古代中国において、天文を予測することは単なる科学ではなく、天意を受け継ぐ皇帝の権威（天命）を証明するための神聖な国家機密であり、絶対的な義務だった。
当時、日食は「天の龍が太陽を食らう不吉な兆候」と信じられていました。日食が予期される日には、皇帝や役人、民衆が総出で太鼓を打ち鳴らし、矢を放って龍を追い払うという国家的な儀式を行う必要があったのである。
ある秋の日（紀元前2137年または2134年10月22日とされる）、空が突然暗くなり、大規模な太陽の日食が発生した。
本来なら事前に警告を発しなければならない天文学者の羲と和でしたが、この時、二人は大酒を飲み、完全に泥酔して正気を失っていました。職務を完全に放棄し、自分たちの仕事場の近くにもいなかった。
突然の暗闇に襲われた宮廷と未曾有の恐怖に陥った民衆は大混乱に陥りました。盲目の楽師が慌てて太鼓を叩き、役人たちが馬を走らせて、なんとか儀式を行って太陽は元に戻りましたが、宮廷の権威は失墜した。
日食が終わった後、事態を重く見た中康帝は激怒しました。「羲と和は酒に溺れ、天象を乱し、先王の定めた法律を破った」として、彼らを討伐するために軍隊（胤侯）が派遣され、結果として、羲と和の二人は天体予測を怠った罪（国家反逆・職務怠慢）により、斬首（処刑）されてしまった。〕

日食の間、人間の意志の衝動の中に潜む悪は、太陽光によって焼き尽くされることなく地球を離れ、宇宙へと到達します。「そこでさらなる災いをもたらす」のです。しかし地上においても、皆既日食の暗闇に先立つ不気味に青白い光の中で、悪の王国に属するさまざまなことが進行します。ルドルフ・シュタイナーが語ったように、食の間、人間のテクノロジーの産物からは恐ろしいデーモンたちが立ち上がり、今日の技術の中に封じ込められている真の姿を露わにします。対して月食の間には、邪悪な人々に「悪魔的な思考」に触れる機会が与えられます。

以上のことから、精神科学（人智学）によって、かつて私たちが引用した次の言葉を現実のものとすることがいかに可能であるかが、これらすべてのことから分かります。

「しかし、人は、純粋に肉体的・宇宙的なものと、宇宙的・精神的なものとの、いわばちょうど中間に位置するような、そのような過渡的な現象を正しい方法で評価することも学ぶのである。」

（Letter11）歳差運動について
Über die Präzessionsbewegung
1928年7月発行

付）シュタイナー
『十二の気分（Zwölf Stimmungen）』（GA40）
（黄道十二星座に対応した全12連からなる詩）

●基本的な視点

歳差運動は、単なる天文学的現象ではなく、
人類の精神史・文化変遷・転生の法則を司る宇宙的リズムである。
春分点という「天に刻まれた文字」は、
キリスト衝動による霊的進化の道筋を示し、
現代において私たちに「星空との新たな結びつき」を求めている。

●要点

1. 歳差運動（春分点の逆行）の天文学的概要

黄道と赤道の交点である春分点が、黄道上を西へ逆行する現象。

・毎年約50″（秒）西進 → 72年で1°移動
→ 2160年で黄道帯の1宮（サイン）を通過
→ 25,920年（プラトン数／大年）で黄道を1周。

・これは地球の自転軸が黄道軸の周りを
コマのように円錐運動する結果（図23参照）。
地球の赤道面が黄道に対して「傾きながら回転」し、
分点（春分・秋分）が毎年少しずつ早く訪れる。

・古代オカルト伝承やシュタイナーは
「宇宙のリズム」として、25,920年を重要視する。

2. 文化的・歴史的意義

春分点の移動により、人類の文化時代が区分される。
（各時代約2160年）

・牡牛座時代：エジプト・バビロニア文化
・牡羊座時代：ギリシャ・ローマ文化
・魚座時代：現在（キリスト教時代）

シュタイナーの『魂の暦』は、この巨大なリズムを
「太陽が1年で黄道を巡る小さな歩み」と対比させ、
人間が転生を通じて異なる星座の力を体験する

「歴史的進歩」の基盤としている。
歳差運動がなければ、人類は「永遠の単調さ」に閉じ込められていた。

3. 霊的・人智学的意味

・歳差運動は地球自体の現実的な運動であり、
　人間が世界の生成と共に歩む「体験の変化」をもたらす。

・ゴルゴタの秘儀との深い関連：
　春分点が牡羊座（光り輝くサイン）から魚座（暗いサイン）へ
　移行した時代にキリストが出現。
　ヤハウェ／エロヒムの古い支配から、
　新しいキリスト・インパルスによる霊的解放が始まった象徴。

・キリスト以降、人間は「魚」の象徴の下にあり、
　春分点の逆行は新しい力が解放される過程を示している。

4. 現代の根本的な「二重性（不一致）」と課題

・サイン（記号としての12宮）：
　黄道を均等に30°ずつ12分割した古い記号（牡羊座を起点）。
　現代の暦・占星術・天文学は依然としてこれを使用。

・実際の星座（アステリズム）：
　不均等で、現在の春分点はすでに魚座の終わり近くにあり、
　約26°以上のずれが生じている。
　（例：土星は暦では射手座だが、実際は蠍座）

この不一致はプトレマイオス時代から続き、
占星術と天文学の分裂の原因となった。
シュタイナーは両方を区別して用い
（例：天秤座＝「均衡」の象徴）、
『魂の暦』では実際の星座に基づいている。

私たちは古い名称の「夢のような透視能力」に頼らず、
星空を新しい霊的体験として捉え直す必要がある。
将来的には「星座のための新しい名前」が
文化的に生まれる可能性が示唆される。

※図22〜24は春分点の移動、地球の軸の円錐運動、
ヒッパルコスの発見などを模式的に示している。

●本文（意訳）

これまで考察してきた太陽系内のあらゆる動きに加えて、人智学的観点から見て極めて重大な意味を持つもう一つの動きに目を向けなければなりません。それは黄道上における春分点の移動であり、月の節点の動きと同様に「逆行」する動きではありますが、一般に「歳差（運動）」と呼ばれています。

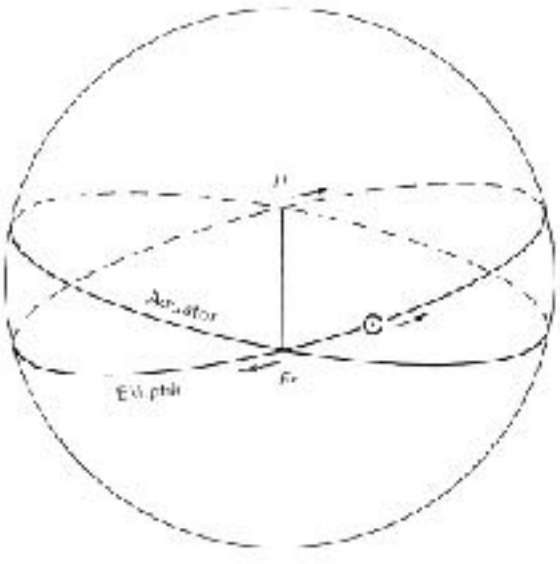
この動きは、純粋に天文学的な見地からも、いくつかの側面から説明することが可能です。これは宇宙の巨大なリズムの一つであり、古いオカルト（秘教）の伝承によれば、2万5920年という歳月をかけて一周するとされています。現代天文学の計算ではこれとはわずかに異なる数値が出されていますが、ここで述べているのは第2回のLetterで触れたような意味での「宇宙のリズム」であり、また現代のものとは少し異なる「年」の計算に基づいています。

太陽は毎年、黄道帯を通過する際、春の始まり（春分）と秋の始まり（秋分）の二度、天の赤道を横切ります（図22参照）。これが起こる場所は、黄道と赤道の交点である「春分点」と「秋分点」であり、同時に昼夜の長さが等しくなる「分点」でもあります。これらはいわば月軌道の「節点（ノード）」に相当するものであり、他の惑星においても対応する点はやはり節点と呼ばれています。太陽がこれらの点に到達するのは（1582年以来採用されている暦によれば）3月21日と9月23日です。この二つの点のうち前者（春分点）を起点として黄道帯の始まりが計算されます。例えば、ある恒星や惑星が「経度300度」に位置するという記述は、黄道上で測定して、赤道との交点である春分点から300度（円周の4分の3）離れた場所に立っていることを意味します。

さて、この起点（春分点）は決して静止しているわけではありません。ここにもまた、動きと変化が存在します。太陽が一年かけて黄道（あるいは黄道帯）を一巡したとき、春分点はもはや以前と同じ場所にはありません。太陽に向かって、ほんのわずかだけ手前に移動しているのです。その結果、一年という期間は実質的に短縮されます。天文学的な春の始まり（＝赤道通過）は、毎年約20分ずつ早く訪れます。空間的な尺度で言えば、春分点は黄道上で毎年約50″（50秒）ずつ西へと移動しているのです。

この点は、72年かけて1度（1°）移動し、2160年かけて黄道帯のひとつのサイン（宮）を丸ごと通り抜けます。一年でわずか20分という、この微細な短縮に、私たちの文化生活のすべてがかかっているのです……。

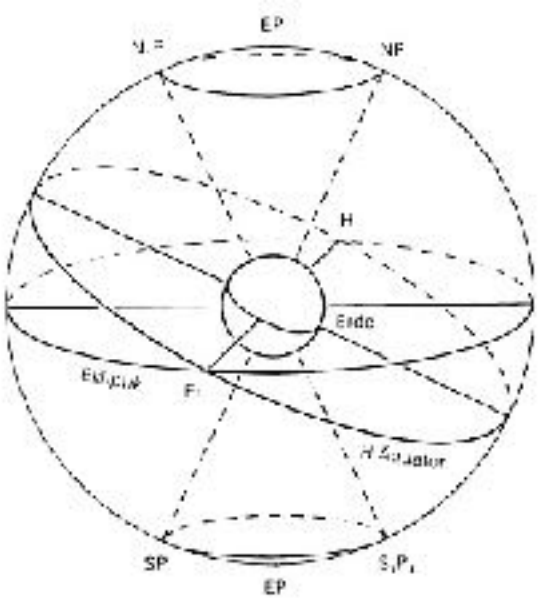
※図22



ここで移動しているのは、単なる数学的な点や、二つの交点を結ぶ数学的な直線ではありません。この回転を引き起こしているのは「赤道」そのもの――すなわち、天の赤道へと延長される面としての「地球の赤道」――であり、それが分点（昼夜平分点）を結ぶ線を黄道の中で回転させているのです。したがって、この時起きている事象は、地球側からも天体側からも追うことが可能です。

地球はいわばコマのように動いており、その軸（赤道軸）は2万5920年かけて黄道軸の周囲に円錐を描きます。この動きは、一般的な地球儀を使えば簡単にイメージできます（図23参照）。

※図23



りゅう座（第5回のLetter参照）に北極を持つ黄道軸が地球を貫いています。通常の地球儀の設置の仕方では、この軸が最高点と最低点を通る、つまり垂直に立っていると仮定し、地球に投影された黄道面を水平面と考えます。（もちろんこれは一種の約束事であり、「垂直」や「水平」は常に相対的な意味しか持ちません。）

この垂直な方向を中心に、地球儀に実際に備わっている「赤道軸」を、地球自体の自転は別として、円錐を描くように回転させてみてください。つまり日周運動（自転）は無視して、地球全体が東から西へとコマのような運動を行うと考えます。現実には、この一回転に2万5920年を要するのです！

同時に明らかなのは、地球の赤道もこの動きを示しているということです。地球の中心を通り黄道面に対応する「水平面」が不変であるのに対し、赤道はいわば上がったり下がったりします。この地上の関係性をそのまま目に見える天球へと拡張すれば、黄道に対する天の赤道の動きや、黄道の極を中心とした天の極（北極NP・南極SP）の動きが得られます。

星々の世界にとって、これは次のことを意味します。軸（NP―SP）は2万5920年かけて、天の黄道の極（りゅう座の地点）の周囲に円を描きます。その半分の期間が過ぎれば、軸は（図中の）Ni Pi — S,P, に到達し、北極も南極も今とは全く別の星を指し示すことになります。

現在の私たちの北極星が、常にその役割を担っていたわけではないことは、すでに指摘しました。天上で二つの極（小熊座の極と、りゅう座にある黄道の極）を探してみれば、数千年かけて天の極が描く円を想像できるでしょう。図23のNPが現在の北極星を指すとすれば、NI P1 は「こと座のベガ」の近くに位置することになります。というのも、ベガは約1万2000年後に北極星になるからです。そのとき、春分点は乙女座に位置することになります。

ルドルフ・シュタイナーの多くの講義や著作から、私たちは古代の文化周期がこの春分点の移動によって計られてきたことを知っています。黄道帯を12の等分に分けると、各「サイン（宮）」は2160年かけて通過されます。エジプト・バビロニア文化の「牡牛座時代」や、ギリシャ・ローマ文化の「牡羊座時代」もそれだけの期間続き、そして今日、私たちは「魚座時代」に生きています。

シュタイナーは『魂の暦』の初版において、この状況を簡潔かつ記念碑的な言葉で示唆しています。

「およそ一か月の間、太陽とある特定の星座との位置関係が問題となる。一年が経過すると、ほぼ同じ位置関係が繰り返される。ここで（ほぼ）という表現が正当なのは、時代の進行とともに位置のズレが生じるからである。例えば、数世紀前には3月の日の出の太陽は牡羊座の中にあったが、現在は同じ時期、太陽は魚座の中にあるのである。」

文字がその音に対応するように、人間は黄道帯の星座に対する太陽の位置を、自らが世界の生成と共に歩む体験へと結びつけることができます。通常の1年の歩みにおいては、各月がもたらす比較的速く変化する印象が問題となります。それらを内面において体験できるようにと与えられたのが、まさに『魂の暦』です。

それとは全く異なる、より巨大なスケールで異なるのが、各文化期における人間の体験です。それらは、人間が様々な文化の中で繰り返す「転生」を通じてのみ表現されます。太陽が1年の歩みの中で黄道帯（牡羊座、牡牛座、双子座……）を巡るのに対し、人間は転生のたびに、春の始まりにおける太陽を異なる星座、あるいは少なくとも同じ星座の中の異なる地点で迎えることになります。逆方向に数えれば、牡牛座、牡羊座、魚座……となります。

たとえそれが、ほとんどすべての人々の深い下意識（潜在意識）に留まっているとしても、賢者たちは常に天の印をはっきりと認識してきました。古代の文化期については、それらがいわば「秘儀的な行為」によって導入されたことが証明できます。しかし、この計算によれば15世紀に始まった私たちの現代においては、それは起こり得ませんでした。なぜなら、直近の1500年間は「秘儀なき時代」だったからです。

私たちは、天に刻まれた春分点という「文字」から、かつての古の人々が熟知し、神話の中で証言していた「実在」へと、さらに一歩踏み込むことができます。春分点の移動がなければ、人類における本来の意味での歴史的進歩はあり得ませんでした。春の始まり（春分）の時期に、太陽が「魚座」の力と混ざり合う時代と、「牡羊座」あるいは「牡牛座」の力と混ざり合う時代とでは、その性質が異なっていなければならないのです（結局のところ、これらすべてを引き起こしているのは、地球自体の極めて現実的な運動なのです）。

人間にとって、この歳差運動は、いわば「列車の窓から絶えず変化していく景色」のようなものです。歳差運動がなければ、私たちは歴史的に見て常にとどまった場所におり、繰り返される転生も私たちに新しいものを提供することはできないでしょう。日々の歩みの「永遠の単調さ」や、依然として短いサイクルである「一年の歩み」に、この奇妙な歳差運動が加わります。それは、一年の運動が日々の運動にブレーキをかけるように、太陽の星々に対する動きをさらに遅らせる役割を果たしています。3月21日に魚座のある星と共に昇っ

ていた太陽は、長い歳月（数世紀）が流れると、今度は水瓶座のある星と共に昇るようになります。かつての道連れであった魚座の星と共に太陽が地平線に現れるのは、それから数日後になってしまうのです。

歳差運動の霊的な意味、そしてその数値的な側面は、古代において間違いなく知られていました。というのも、「25,920」という数字は「プラトン数」と呼ばれているからです。古代エジプト・バビロニアの宇宙論をギリシャにもたらしたプラトンの秘教的な教えが思い起こされます。純粋に外的な天文学として歳差が「発見」されたのは紀元前150年のことですが、この発見と秘儀の伝統との間に直接の関連はなさそうです。

アレクサンドリアの天文学者ヒッパルコスは、自らが観測した「星の経度（黄道上で春分点から測った距離）」を、それ以前の天文学者たちの記録と比較するだけで、数世紀の間にすべての経度が一律に増加していることを見出しました（図24参照）。彼はそこから、黄道の起点である春分点そのものが逆方向に動いており、そのために起点から星までの距離が次第に大きくなっているのだと結論づけました。

※図24



しかし、この動きがあまりに緩慢であるため、歳差の真の大きさ（というより、その微細さ）を突き止めるには、さらに数世紀を要しました。プラトン数（ただしプラトン自身の著作に直接この数字は出てこず、彼の『国家』第8巻にある極めて難解な箇所から推測されるものです）からは、72年で「1度（1°）」の変化が生じることが自ずと導き出されます（25,920 ÷ 360 = 72）。ヒッパルコスはこの動きを「100年で1度」と見積もりました。プトレマイオス（西暦120年）もこの数値を用いています。より正確な数値に到達したのは、中世初期のアラブの天文学者たちでした。コペルニクスはその著作の中で、時代とともに変化すると彼が考えた歳差について一連の計算を行っており、自らの時代については「85年半で1度」と定めました。その後、歳差の大きさは徐々に正確に知られるようになり、外的な観測の道を経て、ほぼ正確に古代の数値へと回帰することになったのです。

この、外的・天文学的な歳差の発見は、数奇な運命を辿りました。この発見は各方面から激しく攻撃され、否定されました。特に、単なる外的な天文学（Astronomie）ではなく、後期ギリシャにおいて（im späteren Hellas）で隆盛を極めた「占星術（Astrologie）」に従事していた人々が強く反対したのです。黄道帯の起点、すなわちすべての計算の出発点が常に同じ場所にないということ、そして「白羊宮（サインとしての牡羊座）」や「金牛宮」といったサインが、実際の星座とは別物になり得るという考えを、彼らはどうしても受け入れたくなかったのです。彼らはバビロニア人による数千年の観測記録に訴え、そこには何の差異も生じていないと主張しました。最終的に、疑いようのない春分点の逆行を否定しきれなくなったとき、彼らは「これは特定の範囲内での単なる往復運動（Hin-und Hergehen）にすぎないのではないか」という希望にすがったのです。

まさにこの歳差運動という点をめぐって、科学的な天文学と伝統的な占星術は次第に袂を分かつことになりました。その顕著な例がプトレマイオス自身です。天文学者としての彼は歳差を全面的に認めており、自ら

の星表において、ヒッパルコスから受け継いだ恒星の経度を（紀元前150年から紀元後125年までの期間分）すべて歳差の分だけ加算したことを誇りとしていました（ただし、100年で1度という計算でしたが）。しかしその傍らで、彼は占星術師でもあり、古来の占星術的感覚に満ちた『テトラビブロス（Tetrabiblos）』を著しました。そこには歳差の痕跡は全く見当たりません。つまりプトレマイオスは、牡羊座の第1度を黄道帯の起点として出発していますが、彼の時代には、春分点はすでに魚座の中へと数度入り込んでいたのです。この事実は、彼の天文学書『アルマゲスト（Almagest）』の星表からも明らかです。このように彼の内では「サイン（記号としての12宮）」と「星座（実際の星の並び）」が、何の橋渡しもなされないまま並存しています。この弊害は、さらに1800年の逆行を経た今日、いっそう深刻なものとなっています。

これが何を意味するか考えてみてください。人々はずっと昔から、黄道帯を30度ずつ12の等分に分け、それらを牡羊座、牡牛座、双子座……と呼び、牡羊座を第1の宮として数えてきました。一方で、実際の星座そのものは、星表が作られ始めてようやく多かれ少なかれ明確な輪郭が与えられたものでした。黄道帯におけるそれらの広がりは不均等で、常に30度というわけではなく、21度から43度まで幅がありました。

黄道帯の均等な12分割は、ある意味で「一年の歩み」に対応しています。春の始まりから計算すれば、太陽が赤道を北向きに越えてからの最初の1ヶ月が牡羊座の月（3月21日〜4月21日）、第2の月が牡牛座の月（4月21日〜5月21日）……となり、夏至は蟹座、秋分は天秤座、冬至は山羊座となります。ギリシャ文化の全盛期には、これらは多かれ少なかれ一致していました。

しかし、ある特定の瞬間から、この法則性は完全な妥当性を失いました。それは春分点が牡羊座から魚座へと移り変わった時であり、その瞬間を私たちは「ゴルゴタの秘儀」の時代に置くことができます。その時、春分点は逆行運動によって魚座へと入ったのです。

それにもかかわらず、人々は頑なに黄道帯の起点を「牡羊座の点」と呼び続けました（これは現代天文学でさえ、黄道座標や赤道座標の起点を指す際に用いている慣習です）。しかし現在、春分点はすでに魚座の終盤近くに位置しています。

これによって生じた不一致（Diskrepanz）は、より深い事実を指し示しています。キリストが時代の転換点、すなわち春分点が「光り輝くサイン」を離れて黄道帯の「暗いサイン」へと入る時期に出現しなければならなかったのは、偶然ではありませんでした。

今なお牡羊座を黄道帯の起点と呼び続ける者は、実はキリスト衝動を否定し、同時に星空の霊的な実在を、例えば現在魚座から発せられている実在の霊性を否定していることになります。それは、かつての牡羊座、さらにその前の牡牛座から発せられていたものとは全く異なる性質のものなのです。春の最初の月を（実際の星座に関わらず）「牡羊座の月」と呼び続けることは、ただ太陽の「一年の歩み」だけに目を向け、その12分割に古い名前を便宜的に当てはめているに過ぎないのです。

もちろん、こうした考え方（歳差を重視する見方）においても、古い名称が一種の永遠の正当性を持っていることは否定できません。例えば、太陽が赤道を下向きに通過する秋分の月を「天秤（天秤宮）」と呼んだり、太陽の軌道の転換点である夏至を「蟹（巨蟹宮）」と呼んだりすることなどがそれにあたります。

ルドルフ・シュタイナーも、これらの古い名称をこうした意味で用いています。例えば、オイリュトミーの公演で多くの人に知られている詩『十二の気分（Zwölf Stimmungen）』〔訳註：原文と訳を記事の最後に掲載〕や、第一ゲーテアヌムの定礎式で使われた「水星が宵の明星として天秤座（Waage）にあったとき」という表現がそうです。その日（1913年9月20日）、水星は儀式の直前に赤道を通過し、黄道帯の上部と下部の間で「天秤（均衡）」の状態にありました。しかし、現在この地点は実際には「乙女座」の中にありま

す。もしそこで「水星が乙女座にあったとき」と言ってしまえば、そこで重要だった「均衡（天秤）の中に立つ」という本質が表現されなかったでしょう。

私たちは、宇宙的な必然性によって私たちの文化に入り込んできた、この「二重性（引き裂かれた状態）」を全身で感じ取ることができます。というのも、人間の頭部が人間の始まりであるのと同じように、ある非常に特定な意味において、やはり「牡羊座」は黄道帯の始まりだからです。かつて春分点が実際に牡羊座にあったギリシャ文化において、宇宙の生命と地上の生命が天の上でも一致していたことは、あの文化の見事な調和の象徴でした。

しかし、春分点が魚座へと移行したことで、この調和は失われました。それは破壊されねばならなかったのです。まさに、宇宙的な力を霊的・現実的に地球と結びつけた「キリスト衝動」によってです。もはやヤハウェやエロヒムが霊的に人類を支配し続けるのではなく、春分点の逆行が進むにつれて、新しい力が解放されるのです。キリストは、地上での生涯の少し後には「魚」の象徴の下に現れます。それ以前には、羊を担ぐ「善き羊飼い」として、あるいは彼自身が「神の小羊」として崇められていたのとは対照的です。

ゴルゴタの秘儀から二千年近く経った今日、私たちは歳差運動を真摯に受け止め、実際の星座と太陽・月・惑星との関係を考察すべき時に来ています。古びた名称によって、星座から発せられる現実の作用が覆い隠され続けてはならないのです。人智学的な『魂の暦』の初版は、序文や添えられた図からも明らかなように、完全に実際の「星座」に基づいています。数学・天文学セクションから発行されている小暦も、同じ原則で編集されています。

この違いは、空で実際に目に見える現象において、いっそう重要になります。太陽の場合はその輝きで星を消してしまうため分かりにくいですが、農耕暦やいわゆる占星術的な天体暦（Ephemeriden）を見ると、月や惑星の位置は今でも例外なく古い「サイン（記号）」で記されています。（例えば土星については、1926年12月以来「射手座」にあると記されていますが、第8回のLetterで述べた通り、また現在の夜空を仰げば分かる通り、実際には依然として「蠍座」の中にあります。）

「天文学的」なデータを持つ暦の月についても同様で、ほぼ一つのサイン分（約30度）間違って記載されています。春分点の逆行により、春分点、ひいては一年周期の全体が、実際の牡羊座の始まりからすでに26度以上も遠ざかっているからです。暦に書かれているデータと、実際に自分の目で観察できる現象が一致しないため、人間は星空の観察から遠ざけられてしまっています。

私たちは二通りの表現を使い分けるべきでしょう。すなわち、一年周期の均等な12分割としての「サイン（記号）」と、天に見える星の配置としての「実際の星座」です。伝承された「牡羊、牡牛」といった名前は、本来その両方の性質を内包しています。そのため「サイン」と「星座」を正しく切り離すことは極めて困難です。

澄み渡った星月夜に、空に描かれた牡羊座（首を後ろに反らした姿）をはっきりと見分け、そこから星座の名律となった古いイマジネーションを輝き出させる体験は必要です。獅子座や射手座についても同様です。その一方で、たとえその地点が現在は乙女座にあろうとも、昼夜平分点（分点）は常に「天秤（Waage）」であり続けます。

しかし、私たちは自覚しなければなりません。これらの名称そのものが、かつての「夢のような霊視能力」に由来するものであり、根本的には現代においてはすべて時代遅れであるということを。現代人は、それがサインであれ星座であれ、星空をこれまでとは異なる方法で体験しなければならないのです。

まさにそのことを壮大な形で示しているのが、新しい霊的洞察に基づく黄道帯の図解を伴う『魂の暦』です。しかし、ある意味でこれらの図像には、まだ名前が欠けています。星空のための「新しい名前」が！

もし将来そのような名前が誕生すれば、それまでの間、古い名称は「サイン」のために保持し、それを実際の目に見える星座からは完全に切り離して、単なる「黄道と赤道の分割」として扱うことができるでしょう。そうなれば、例えば「土星が射手座にある」という表現は、「土星は赤道との交点（春分点）から2つ分（60〜90度）離れた、黄道帯の下部、すなわち最低点の少し手前に位置している」という意味になります。そして同時に、彼が実際に位置している「星座」としては、『魂の暦』において男と女の二つの顔を持つヤヌスの頭のように描かれ、天においてかつて「蠍」と呼ばれた、実際に外見も蠍のように見えるあの存在の名前が語られるべきなのです。

ここでこれらの事柄を語ったのは、おそらく遠い未来の展望を指し示すためです。というのも、新しい名前を与えることは、それが文化的な人類全体に受け入れられてはじめて意味を持つからです。さもなければ、単なる「宇宙論的なセクト（分派主義）」に陥ってしまうでしょう。しかし、人智学が科学、とりわけ芸術や星空の内面的な体験を通じてもたらすものこそが、星座であれ、サイン（記号）であれ、あるいはその両方であれ、いつか妥当な命名へと導くための条件を熟成させることは疑いようもありません。

これら一連の回報で意図していた学習課程は、容易に察せられる通り、まだ完全に終えたわけではありません。本来の「恒星の世界」など、天文学的な領域の重要な部分について、さらに詳しく語る必要があります。したがって、これに続く「第2年次」を設ける予定です。そこでは、精神科学的な意味における宇宙論的・占星術的な諸問題について、より広範に扱うという新しいスタートを切ることになるでしょう。

※訳註：
シュタイナー『十二の気分（Zwölf Stimmungen）』
（黄道十二星座に対応した全12連からなる詩）
※GA 40（『Wahrspruchworte』）より

1. Widder（牡羊座）

Erstehe, o Lichtesschein,
Erfasse das Werdewesen,
Ergreife das Kräfteweben,
Erstrahle dich Sein-erweckend.
Am Widerstand gewinne,
Im Zeitenstrom zerrinne.
O Lichtesschein, verbleibe!

立ち上がれ、おお、光の輝きよ、
生成しゆく本質を捉えよ、
諸力の織りなす布を掴め、
存在を目覚めさせつつ、自ら輝け。
抵抗に立ち向かって勝ち取れ、
時の流れの中で消え去れ。
おお、光の輝きよ、留まれ！

2. Stier（牡牛座）

Erhelle dich, Wesensglanz,
Erfühle die Werdekraft,
Verwebe den Lebensfaden
In wesendes Weltensein,
In sinniges Offenbaren,
In leuchtendes Seins-Gewahren.
O Wesensglanz, erscheine!

自らを明るくせよ、本質の輝きよ、
生成の力を感じ取れ、
生命の糸を織り合わせよ、
本質的なる世界存在の中へ、
意味深い顕現の中へ、輝
かしい存在の覚知の中へ。お
お、本質の輝きよ、現れ出よ！

3. Zwillinge（双子座）

Erschließe dich, Sonnesein,
Bewege den Ruhetrieb,
Umschließe die Strebelust
Zu mächtigem Lebewalten,
Zu seligem Weltbegreifen,
Zu fruchtendem Werdereifen.
O Sonnesein, verharre!

自らを開け、太陽なる存在よ、
静止への衝動を動かせ、
向上への渇望を包み込め、
強力なる生命の支配へと、
至福なる世界の理解へと、
実り豊かなる生成の成熟へと。
おお、太陽なる存在よ、踏みとどまれ！

4. Krebs（蟹座）

Du ruhender Leuchteglanz,
Erzeuge Lebenswärme,
Erwärme Seelenleben
Zu kräftigem sich Bewähren,
Zu geistigem sich Durchdringen,
Zu fließendem Sich-Ergießen.
Du ruhender Leuchteglanz, verinnerliche!

汝、静まりたる光の輝きよ、
生命の熱を生み出せ、
魂の生命を温めよ、
力強き自己の証明へと、
精神的なる自己の浸透へと、
流動する自己の湧出へと。
汝、静まりたる光の輝きよ、内面化せよ！

5. Löwe（獅子座）

Die Welten erschaue, Seele!
Die Seele ergreife Welten,
Der Geist erfasse Wesen,
Aus Lebensgewalten wirke,
Im Willenserleben baue,
Dem Weltenerblühn vertraue.
O Seele, erkenne die Wesen!

諸世界を見つめよ、魂よ！
魂よ、諸世界を掴め、
精神よ、本質を捉えよ、
生命の諸権力から働きかけ、
意志の体験の中に築け、
世界の開花を信頼せよ。
おお、魂よ、諸本質を認識せよ！

6. Jungfrau（乙女座）

Die Welten erhalten Welten,
Im Wesen erlebt sich Wesen,
Im Sein umschließt sich Sein.
Und Wesen erwirket Wesen
Zu werdendem Tatergießen,
Im ruhenden Weltgenießen.
O Welten, traget Welten!

諸世界は諸世界を維持し、
本質の中で、本質は自己を体験し、
存在の中で、存在は自己を包み込む。
そして本質は本質を働きかける、
生成しゆく行為の湧出へと、
静まりたる世界の享受の中で。
おお、諸世界よ、諸世界を支えよ！

7. Waage（天秤座）

Das Sein, es verzehrt das Wesen,
Im Wesen doch hält sich Sein.
Im Wirken entschwindet Werden,
Im Werden verharret Wirken.
In strafendem Weltenwalten,
In ahndendem Sich-Gestalten
Das Wesen erhält die Wesen.

存在は、本質を喰らい尽くし、
けれど本質の中で、存在は自らを保つ。
働きの中で、生成は消え去り、
生成の中で、働きは踏みとどまる。
罰する世界支配の中で、
報いる自己形成の中で、
本質は、諸本質を維持する。

8. Skorpion（蠍座）

Das Werden erreicht die Seinsgewalt,
Im Seienden erstirbt die Werdemacht.
Erreichtes beschließt die Strebelust
In waltender Lebenswillenskraft.
Im Sterben erreift das Weltenwalten,
Gestalten verschwinden in Gestalten.
Das Seiende fühle das Seiende!

生成は、存在の権力へと達し、
存在するものの内で、生成の力は死に絶える。
達成されたものは、向上への渇望を閉じ込める、
支配する生命意志の力の中に。
死の中で、世界支配は成熟し、
形態は形態の中へと消え去る。
存在するものは、存在するものを感じ取れ！

9. Schütze（射手座）

Das Künftige ruhe auf Vergangenem.
Vergangenes erfühle Künftiges
Zu kräftigem Gegenwartsein.
Im inneren Lebenswiderstand
Erstarke die Weltenwesenwacht,
Erblühe die Lebenswirkensmacht.
Vergangenes ertrage Künftiges!

未来のものは、過去のものの世界に憩え。
過去のものは、未来のものを感じ取れ、

力強き現在の存在へと。
内なる生命の抵抗の中で、
世界の、本質の守護を強めよ、
生命の、働きの力を開花させよ。
過去のものは、未来のものを持ちこたえよ！

10. Steinbock（山羊座）

Begrenztes sich opfere Grenzenlosem.
Was Grenzen vermißt, es gründe
Im Tiefen sich eigenem Sein.
Es ströme im Strome des Werdens
Das Bleibende bildend dahin,
Das Ruhende wirkend im Raum,
Begrenztes gewinne das Grenzenlose!

限定されたものは、無限なるものへ自らを捧げよ。
境界を欠くものは、打ち立てよ、
深みの中で、自己の固有の存在を。
それは生成の奔流の中へと流れゆけ、
持続するものを形作りながら、
静止するものを空間の中で働かせながら。
限定されたものは、無限なるものを勝ち取れ！

11. Wassermann（水瓶座）

Es weiche das Sein dem Werden.
Das Werden erkenne das Seiende
Im Flusse des Zeitenlaufs.
Es fülle die Leere des Raumes
Das webende Weltenwirken,
Das strahlende Geisterbeleben,
Es weiche das Werden dem Sein!

存在は、生成へと席を譲れ。
生成は、存在するものを認識せよ、
時の歩みの流れの中で。
空間の虚無を満たせ、
織りなす世界の働きが、
輝かしい精神の活性化が。
生成は、存在へと席を譲れ！

12. Fische（魚座）

Im Verluste gewinne das Gewonnene.
Im Gewinne verliere das Verlorene.

Suche im Vergangenen das Künftige,
Halte im Künftigen das Vergangene
Und erhalte sich im Erhalten.
Durch Werden zum Sein erhoben,
Durch Sein zu dem Werden verwoben,
Der Verlust sei Gewinn für sich!

喪失の中で、獲得されたものを勝ち取れ。
獲得の中で、喪失されたものを失え。
過去のものの中に、未来のものを探せ,
未来のものの中に、過去のものを保て、
そして、維持することの中で自己を維持せよ。
生成を通じて存在へと高められ、
存在を通じて生成へと織り合わされ、
喪失よ、自らにとっての獲得であれ！

（Letter12）歳差、章動について
Über die Präzession Die Nutation
1928年8月発行

●基本的な視点

歳差と章動は、
宇宙のリズムが人間のリズム（呼吸・脈拍・一生）と
深く結びついていることを示す壮大な象徴であり、
単なる天文学的現象ではなく、人間が「三つの世界」を認識し、
キリスト衝動を通じて霊的に進化するための鍵となる。

●要点

1. 歳差運動（春分点の逆行）の三つの見方

・天球上の見かけの運動：
春分点が黄道を西へ逆行
（25,920年で1周、72年で1°、2160年で1宮）。

・地球の実在の運動：
地球の赤道軸が黄道軸の周りをコマのように回転（独楽運動）。

・天の北極の運動：
北極星が時代とともに変わる
（現在はポラリス、約12,000年後にはベガ）。

現在の位置（1928年頃）：

・春分点：ペガススの四辺形の近く（星の少ない領域）。
・秋分点：乙女座（スピカ寄り）。
・夏至点：双子座の終わり近く。
・冬至点：射手座の境界付近。

2. 文化期と移行期間

各文化期（約2160年）は、
春分点が星座の「中央」を通過する時期に本格化する。
（例：牡牛座文化期（紀元前2907〜747年）、
牡羊座文化期（紀元前747〜1413年）。）

移行期には「慣性の法則」により古い文化が長く残る。
（例：中世のローマ的要素）

3. 歳差と暦の歴史

ユリウス暦は歳差を考慮せず1年を長く見積もったため、
春分がどんどん早まった。
（325年：3月21日 → 1582年：3月11日）

グレゴリウス暦改革（1582年）で春分を3月21日に固定。
以後、世紀末のうるう日調整で対応。

4. 章動とは

・18.6年周期（月の節点の逆行周期）と連動した
　地球自転軸の微細な「揺れ・会釈（うなずき）」。

・歳差運動（巨大な円錐）の上に、
　小さな波（約1400個の小さな円）を重ねた運動。

・18世紀にブラッドリーが発見。
　ニュートン理論では
　月の引力による赤道膨隆部への作用で説明される。

5. シュタイナーの視点

章動は単なる物理的「揺れ」ではなく、
マクロコスモスの呼吸の現れ。

・月の節点運動（章動）
　＝アストラル世界の呼吸（ヤハウェの領域）。
・歳差運動＝
　意志の世界、文化期・転生の歴史を司る太陽的な世界。
　（キリストの領域）

人間のリズムとの対応（重要な数値比率 1：4）：

・呼吸18回／分 ： 脈拍72回／分
・章動18.6年 ： 歳差72年（1°）
・一生（72年＝25,920日）で25,920回の呼吸
　→ プラトン数（25,920年）と一致。

6. 三つの世界・三つの法則性

私たちを取り巻く世界は単一ではなく、
三層が互いに浸透している：

1. 感覚の世界（ルシファー的）
　　——目に見える星空。

2. 月の世界・呼吸の世界（ヤハウェ的）
　　――章動として現れるアストラル的呼吸。
3. 太陽の世界・意志の世界（キリスト的）
　　――歳差として現れる文化・転生の進歩。

ニュートン的な因果律だけでは説明できない
別の法則性が、それぞれに働いている。
キリストはこの三重の世界の中に生き、作用している。

※図25～31は
春分点の位置、星座の模式図、章動の円錐運動などを示す。

このLetterで第1年次の天文学的考察が締めくくられる。

●本文（意訳）

「歳差」と呼ばれる春分点の移動は、以下の3つの観点から説明できることを見てきました。

1　春分点は2万5920年かけて黄道帯を一周し、太陽が春の始まりに位置する星座は時代とともに移り変わる。現代天文学の立場では、これは「見かけの運動」とされる。

2　地球の赤道面が同じ周期で動き、その軸が黄道軸の周囲を一回転する。これは地球の「独楽（こま）運動」であり、「実在の」運動とみなされる。

3　地球自転軸の北極が、天球上で同じ周期をかけて黄道の北極の周りに円を描く。その結果、時代によって異なる星が北極星となる。これもまた「見かけの運動」である。

天球上の該当する点を実際に探してみるのは良いことです。春分点を最も簡単に見つけるには、この時期（晩夏）の夜、東の空に昇る「ペガススの大四辺形」を起点にします。現在の春分点は、四辺形の左側に上下に並ぶ二つの星を結ぶ線の、さらに右側に位置しています（図25参照）。

そこは星の少ない領域であり、目印になるような明るい星は近くにありません。歳差運動がいかに荘厳で緩やかであるかを理解するために、ペガススの四辺形の一辺の長さが約15度であることを思い出してください（もちろん数学的に厳密な「球面正方形」ではありませんが）。春分点がこの一辺に相当する距離を移動するだけでも、1000年以上の歳月を要するのです。

秋分点は乙女座の中にあり、獅子座に近い上部、よく乙女の翼として描かれる一方の翼のあたりに位置しています。大まかに言えば、レグルス（獅子座）とスピカ（乙女座）の間にありますが、よりスピカに近い場所です。「ゴルゴタの秘儀」の時代には、秋分点はスピカのすぐそばにありました。すでに述べた通り、ヒッパルコスが春分点の歳差を外面的に発見した際、手がかりとしたのもこの星でした。現在は秋が近づいているため、夕暮れ時には秋分点（秋分の昼夜平分点）を捉えるのは難しくなっています。まもなく太陽がその位置に重なるからです。

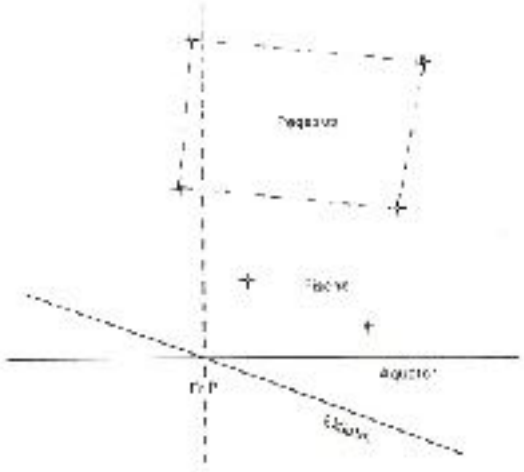
夏至点（太陽軌道の最高点であり、聖ヨハネ祭の頃に太陽が下降に転じる地点）は、双子座のまさに終端、牡牛座の下側の角のすぐ近くにあります。夏至からすでに二ヶ月が経過しているため、この地点は夜明け前の早い時間帯に昇ってきます。

冬至点（冬至の地点）は、射手座の中にあります。射手座は、短い夏の夜に南の地平線上で特徴的なケンタウルスの姿を現している星座です。冬至点は射手座の境界のすぐそば、へびつかい座が黄道帯に割り込み、射手座と蠍座を隔てているあたりに位置しています。

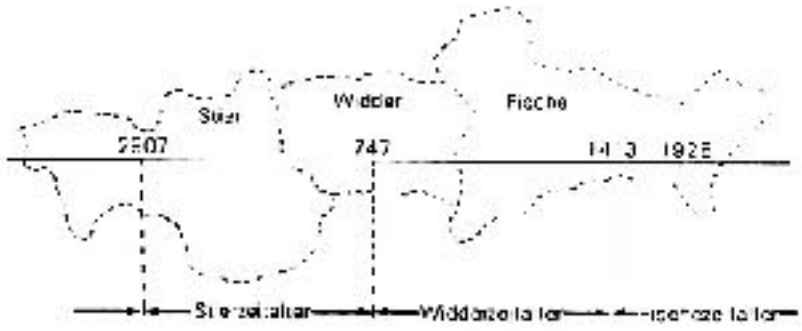
春分点が歴史に持つ意味に関連して、誤解を招きやすい一点について指摘しておかなければなりません。天文学的に言えば、各文化期はその象徴となる星座の「始まり」からではなく、その星座の「中央」から始まるとされています（星座の輪郭を示した模式的な図26を参照）。古くは十二宮（サイン）の計算も星座の中央から、後には8度地点から数えられていました。

そのため、太陽が双子座側から牡牛座の星座に入ったのは紀元前4300年頃で、紀元前1800年頃にはすでにそこを去っています。しかし、いわゆる「牡牛座文化期」は紀元前2907年から紀元前747年までと計算されます。同様に、春分点が牡羊座の星座の中にあったのは紀元前1800年頃からゴルゴタの秘儀の時代までですが、「牡羊座文化期（第四後アトランティス文化期）」は紀元前747年から紀元後1413年まで続きました。つまり、春の始まりに太陽がすでに新しい星座に位置していても、その星座の力をまだ十分に引き出せない「移行期間」が毎回存在するのです。

※図25



※図26

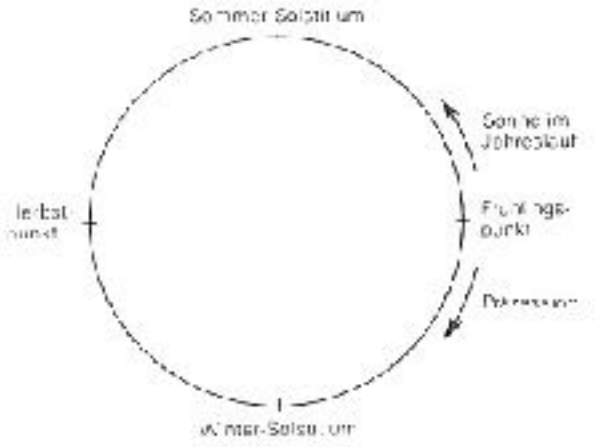


この観点から、衰退していくローマ文化を見てみましょう。ローマ文化はゴルゴタの事件によって本来は終焉を迎えていました。しかし地上においては「慣性の法則」（これは宇宙本来の性質ではありません）により、内実がすでに打ち破られた後も、物事は長い間古い轍の上を進み続けます。15世紀の幕開けに至る中世全体は、ギリシャ・ラテン文化期に数えられねばなりません。キリスト教が普及していたにもかかわらず、この時期にはまだローマ的な精神生活が支配していたからです。

奇妙なことに、歳差に関する知識は暦の歴史と密接に結びついています。当初、一年の長さは歳差を考慮せずに定められていました。そのため、一年が（約20分間）長すぎることになりました。春分点が太陽に向かって進んでくる（逆行する）以上、実際の一年の期間は短縮されるからです。

歳差を考慮せずに計算し続けると、春の始まり――これは風雨に左右される気象的なものではなく、太陽が赤道を通過する天文学的な瞬間ですが――は、暦の上でどんどん早い日付へとずれていきます（図27参照）。

※図27



中世においてユリウス暦（エジプトの神官ソシゲネス（Sosigenes）の助けを借りてジュリアス・シーザーが制定し、ニケーア公会議で正式導入された暦）を用いていた間、まさにこの現象が起きていました。この暦は一年を365.25日としており、実際の値より大きすぎたのです。西暦325年の公会議の時点ですでに、春分は3月24日から3月21日へと移動していました。そして1582年にようやく教皇グレゴリウス13世が、今日私たちが従っているより正確な時間計算を提示したときには、春分は3月11日にまで早まっていました。

そこで、春分の昼夜平分点が常に3月21日にくるように暦が調整されました。周知の通り、これは世紀の変わり目ごとにうるう日を除外することで達成されています。かつては神聖な法則性の表現であった時間計算が、次第に単なる「計算問題」の結果へと変貌していった様子がここに見て取れます。計算が合うように、つまり「春の始まりを特定の日付に固定したい」という目的のために、うるう日が導入されるようになったのです。かつて（少なくともローマ時代以前）は、うるう日、週、あるいは月といったものは、神々が人間に自らを啓示する、精神的な根拠に基づいた特別な期間でした。これについては第2回のLetterですでに述べた通りです。

さて、尽きることのない歳差のテーマから、「章動（Nutation）」へと移りましょう。この聞き慣れない名前にもかかわらず、私たちはここで古い知人に再会することになります。というのも、章動とは本質的に、地球の自転軸の動きに反映された「月の節点の回転（die Spiegelung der Mondknotendrehung）」にほか

なりません。それは、歳差が「地球自転軸の黄道軸周りの回転」あるいは「北極星のりゅう座の極周りの回転」として反映されているのと同じ理屈です（「反映」という言葉は比喩的ですが）。しかし、章動の動きはいわば地球自転軸の歳差運動の上に「接ぎ木」されたものであるため、歳差を前提としてのみ描写することができるのです。

18年7か月（18.6年）周期で起こる「月の節点（Mondknoten）」の逆行運動を思い出してください（第9回Letter）。歳差運動の場合と同様に、ここでも天球上の一点（春分点、あるいは月の節点）の回転という描写から、一つの軸が別の軸の周りを回転するという描写へと移行することができます。この場合、特定の周期で黄道軸の周囲を回転するのは「月軌道の軸」です。

月軌道面と黄道面、およびそれらに垂直な両方の軸は、互いに5度の角度をなしています（図28）。周知の通り、天球における黄道軸の末端は、以前（第5回Letter）示したように、りゅう座の北側の巻きの中心に位置しています。（この「りゅう座」は、月軌道に横たわり、昇交点に頭、降交点に尾を持つとされる神話上のドラゴンとは混同しないでください！）

月軌道の軸は、18年7か月（18.6年）かけて黄道の極の周囲に小さな円を描きます。一方で、地球の自転軸（天の北極）もまた、23.5度の距離を保ちながら、同じ「りゅう座の点」を中心に円を描いていますが、こちらは約1400倍もの長い時間、すなわち2万5920年を要します。

※図28

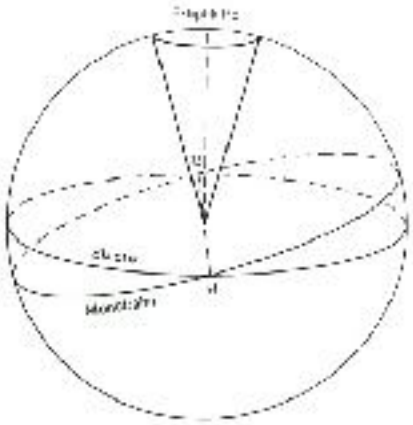
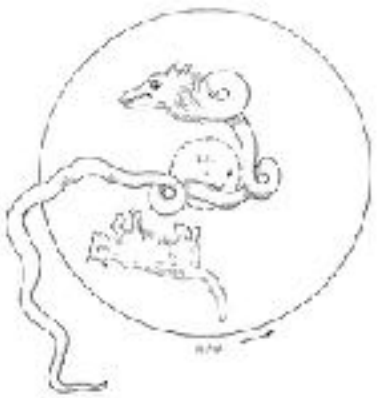


図28は、これまでに述べたことを上方から見下ろした図です。内側の小さな点線の円は、18.6年の間に月軌道の軸が指し示す軌跡です。外側の円は、2万5920年かけて次々と北極星となっていく地点を示しています。この外側の円は、図23（Letter11）における「NP — N1P1」に対応し、内側の円は図28のものに対応します。これら二つの円は、いわば地球の中心に頂点を持つ、二重に入れ子になった円錐の底面にあたります。

※図29

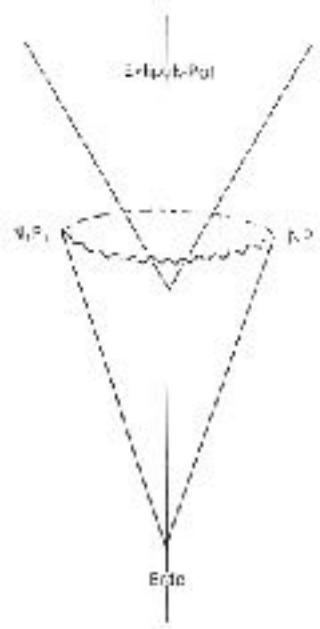


最初の円（内側）が、二番目の円（外側）よりもいかに速く、1400倍近い速度で一周するかを生き生きと思い描いてみてください。月軌道の軸は、地球の自転軸よりもそれほどまでに速く回転しているのです。

奇妙なことに、この一方の回転はもう一方の回転の中に姿を現します。地球の自転軸が、先ほど描写したような緩やかな独楽のような運動をしている間、それは同時にかすかな揺れ、穏やかな震えを経験しています。自転軸は「会釈」をし、単純な円ではなく、わずかに波打つような線を描くのです。

したがって、図29の外側の円も、実際には1400個の小さな「歯」を持つ波線として描かれるべきものです（図30）。これら小さな波や歯の一つひとつは、本来は小さな円なのですが、地球自転軸自体が前進運動を続けているために、ここでは完全な円にはなれず、かすかなうねりとなっているのです。これこそが「章動」、すなわち地球自転軸の「会釈（うなずき）」と呼ばれるものです。

※図30



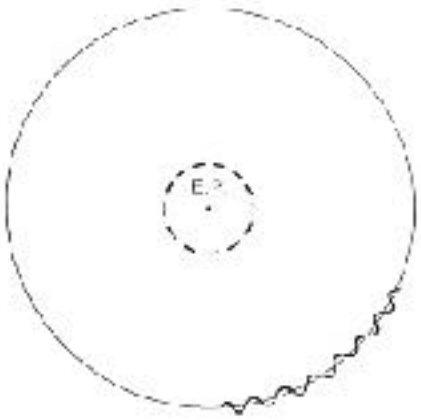
この運動自体は極めて微細なもの（18.6年かけてようやく一つの小さな波が描かれる程度）ですが、18世紀にブラッドリー〔訳註：（James Bradley, 1693年–1762年）。「章動」と「光行差」を発見し、地球が太陽の周りを回っている（地動説）ことを決定づけた18世紀イギリスの天文学者。〕によって発見されました。彼は天の北極の前進運動の中に、こうした揺れがあることを証明したのです。彼はまた、地球がこれまで述べてきたすべての運動に加えて、さらにこの運動を行わねばならない理由をすぐに見出しました（1747年）。というのも、これは地球自転軸の揺れに関する問題であり、私たちが最初「月軌道の運動」として見ていたものが、ここでは「地球の運動」として再び現れているからなのです。

ブラッドリーがこの地球の運動に対して、当時すでに強固に体系化されていたニュートンの万有引力理論の観点からのみ説明を与えようとしたのは、ごく自然なことでした。歳差運動の説明にもこの理論が引用されていたからです。彼はこう説明しました。

「月の節点が18.6年かけて黄道を一周するため、その間、月軌道は地球軌道に対してあらゆる可能な位置を取る。その結果、月は地球を常に異なる方向から引き寄せることになる。月は、地球のわずかに膨らんだ『赤道膨隆部』に対して特殊な作用を及ぼすからである（地球は極付近が平らで、赤道方向により多くの質量を持っている）。これにより、地球自転軸は月軌道の軸の周りを回転し始める。もし地球自転軸に独楽のような歳差運動が備わっていなければ、18.6年で一回転するはずだが、実際には歳差運動があるために、かすかな会釈、すなわち『章動』が生じるにとどまるのである」。

ここでこの説明を紹介したのは、皆さんにそれで頭を悩ませてほしいからではなく、別のことに注目してほしいためです。単に図31を見ただけでは、内側の円よりも1400倍も遅く外側の円を動いている北極点が、なぜ内側の円の動きを同時に示し、共に「会釈」をしなければならないのか、その理由は分かりません。そこには因果関係が見当たらないのです。「月軌道の軸が黄道軸の周りを回転している」と言われたところで、「それが地球の自転軸と何の関係があるのか、なぜ自転軸も同じテンポで黄道軸の周りを回らなければならないのか」という疑問が生じるでしょう。言い換えれば、「なぜ私たちは月の節点の運動を、地球の運動として再び見出すことになるのか」という問いです。

※図31



ニュートン主義の天体引力説は、これまで見てきたように、月が地球の赤道膨隆部に作用を及ぼすと想定することで、独自の回答を与えています。しかし、私たちはこうした、いわば粗雑な物質的因果関係から一旦目を逸らし、ただこう言うこともできます。「月の節点は18.6年かけて黄道帯を一周し、地球はその動きに、軽い揺れ、会釈、挨拶をもって寄り添っているのだ」と。そこには必ずしも「原因と結果」のような関係性が必要なわけではありません。

これこそ、ルドルフ・シュタイナーがこの運動（彼が頻繁に語った運動です）について用いた表現なのです！

「天文学者が章動、すなわち地球自転軸の震え、地球の中心を軸とした二重円錐状の回転と呼ぶものは、単に18年（18.6年）で一周するだけではなく、それと同時に別のことが起きています……。章動は月の運行と連動しており、章動とは月の運行以外の何ものでも表していない、と言うことができます。この章動は、月の運動の投影にすぎないのです」（1920年4月16日）。

〔訳註：1920年4月16日の講義は、GA201「Entsprechungen zwischen Mikrokosmos und Makrokosmos」第4講〕

これらの表現に触れると、私たちは「重さ」や「赤道膨隆部」の世界から、より軽やかな、リズムに満ちた世界へと引き上げられるのを感じます。シュタイナーはその世界が何であるかも教えてくれました。

「私たちは実際に、マクロコスモス（大宇宙）の呼吸を観察することができるのです。18年間にわたる月軌道の歩み、あるいは地球の章動を観察するだけでよいのです。地球は踊っています……。この踊りはマクロコスモスの呼吸を映し出しており、私たちはマクロコスモスの呼吸を覗き見ているのだと言えます。この章動、あるいは月の運動を通じて、私たちは『呼吸』に相当するものを見出しているのです……。つまり、私

たちの周囲にはたった一つの世界しかないわけではありません。私たちが感覚の世界として追うことのできる世界があり、その背後には別の法則に基づいた世界が横たわっています。それは、私たちの『呼吸』が私たちの『意識』に対して持っている関係と同じ関係を、私たちの世界に対して持っています。そして、私たちが月の運動、あるいはその現れである地球の章動を正しく解釈することができれば、その世界は自らを明かしてくれるのです……。両方の世界には、それぞれ独自の法則性を認めねばなりません。一つの法則性だけで世界を説明でき、すべては原因と結果の糸に繋がっていると考えている限り、人は恐ろしい誤謬に身をゆだねることになります。地球の章動や月の運動のような現象を通じて、実際に別の世界がそこに食い込んでいることを測り知ることができてはじめて、人は正しく理解できるのです……。私たちを取り巻く世界は、アストラル世界によって抽象的に浸透されているのではなく、アストラル世界を『呼吸』しているのです。そして私たちは、月の運動あるいは章動を通じて、その呼吸プロセス、すなわちアストラル的なものを覗き見ることができるのです」。

月の節点の巡り――一方では月軌道の浮沈として、もう一方では胸の呼吸のようなかすかな浮沈を歳差運動に付け加える章動として――、私たちの前にはリズムに満ちた出来事、呼吸する運動が姿を現します。

これにより、なぜ月の節点の周期が、第10回Letterで説明したように私たちの下意識や夢に関わっているのか、そして、人間自身の呼吸リズムがいかにこの法則性の中に組み込まれているのかを理解することができるのです。

ここで私たちは、シュタイナーが講義の中で繰り返し、繰り返し語り、その最晩年の講義の一つにおいてさえ改めて強調した、あの「数値比率」へと辿り着きます。すなわち、「呼吸のリズム」と「脈拍（血液）のリズム」の比、そして「章動（あるいはサロス周期）」と「歳差運動」の比がいずれも1：4（あるいは18：72）であるという関係についてです。

春分点は72年で1度（1°）逆行しますが、この「72年」という数字は、人間の一生の本来の持続期間を示しています。

また、月の節点（ノード）は18年（ここでは端数の7か月分は除外します）で一周します。人間は1分間に平均18回呼吸し、72回脈拍を打ちます。この平均値に基づくと、人間は1日に25,920回呼吸することになります。そして、約72年の生涯において、人間は25,920日を経験します。つまり、睡眠と覚醒を通じて、自らの「私（自我）」と「アストラル体」を25,920回出し入れ（呼吸）してきたことになるのです。このようにして、宇宙のリズムと人間のリズムは一つに結びついています。

すべてを「重力」の原理だけで説明しようとすると、物事はひどく鈍重なものになってしまいます。章動についてもそれはすでに見てきました。奇妙なことに、ニュートン体系における歳差もまた、太陽と月が地球の赤道膨隆部を引っ張る「牽引」の結果であるとされています。地球に最も近い天体である月は、太陽の2倍という最も強い力で地球を引きずっています。そのため、科学文献ではこれを「月太陽歳差（luni-solar Präzession）」と呼び、その引力の3分の2は月、3分の1は太陽に由来すると強調されています。章動は、この強大な月の牽引力（歳差）のわずかなバリエーションにすぎないというわけです。

こうした見方は、非常に重苦しいものではありますが、計算には適しています。それは、人間の中に「肉体」、すなわち実質的には「死体」しか見ない見方に対応しています。

しかし、単なる物理的なものを超えた「実在」においては、歳差は章動とは全く異なる世界の表現なのです。私たちの周囲には、互いに浸透し合う三つの世界が存在します。

「第一の世界、それは私たちを取り巻き、私たちが知覚している世界。第二の世界、それは月の運動を通じてその訪れを告げる世界。第三の世界、それは太陽の春分点の運動、つまりある意味で『太陽の道の歩み』を通じてその訪れを告げる世界。そこで私たちは第三の世界を目の当たりにしますが、その世界は、私たちの『意志』の世界が日常の意識にとって未知であるのと同様に、未知のままに留まっています」（1920年4月16日）。

これこそが歳差の世界であり、連続する文化期、そして人間精神の転生の歴史を司る世界です。人間は、自らには深く無意識なままに留まっている「意志」を通じて、地上における文化の進歩を引き起こすのです。

この第三の世界は――たとえニュートンの重力理論が確固たる結論としてそう主張しようとも――月とは何の関係もありません。月において、章動において、そして呼吸において働いているのは「ヤハウェ」です。感覚世界、特に目に見える星空においてその作用を明かしているのは「ルシファー」です。そして、人間の転生の世界、進歩する文化の世界――春の始まりに東から昇る太陽によって象徴される世界――へ、キリストが入ってこられるのです。

「問題は、単一の法則ではなく、三種類の法則性を探すことにあります……。月は私たちの世界システムの『呼吸プロセス』を指し示し、太陽は『エーテルによる浸透』を指し示しています。そして、章動に表現されている動きは、『アストラル性』に由来する動きであって、ニュートンの原理によって探し求められるべき何物でもないのです」。

キリストは、感覚知覚の世界の中にありながら、あの中の別の世界の法則に従って生きておられます。

「したがって、イエスの中に生きたキリストを考えるには、まず、通常の自然認識に備わっている法則性とは別の法則性に従って考える必要がありました。しかし、もしそのような別の法則性を認めず、世界はただ原因と結果だけで繋がっている因果的な世界だと信じ込むなら、そこにキリストという存在が居る場所はありません。三つの互いに組み合わされた世界を直視することによって、はじめてキリストのための場所を準備することができるのです」。

三種の世界、三種の法則性！「そして、これら三種類の法則性を、私たちはまさに『人間』の中に探求しなければならないのです」。

この第1年次に続くさらなる考察において、その探求がますます試みられることになるでしょう。